

博士論文

類義語動詞の語彙的意味の研究：

日本語の「習得」に関する動詞を中心に

令和2年3月

広島大学大学院総合科学研究科

総合科学専攻

蘇丹

目次

序章	- 1 -
1. 研究背景	- 1 -
2. 研究対象	- 3 -
3. 研究方法・構成	- 7 -
第一章 先行研究	- 9 -
1.1 動詞アスペクトについての研究	- 9 -
1.1.1 アスペクトによる動詞分類について	- 9 -
1.1.2 動詞の完成性・継続性	- 15 -
1.1.3 時間的限界について	- 16 -
1.1.4 運動の局面について	- 18 -
1.1.5 本研究におけるアスペクトの観点	- 21 -
1.2 語彙概念構造 (LCS) から項構造へのリンク	- 22 -
1.2.1 活動 (activity) [EVENT x ACT (ON y)]	- 23 -
1.2.2 到達 (achievement) [EVENT BECOME [STATE y BE [LOC AT z]]]	- 24 -
1.2.3 達成 (accomplishment) x/[EVENT x ACT (ON y)] CONTROL [BECOME [y BE AT z]]	- 26 -
1.2.4 状態 (state) [STATE y BE [LOC AT z]]	- 27 -
1.2.5 意味役割について	- 29 -
1.2.6 語彙概念構造 (LCS) のまとめ	- 32 -
1.3 クオリア構造 (Qualia Structure) について	- 34 -
1.3.1 名詞のクオリア構造	- 35 -
1.3.2 動詞のクオリア構造	- 37 -
1.3.3 動詞のクオリア構造のまとめ	- 44 -
1.4 複合動詞について	- 45 -
1.4.1 語彙的複合動詞と統語的複合動詞	- 45 -
1.4.2 複合動詞の V1・V2 の意味関係	- 47 -
1.4.3 「他動性調和の原則」と「直接目的語制約」	- 54 -
1.4.4 中国語の結果複合動詞の分類	- 57 -
1.4.5 結果複合動詞の項構造と V1・V2 意味関係について	- 60 -
1.4.6 中国語の結果複合動詞の CAUSE CHAIN について	- 65 -
1.4.7 本研究における複合動詞の観点	- 68 -
1.5 思考動詞について	- 68 -

1.5.1	思考動詞のアスペクト	- 70 -
1.5.2	思考動詞の主観性	- 72 -
第二章	「習得」に関する動詞のアスペクトについて	- 75 -
2.1	動詞の分類について	- 76 -
2.2	完成性	- 78 -
2.2.1	動作動詞の場合	- 78 -
2.2.2	変化動詞の場合	- 80 -
2.3	継続性	- 81 -
2.3.1	動作動詞の場合	- 81 -
2.3.2	変化動詞の場合	- 82 -
2.4	意志性	- 85 -
2.5	変化プロセスについて	- 89 -
2.6	まとめ	- 91 -
第三章	「習得」に関する動詞の語彙概念構造と項構造について	- 93 -
3.1	活動 (activity) の場合	- 93 -
3.1.1	活動動詞の LCS	- 93 -
3.1.2	活動動詞の項構造	- 95 -
3.2	達成 (accomplishment) の場合	- 97 -
3.2.1	達成動詞の LCS	- 97 -
3.2.2	達成動詞の項構造	- 101 -
3.3	まとめ	- 102 -
第四章	「習得」に関する動詞のクオリア構造について	- 103 -
4.1	動詞クオリア構造の小野 (2005) 式	- 103 -
4.1.1	「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の場合	- 103 -
4.1.2	「修める、習得する、マスターする」の場合	- 107 -
4.2	動詞クオリア構造の影山 (2005) 式	- 110 -
4.2.1	「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」	- 112 -
4.2.2	「修める、習得する、マスターする」	- 112 -
4.3	まとめ	- 114 -
第五章	「習得」に関する複合動詞の日中対照	- 116 -
5.1	結果複合動詞の項構造と意味役割	- 116 -
5.1.1	複合動詞の V1・V2 の意味関係について	- 116 -
5.1.2	複合動詞の項構造の受け継ぎ	- 119 -

5.1.3 複合動詞の意味役割の受け継ぎ	- 120 -
5.1.4 “学会”、“学到”に対応する日本語の場合	- 121 -
5.2 結果構文の主語と目的語の制約について	- 122 -
5.2.1 “学会”、“学到”の「他動性調和の原則」	- 122 -
5.2.2 “学会”、“学到”の「直接目的語制約」	- 124 -
5.2.3 中国語の複合動詞の処置構文化と受動文化について	- 125 -
5.2.3 日本語「学びとる」との対応	- 127 -
5.3 CAUSE CHAIN についての比較	- 127 -
5.3.1 “学会”、“学到”の CAUSE CHAIN について	- 128 -
5.3.2 日本語と中国語の場合の対照について	- 130 -
5.4 まとめ	- 132 -
第六章 「習得」に関する動詞と思考動詞の関連性	- 133 -
6.1 思考動詞の限界性について	- 133 -
6.2 「習得」に関する動詞の主観性について	- 136 -
6.3 思考動詞との関係	- 137 -
結 論	- 140 -
7.1 「習得」に関する動詞の語彙的意味	- 140 -
7.1.1 動詞が表す動作・変化という観点	- 140 -
7.1.2 活動動詞・達成動詞の内部構造	- 141 -
7.2 類義語動詞の語彙的意味の分析	- 142 -
7.3 本研究の意義	- 143 -
7.4 今後の課題	- 144 -
参考文献（日）	- 145 -
参考文献（英）	- 147 -
資料	- 149 -

序 章

類義語研究では普通、対象語の間に相違点を見つけることを目的として、意味のニュアンスや共起関係、また使用者の年齢・性別・出身などの側面が扱われている。それらの分析の側面は、母語話者の内省やコーパスによって把握し、最終的に類義語の使い方について外国語学習者に対する有効な提案を出す研究が多くみられる。

しかし、本研究の目的は、通常の類義語研究とは違い、対象語の使い方だけではなく、語のより深層的な意味、あるいは語の語彙的な属性を明らかにすることである。特に、本研究の対象語は動詞であり、動詞は文の中で重要な役を果たすので、語彙的な意味がいくつかの側面から捉えられる。例えば、動詞の語彙的アスペクト、また動詞の語彙概念構造による動詞の意味を捉えるなどの側面である。

研究背景として語彙主義の「語彙決定論」(Lexical Determinism)¹を中心にして、レキシコンモデルについて Levin (1993) の観点をあげる。この「動詞の振る舞いが語彙的属性によって決まる」という観点は本研究の出発点となっている。そして、それに関する語彙意味論 (lexical semantics) での概念、例えば「レキシコン」「語彙主義」などを研究背景で説明する。本研究の序論は研究背景以外に、研究対象、研究方法、研究構成からなる。研究対象では対象語となる類義動詞のグループを類義語辞典によって絞り、具体的な範囲を決める。そして、本研究で研究方法を明らかにし、それによって本研究の構成も明確にする。

1. 研究背景

語彙意味論には様々な理論的背景をもつモデルあるいはアプローチがある。その

¹ 「語彙決定論」というのは、動詞の統語的振る舞いは、語彙的に指定された属性によって決まるという仮定を示している。

1 つのモデルである「レキシコン」(lexicon) は人間の言語固有の語彙についての知識体系を指している。このレキシコンというのは、一般的な意味での辞書よりむしろ人間の内在的な語彙知識を指している。そのためにレキシコンは「心的辞書」(mental lexicon) とも呼ばれる。認知文法でレキシコンと統語の間に明確に一線を引かずに両者が同じ構成原理に基づくという考え方が一方、生成文法はレキシコンと統語の全く異なるシステムに帰結させる方法をとる。生成文法などの統語理論で基本的に受け入れられてきたレキシコンについての考え方は語彙主義と呼ばれる。語彙主義に基づくレキシコンモデルは、Levin (1993)、Levin and Rappaport Hovav (1995) などで提示されている。

語彙意味論で語彙主義の「語彙決定論」という観点によれば、動詞の統語的振る舞いは語彙的に指定された属性によって決まるということを示している。Levin (1993) では、動詞を対象として、動詞の意味から文の統語構造は概ね予測できると述べている。例えば、日本語の自他動詞の使役交替の例で、「鍵を壊す」と「鍵が壊れる」のように同じ意味が他動詞にも自動詞にも使われる。しかも、他動詞の目的語にあたる名詞が自動詞の場合での主語になるという現象は使役交替である。しかし、「蹴る」「誉める」などのような使役交替を持たない動詞もある。このような使役交替を持つものと持たないものがあるものが、動詞の意味によって決まっているという「語彙決定論」の観点である。

一方、「投射原理」(projection principle) で語彙主義の考え方に制限があることを示しているが、Chomsky (1981) によれば、「投射原理」は「語彙決定論」とほぼ同じ考えである。つまり、語の意味が文全体の構造を決定する仕組みが保証され、語彙情報が文法全体のガイドライン的な役目を果たしている。このような語彙意味論のモデルは文法に關与する意味情報を分析の対象とする。例えば、動詞の限界性 (telicity) は文法的な制約として働き、文法に關与する意味情報である。動詞の限界性とは違い、「色」に関する意味属性 (paint, color, bleach, redden, stain などの動詞が共有する性質) は統語的ふるまいを左右しないので、「語彙決定論」の分析の対象とされないのである。

従って、本研究では、類義語動詞として文法に關与する意味情報、あるいは意味的属性を分析し、文の構造との關係を重んじ、特定する類義語グループの意味について研究を行う。

2. 研究対象

語彙主義の枠の中でレキシコンのモデルは「意味に基づく動詞クラスモデル」があり、このモデルで動詞が確定的な意味情報によって分けられるクラス (discrete classes) に分類されている。基本的な意味を共有する動詞群は、一定の統語的振る舞いが示されるという観点がある。また、語彙的意味によって定義される動詞のクラスがレキシコンを構成するという語彙意味論のモデルは立てられる。このモデルでは意味が似ている動詞群は統語的特性も共通するという経験的な観察による動詞分類が行われる。例えば、研究背景で述べた Levin (1993) は類義語動詞のグループを分けて、文法に關与する意味情報として「構文交替」という現象に焦点を置いている。本研究の対象語には自他動詞の使役交替などの現象がないので、「構文交替」の側面から分析するのではなく、ほかの文法に關与する特徴を検討していきたい。

本研究で扱う研究対象は「習得」の意味を持つ日本語の動詞グループである。この動詞グループを選んだ理由は以下の3点になる。まず、類義語の先行研究では、動詞が全般的に研究されるのが多いであるが、本研究で特定する動詞グループの状況を分析する。また、もちろんほかの意味を持つ動詞グループも存在するが、「習得」の意味は動作がみられ、精神的な動きもある、という意味の豊かさが研究の意義が見られる。そして、この動詞グループでは和語・漢語・外来語があり、複合動詞もあり、動詞の形態が多様に見られる。従って、「習得」の意味を持つ動詞のグループを本研究の対象として選んだ。

つぎに、「習得」に関する動詞グループの範囲、つまりこのグループ内でどのような動詞があるのかを規定する。類義語辞典を調べれば、適応する動詞が多く、意味が關連する動詞も存在する。そこで、収録した項目数の多さと出版の新しさによって、『類

語大辞典』(2002)と『新明解類語辞典』(2015)の2つの辞典を選んだ。前者の項目数は7万9000で、後者の項目数は5万7000である。具体的に言えば、『類語大辞典』(2002)の「学ぶ」と「修める」という2つの小見出しの下にある語、また『新明解類語辞典』(2015)の「学習」という見出しの下位語彙から、本研究の対象語を抽出する。しかし、これらの項目の語は多く、本研究の目的とずれている動詞もあるので、(一)(二)で類義語辞典から出た「習得」に関する動詞の主要な一部とその意味を載せる。

(一)『類語大辞典』(2002)

修める：学問や技芸などを学んで、自分のものとする

習得する：技術などを習って自分のものとする

マスターする：技芸などを完全に自分のものとする

学修する：学問を修めること

研修する：知識や技芸を磨き修めること（「修める」の小見出し）

研修する：知識・技能を身につけるために実習すること（「学ぶ」の小見出し）

修習する：資格を取る試験のために、一定の期間、実務などを経験しながら学問や技術を修め習うこと

修得する：学問や技術を修めること。特に学業の課程や単位を学び終わること

嗜む：芸事などを（趣味として）身につけている

学ぶ：教えを受けたり、見習ったりなどして身につける

勉強する：学問や技能などを身につけようと努力すること

学習する：知識・技能などを（学校などで）系統的に勉強して身につけること

学修する：勉強して学問を自分のものとする

習う：教えられた知識・技術などを（そのとおりに繰り返して）覚え、身につける

兼修する：2つ以上のことを並行して学ぶこと

兼学する：2つ以上の学問・宗義などをあわせて学ぶこと

勤学する：学問を努め励むこと

練習する：(本番に備えて) 繰り返して習うこと

演習する：実際の場面を想定して練習を行うこと

…

(二)『新明解類語辞典』(2015)

学ぶ：①勉強する；②学問や技術の教えを受けて覚える；③経験から知識を得る

習う：①教えられたように練習して覚えようとする；②教わる

教わる：教えてもらう

師事する：師として仕え、その教えを受けること

学習する：知識を学び習うこと

学修する：(一定の課程を) 学び身につけること

勉強する：①学力・能力・技術を学び、身につけること；②経験から学ぶこと

履修する：資格や免許取得に必要な学科・課程を学ぶこと

習得する：習って身につけること

修める：学問や技術を学び、一定の成果を身につける

覚えこむ：知識や技能を身につける

マスターする：十分に習得し自分のものとする

既習する：それまでに学習したこと

独学する：独力で学ぶこと

自習する：自分だけで学習すること

予習する：習う前に自分で勉強する

復習する：習ったことをもう一度繰り返し自分で勉強する・練習すること

習熟する：習ってうまくできるようになること

熟練する：経験を積み、技術が優れていること

…

以上の(一)(二)で示した動詞の中で「習得する」や「学習する」の意味に近い動

詞、つまり、その意味の上に制限を加える場合も多くある。例えば、「予習する」「復習する」という動詞は、「勉強する」意味に「習う前に」「習った後に」のような時間的な制限を加えている。また、「演習する」「練習する」という動詞には「練習する」の意味もともにある。そして、「兼学する」が2つ以上のことを学ぶことと、「師事する」が師に従って学ぶことなどの動詞は、「学習する」や「習得する」の意味に近いが、ほかの意味要素が含まれることが明確である。

しかし、本研究は狭い範囲での類義語を対象とするので、意味のほぼ同じ動詞に絞りたい。つまり、以上の(一)(二)で示した動詞から「習得する」あるいは「学習する」の意味を持つ動詞だけを選んだ。それは次の(三)で示している動詞である。

(三) 本研究の対象となる動詞グループ（解釈が『類語大辞典』(2002)に従っている)

修める：学問や技芸などを学んで、自分のものとする

習得する：技術などを習って自分のものとする

マスターする：技芸などを完全に自分のものとする

学修する：学問を修めること

学ぶ：教えを受けたり、見習ったりなどして身につける

勉強する：学問や技能などを身につけようと努力すること

学習する：知識・技能などを（学校などで）系統的に勉強して身につけること

学修する：勉強して学問を自分のものとする

習う：教えられた知識・技術などを（そのとおりに繰り返して）覚え、身につける

研修する：知識や技芸を磨き修めること；知識・技能を身につけるために実習すること

最後に、本研究の対象となる動詞グループの定義をする。類義語辞典でよく見られ

る分類の名づけは「学習」であるが、「習得する」「マスターする」などの動詞は「習って自分のものとする」という意味で「学習」という意味を含めている。従って、「習得」という意味でこの動詞グループを定義し、本研究で「習得」に関する動詞グループで対象の動詞グループを指している。

3. 研究方法・構成

本節は研究対象で「習得」に関する動詞の範囲を決めたうえで、本研究の類義語動詞グループの語彙的意味を明らかにする目的で研究方法と研究構成を説明する。

研究方法について、まず語彙意味論のアプローチから分析する。1980年代の生成文法理論の進展に対応して、発展してきた動詞の意味の研究から派生してきた構成論的なアプローチは、語彙意味論の立場を持っている。この構成論的なアプローチで、語の意味を基本的な要素に分解する方法は、一般に「語彙分解」(lexical decomposition)とされている。

「語彙分解」という研究方法は主に「項構造」(argument structure) と「語彙概念構造」(lexical conceptual structure (LCS)) で行われる。項構造は、「動詞が文中での意味を充足させるために、項としてどのような要素を表す必要がある」(小野・由本 2015: 6) という考えが語彙意味論で指定されたものである。従って、項構造によって、動詞はどのような意味役割を担い、動詞の項はどのような形で捉えられるという動詞の情報は明らかにする。そして、語彙概念構造 (LCS) は、動詞の意味と構文形式の関係を捉えようとする分析で動詞の意味をより深く精密に分解する提案であり、項構造を経ず、直接的に統語構造と対応させる文法モデルである。例えば、MaCawley (1968) は、「生成意味論」 (Generative Semantics) において、kill という動詞を [CAUSE [BECOME [NOT [BE ALIVE]]]] のような構造に基づいて、動詞の意義素を分析した。

一方、項構造と LCS に対して、百科事典の知識をレキシコンの表示に取り入れようとするのが生成語彙論 (Generative Lexicon) のクオリア構造 (qualia structure) である。生成語彙論 (Pustejovsky 1995) によれば、クオリアには形式役割 (formal role) 、構成

役割 (constitutive role) 、主体役割 (agentive role) 、目的役割 (telic role) の4つの部分がある。項構造や LCS を用いるアプローチとクオリア構造を用いるアプローチは意味の構成論的な捉え方と合成的な意味構築のやり方において共通していて、この3つのアプローチを使えば、文法に関する意味情報をより多くの方面から捉えられる。

以上のアプローチのほかに、語彙アスペクトや複合動詞の研究も語彙意味論の研究分野である。語彙アスペクトは、動詞の表す状態や出来事を時間軸に沿って、進展する様態が捉えられる。また、複合動詞の分析は、複合された LCS によって複合動詞の意味関係がどこまで予測可能であるか、さらに対照言語学の観点から2つの言語の間の差異や、「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」の違いを意味構造によって捉えられるなどの問題となる。そこで、語彙アスペクトと複合動詞の観点も研究方法としてされている。

語彙意味論の研究方法に従って、本研究の構成は以下のようなになる。まず、第一章で先行研究をまとめ、本研究で使う観点を明らかにする。第二章から本論に入り、動詞アスペクトの内容について、「習得」に関する動詞を分類し、動詞の語彙的アスペクトの特徴をまとめる。そして、第三章は動詞の語彙的アスペクトを明らかにしたうえで、LCS と項構造について分析する。また、第四章でクオリア構造によって、動詞の特質を分析し、形式役割、構成役割、主体役割、目的役割という4つの部分から、「習得」に関する動詞の語彙情報を詳しく検討する。第五章で複合動詞の観点から、前項動詞・後項動詞の意味関係などの問題について検討する。それに、「習得」に関する動詞の語彙的意味で心理的な要素が見られるので、第六章で意志性・持続性・限界性というアスペクト的性質及び主観性について、思考動詞との比較を行う。結論において、本研究の結論を出し、「習得」に関する動詞の語彙的意味情報をまとめ、「習得」に関する動詞の語彙的意味と類義語研究への意義をまとめる。

第一章 先行研究

1.1 動詞アスペクトについての研究

現代の言語研究における動詞アスペクトによる動詞分類は、金田一 (1950) と Vendler (1967) がそれぞれ日本語と英語の代表とされている。そして、日本語の動詞について、奥田 (1977) は金田一 (1950) の分類基準と違い、日本語動詞の表す事象に動作があるか、変化があるかについて動詞を分類した。この動作・変化の観点によって、工藤 (1995) (2014) などの動詞分類も発展してきた。金田一 (1950) 、奥田 (1977) 、工藤 (1995) のような形態論的アスペクト対立に基づいた動詞分類に対して、Vendler (1967) の方は語彙的意味として持っているアスペクト的特徴に基づいた動詞分類である。また、Vendler (1967) をふまえ、日本語動詞を分類した研究には中右 (1994) 、三原 (2004) がある。そして、金田一 (1950) 、Vendler (1967) などのように動詞分類に関わるだけで、意味構造そのものを述べるものではないのに対して、森山 (1988) が主体変化、客体変化、維持、過程などの意味素性の組み合わせによって動詞のグループをきめ細かく分析している。

1.1.1 アスペクトによる動詞分類について

本節において各側面からの動詞分類を捉えながら、「習得」に関する動詞の語彙的意味の分析を目的として、動詞アスペクトについての動詞分類の方法をまとめてみる。

まず、Vendler (1967) の4分類を Croft (2012) によって (1) のようにまとめた。

(1) Vendler (1967) の4分類についての特徴

状態 (States):	状態	継続	非限界
動作 (Activities):	動態	継続	非限界
到達 (Achievements):	動態	瞬間	限界
達成 (Accomplishments):	動態	継続	限界

Croft (2012)

Vendler (1967) の4分類について、三原 (2004) によれば、まず状態性の基準によって状態動詞 (state verb) を取り出し、次に限界性の基準によって動作に必然的な終わりが無い活動動詞 (activity verb) を取り出すという観点でまとめられる。そして、限界動詞を瞬間性の基準によって、動作が瞬間的に遂行される到達動詞 (achievement verb) と、動作を行うのに時間を要する達成動詞 (accomplishment verb) に区別できる。従って、(1) の内容で示されるように、Vendler (1967) を「状態—動態」「継続—瞬間」「限界—非限界」という3つの側面からまとめられる。

一方、中右 (1994)、三原 (2004) が示しているように、Vendler (1967) は動詞の性質よりむしろ構文の性質を扱って、実際には動詞分類ではなく、動詞句 (VP) の分類に近いのである。例えば、Vendler (1967) で run (走る) は「活動」と「達成」両方に置かれ、run around (走り回る) は限界性を持たず、run a mile (1マイル走る) は限界性を持っている。つまり、run という動詞のアスペクトによって、動詞句また構文でのアスペクトが捉えられる。Vendler (1967) の4分類は動詞句などを述べる場合があるが、本研究では Vendler (1967) の4分類を利用する場合に、動詞そのものの性質を述べる。

次に、日本語のアスペクトについて、まず金田一 (1950) の4分類を検討する。

(2) 金田一 (1950) の4分類

状態動詞：状態を表す動詞。「—ている」をつけることがないことを特色とする。

「机がある」「英語の会話ができる」の「ある」「できる」など

継続動詞：動作・作用がある時間内続いて行われる動詞。「—ている」をつけるとその動作が進行中である。

「本を読む」「字を書く」の「読む」「書く」など

瞬間動詞：動作・作用が瞬間に終る動詞。「—ている最中だ」ということができない。「—ている」をつけるとその動作・作用が終わってその結果が残存していることを表す。

「人が死ぬ」「電灯がつく」の「死ぬ」「つく」など

第四種動詞：ある状態を帯びることを表す動詞。いつも「—ている」の形で状態を表す。

「山が聳えている」の「聳える」など

以上のように金田一 (1950) の4分類の特徴と例を記述している。この4分類の継続動詞と瞬間動詞は日本語の主な動詞を含んでいる。しかし、「続いて行われる動詞」と「瞬間に終る動詞」という基準が不十分であると考えられる。例えば、奥田 (1977) では金田一の分類はシテイルとスルの対立関係を述べていなかったという問題を指摘した。従って、継続動詞と瞬間動詞のスル形・テイル形が、それぞれどのような意味を示しているのかは重要な問題点である。そのために、奥田 (1977) は (3) のように動作動詞と変化動詞の分け方をまとめている。

(3) 奥田 (1977)

動作動詞：テイル形が「動作の継続」を実現する動詞グループ

歩く、飛ぶ、踊る、走る、洗う、砕く、割る、食べる、飲む、話す…

変化動詞：テイル形が「変化の結果の継続」を実現する動詞グループ

死ぬ、行く、帰る、入る、座る、煮える、壊れる、倒れる、はげる…

奥田 (1977) の分類において、金田一 (1950) を踏まえて、自動詞の場合に動作動詞・変化動詞は、継続動詞・瞬間動詞にそのまま当てはまる。例えば、「歩く、飛ぶ、踊る」と「寝る、死ぬ、消える」を比べると、語彙的意味の「動作」と「変化」とが明確に浮かび上がる。また、他動詞の「砕く、割る、潰す、切る」などの場合では、語彙的な意味は主体からみれば「動作」を表しているが、客体からみれば「変化」を表している場合もある。そこからみれば、他動詞では多くの場合、「動作」「変化」は主体・客体の関係の中で分離されていると奥田 (1977) では述べている。

その例外として、再帰動詞の「着る、脱ぐ、被る」などは「主体の動作」でもあり、「主体の変化」でもあり、「動作」と「変化」は統一されている。その現象から、「動作」は運動の形態であり、「変化」が運動の内容であるという結が引き出された。従って、奥田 (1977) によって、「動作」と「変化」は運動の形式的な側面と内容的な側面として、相互に対立しながら、1つに結びついている。

そして、工藤 (1995) はこのような動作・変化と主体・客体の関係に着目し、もう1つの動詞分類体系を完成し、その具体的な内容を以下の (4) で表している。

(4) 動詞の全体的分類

(A) 外的運動動詞

(A・1) 主体動作・客体変化動詞<内的限界動詞>

あたためる、あける、あてる、おとす、あつめる、あずける…

(A・2) 主体変化動詞<内的限界動詞>

かぶる、きがえる、あがる、あつまる、おちる…

(A・3) 主体動作動詞<非内的限界動詞>

うごかす、ふる、いじる、きく、いう、あそぶ、うごく…

(B) 内的情態動詞<非内的限界動詞>

(B・1) 思考動詞

おもう、かんがえる、あきらめる、あこがれる、あきれる…

(B・2) 知覚動詞

かんじる、きこえる、におう、見える…

(B・3) 感覚動詞

いたむ、うずく、しびれる…

(C) 静態動詞

(C・1) 存在動詞

ある、いる、そんざいする…

(C・2) 空間的配置動詞

そびえている、りんせつしている…

(C・3) 関係動詞

あたいする、あたる、当てはまる…

(C・4) 特性動詞

あますぎる、およげる、はなせる、すぐれている…

工藤 (1995: 73-77)

工藤 (1995) は以上の (A) (B) (C) ように日本語動詞を大きく分類した。その中で、(A) 外的運動動詞 (dynamic verb) は、時間の中に成立 (開始)・展開・消滅 (終了) し、場合によって、結果を残す、ものの動的運動を捉えている動詞らしい動詞であり、(C) 静態動詞 (static verb) は、時間の中への現象を問題にしない「異なる、意味する」や「甘すぎる、優れている」のような「関係・特性」を捉えているか、時間の中に現象したとしても、時間的展開性のない、「いる、存在する」や「そびえている、面している」のような「存在・空間的配置」をとらえている、スタティックなものである。また、この2分類のどちらにも所属するとは言い難い動詞グループが、(B) 内的情態動詞である。

工藤 (1995) によれば、日本語動詞の多数は「ものの動的な運動を捉えている動詞らしい」運動動詞²に属しており、運動動詞の語彙的な意味に複数のバリエントがあるので、下位分類を行う必要がある。そこで、奥田 (1977) の「動作・変化と主体・客体の関係」についての見解に従い、「主体動作客体変化動詞」(開ける、折る、消す…)、「主体変化動詞」(行く、来る、かえる…)、「主体動作動詞」(動かす、回す、打つ…) というような3分類に分ける。

しかし、以上のような分類の仕方のほかに、「そこに至れば運動が必然的に尽きる目標としての内的時間的限界の有無の観点から、telic な内的限界動詞と atelic な非内的限界動詞」(工藤 1995:72) という観点で分類することもできる。

以上の2つの観点は互いに無関係なものではない。つまり、変化は新たな結果状態を生み出すことによって必然的に終了する運動のタイプなので、変化を捉えている動詞は、主体の観点か客体の観点かにかかわらず、内的限界動詞である。それに対して、動作は成立しさえすれば、どこで中止されても成立したといえるので、必然的な終了限界のない非限界的な運動であり、非内的限界動詞である。

先行研究を踏まえて、本研究で動詞分類の観点によって、動詞分類の仕方は互いに違っているが、それらの動詞分類の間に共通している観点を(一)でまとめる。

(一) 本研究で扱う動詞のアスペクトによる分類についての観点：

- a. 変化・動作 (主体・客体)
- b. 限界・非限界
- c. 瞬間・継続

まず、「a. 変化・動作」という観点は、動詞の意味に新たな状態が生み出されたか否かについての考え方である。本研究の動詞は主に他動詞であり、主体・客体がそれぞれ変化・動作のどちらを担っているのかが動詞の意味にとって重要である。

²本研究での「習得」に関する動詞はすべて運動動詞に所属している。

また、「b. 限界・非限界」という観点は、動詞が表す運動の必然的な限界を持っているか否かということを示している。

そして、「c. 瞬間・継続」という観点は、動詞が表す運動の時間的な幅に注目している。この3つの観点に基づいて、次にアスペクト的意味による動詞の分析をまとめる。

1.1.2 動詞の完成性・継続性

工藤 (1995) では動詞のアスペクト的意味のバリエーションとして、「完成性」「継続性」「パーフェクト性」「反復性」を提案したが、その中の「完成性」「継続性」が動詞の語彙的意味と関連する基本的なアスペクト的意味であり、派生的意味の「パーフェクト性」「反復性」が、語彙的なものから解放されると述べている。従って、ここでは「完成性」「継続性」だけを取り上げ、具体的な様態をまとめる。

(5) 工藤 (1995: 80) の完成性・継続性

◎完成性＝限界づけられ性

「ひとまとまり性」:

運動（動作、変化）の成立＝開始限界から終了限界までを全一的にとらえる

「限界達成性」（終了限界達成性／開始限界達成性）:

開始の時間的限界か終了の時間的限界のどちらかのみとらえる

◎継続性

「動作の継続」

「変化結果の継続」

工藤 (1995) において日本語の動詞はスル形で「完成性」を、テイル形で「継続性」を表している。(5) で表しているように、完成性は大きく2つ、細かく3つのバリエーションがあり、すべて継続性を無視して、開始の時間的限界や終了の時間的限界を捉えて

いる。それに対して、「継続性」は奥田 (1977) に続いて、「動作の継続」と「変化結果の継続」という 2 つのバリエントがあると示している。運動の時間的展開段階の観点からいえば、前者は運動の終了限界に到達する前の過程段階であり、後者が終了限界に到達した後の結果段階である。動詞のアスペクト的意味の完成性・継続性から見て、完成性の場合に開始限界と終了限界がよく示され、継続性の場合に継続の局面が表す意味が違っている。従って、次に「開始限界・終了限界」と「運動の局面」という 2 つの状況を明らかにする。

1.1.3 時間的限界について

工藤 (2014) で動詞の分類による時間限界のあり様は次のように明確に記述されている。

(6)

① 主体動作客体変化動詞 (開ける、着せる、建てる)

開始限界 (主体動作起動) 必然的終了限界 (客体の変化達成)

●~~~~~●.....

② 主体変化動詞 (開く、腐る、建つ)

必然的終了限界 (変化達成)

~~~~~●.....

③ 主体動作動詞 (揺する、飲む、歩く)

開始限界 (主体動作起動)

●~~~~~

工藤 (2014: 204)

まず、①主体動作客体変化動詞の場合では、客体の変化が達成され、主体の動作が必然的に終わる「必然的終了限界」があるとともに、主体の意志的動作が起動する「開

始の時間限界」のあることが示されている。また、②主体変化動詞には、意志的動作の側面がないので、変化達成の「必然的終了限界」が焦点化されている。そして、③主体動作動詞には、変化の側面がないため、必然的に終了する時間限界がない。一方、主体の意志的な動作が起動されるので、「開始限界」の方に焦点が置かれている。

金水 (2000) は動詞のタイプと時間的限界の関係について、「運動動詞が表す出来事の時間的な構造」で示している。金水 (2000) によれば、図 1-1 の構造はすべての動詞が持っているのではなく、むしろ構造のどの部分を持っているかによって動詞の意味的特徴が分った。すなわち、過程の段階を持たない動詞もあり、結果状態がない動詞もある。

その構造のなかで、「準備的段階」は出来事が生起する前の段階を指している。そこで、「過程」とは、運動の主体の活動（意志的なものが典型であるが、無意志的なものもある）を指し示している。典型的に開始限界と終了限界を持つ「過程」は「動作」と呼ばれる。つまり、「過程」を持つ動詞は動作動詞と呼ばれる。

また「結果状態」とは、動詞が表す出来事が達成されたときに必然的にもたらされる状態のことである。結果状態は、動詞の主語に現れるか、目的語に現れるかという区別がある。その前者の結果状態を語彙的意味として含む動詞は変化動詞と呼ばれる。

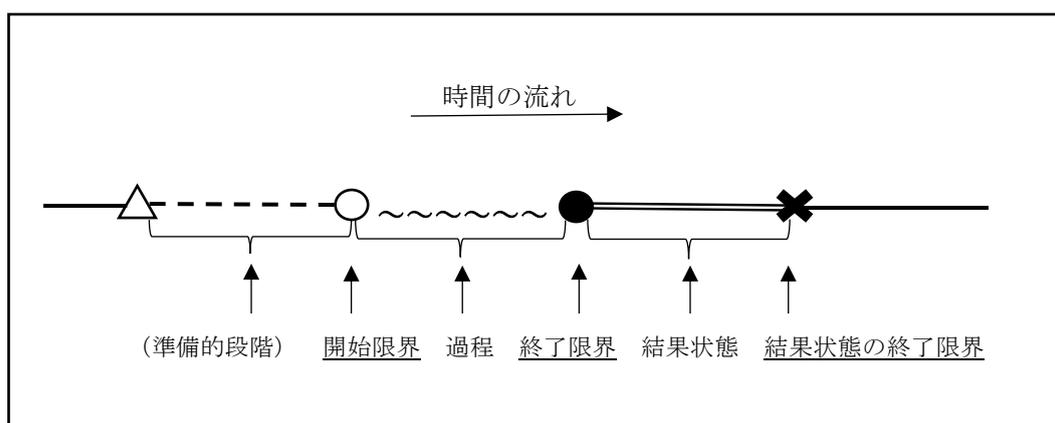


図 1-1 「出来事の時間的な構造」(金水 2000: 16)

先行研究から見れば、時間的限界について、金水 (2000) は工藤 (2014) とほぼ同じ観点を持っているが、工藤 (2014) の方がその限界時点の間の段階について詳しく説明した。その結論として、動作動詞 (3 時から 5 時まで本を読む) は「過程」を持つものに対して、変化動詞 (熊が死ぬ) は「結果状態」を持っている。そして、次の節で動詞が表す運動の局面、特に継続の局面の視点から考える。

#### 1.1.4 運動の局面について

「局面」という用語は、動きがどのようなあり方をしているのか、ということを指している。局面には、持続的なものと、一時点的なもの、と大別される。森山 (1988) は「時定項分析」という分析方法を提案した。それは、動きの質的变化を表す点 (時定項) を規定し、それを組み合わせることによって意味を総合的に分析する方法である。そのなかで、持続の局面について「過程」「維持」「結果持続」という 3 種を示した。

##### (7) 持続の局面の 3 種

- |              |        |
|--------------|--------|
| ① 人が三時間歩く。   | 「過程」   |
| ② 三時間時計がとまる。 | 「維持」   |
| ③ 人が三時間座る。   | 「結果持続」 |

森山 (1988: 141-142)

動きに持続があるかどうかは、期間成分 (例えば、(7) の例文での「三時間」) の共起によって調べられる。期間成分が共起することは、動詞句の表す動きが期間を有するということである。広い意味で動きの持続を総称し、「持続」の局面と呼ばれる。その下の 3 種の「過程」は、「動きが運動として展開している期間」を指し、「結果持続」は「動きの結果が持続的である」場合を指している。また、最後の「維持」は、前二者の中間的なものとして、「動きの結果の保存が主体に行われる」場合である。

森山 (1988) は前節での金水 (2000) と比べると、動作動詞が表す「過程」の点で一

致している。しかし、変化動詞の場合には区別がなされる。つまり、動きの結果が主体的に行われるかどうか、ということである。簡単に言えば、「主体の意志性」ということである。工藤 (2014) でも、時間限界のあり様には、「客体における変化の有無、主体の意志性の有無も絡み合っている」(工藤 2014: 203) というように、「主体の意志性」の重要さが提示されている。

次に、高橋 (2003: 68) は「ひとつの運動を時間的に組み立てている、それぞれの過程的な部分」を局面と呼ぶ。基本的な局面として、動作動詞の「始発の局面・動作の局面・終了の局面」の3局面、変化動詞の「変化の局面・結果の局面」の2局面が提示されている。そして、完成相と継続相の局面を次のようにまとめた。(8)の動作動詞・変化動詞と完成相・継続相についての考え方は奥田 (1977)、工藤 (1995) と一致している。

(8)

- ① 完成相の基本的な用法は、運動の局面を取り出して、まるごとのすがたでさしだすことである。
- ② 動作動詞の継続相の基本的な用法は、動作の局面を取り出して、持続の中にあるすがたでさしだすことである。
- ③ 変化動詞の継続相の基本的な用法は、結果の局面を取り出して、継続の中にあるすがたでさしだすことである。

高橋 (2003: 69)

そして、高橋 (2003) は変化動詞を主体の変化動詞と対象変化動詞という2つの場合に分けて分析した。その中の前者に、「瞬間的にパッと変わる変化」と「時間をかけてゆっくり変わる変化」の2タイプがある。つぎの(9)の4例において、前2例が瞬間的な変化であり、後2例は時間のかかる変化である。

(9)

- そのとき勝手口のほうの戸があいた。(武者小路実篤「友情」)
- なかの話しごえがびたりとしずまった。(伸子)
- しだいにスピードをました。(約束)
- 多数のポリオ患者が発生し、おおきな社会問題に発展した。(生命の暗号を解く)

高橋 (2003: 71)

また、(9) の 2 タイプを図で表せば、つぎのようになる。

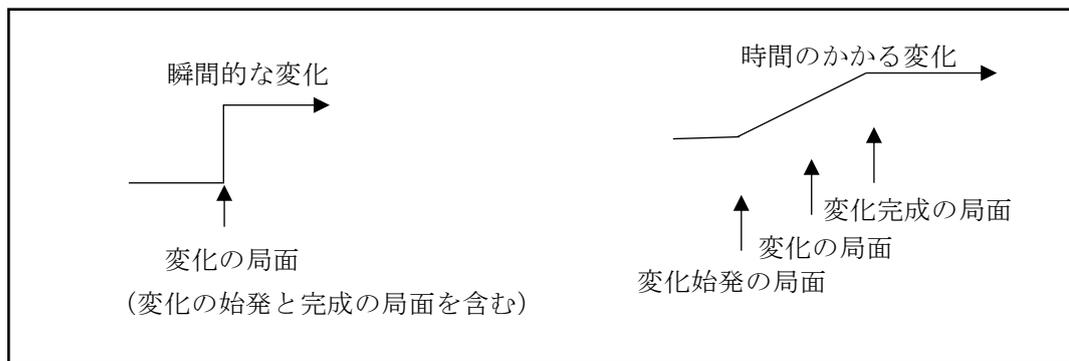


図 1-2 瞬間的な変化と時間のかかる変化の局面 (高橋 2003: 72)

高橋 (2003) によれば、実際の例から、瞬間的な変化として表すことが多いが、時間のかかる変化もかなり存在すると述べている。そこで、時間のかかる変化の場合において、変化の局面をとらえるか、完成の局面をとらえるかも問題になる。高橋 (2003) の観点と違い、工藤 (2014) では「変化が瞬間的に起こる場合は少なく、普通一定の時間がかかる」と主張し、変化の過程が短くても、進展プロセスがあるとしている。本研究は高橋 (2003) と同じ捉え方で、瞬間的な変化・時間のかかる変化という 2 つの様態を考えていきたい。

### 1.1.5 本研究におけるアスペクトの観点

前節で動詞のアスペクトに関する語彙的意味の内容について取り上げたので、本研究におけるアスペクトの観点は以下のようにまとめる。

第 1.1.1 節の動詞分類の内容について、P14 の (一) の「変化・動作 (主体・客体)」「限界・非限界」「瞬間・継続」という 3 つの対の観点をまとめた。それらに基づいて、第 1.1.2 節～第 1.1.4 節の内容を踏まえて、本研究の観点を示す。

まず、変化があるか、動作があるかについて、動詞の主体あるいは客体の状態に変化があるか否かを考察する。それによって、動詞の基本的な分類、つまり、動作動詞・変化動詞の分類ができる。通常、動作動詞には動作の必然的な終了限界がないため、「継続」で表される。また、変化動詞は変化が達成する時点でひとつの限界時点と見なされ、限界性がみられる。

しかし、動詞の完成性・継続性の場合によって、動詞が表す限界性は違ってくる。例えば、動作動詞はスル形で完成性を表し、時間帯を表す副詞と共起すれば、開始・終了限界を持つ。変化動詞のスル形は変化達成時点に焦点を置いているので、終了限界もある。また、テイル形は継続性を表すために、一般的に動作動詞は動作継続、変化動詞が結果継続を表す。

そして、変化動詞の変化は 2 つの観点で分ける必要がある。1 つ目は、変化が主体・客体のどちらに対して行われたか、変化が主体・客体のどちらに発生したか、という問題である。この観点によって、動作動詞・変化動詞をさらに「主体動作客体変化動詞」「主体動作主体変化動詞」「主体変化動詞」などのように詳しく区別できる。2 つ目は、変化が瞬間的な変化か、時間のかかる変化か、つまり変化の過程があるか否かという問題である。もし、変化過程があれば、テイル形の場合に結果継続を表す以外に、変化進行の継続も表せる。

以上の観点に基づいて、第二章の分析を通して、P91 では「習得」に関する動詞のアスペクト的意味の結果が出る。

## 1.2 語彙概念構造 (LCS) から項構造へのリンク

語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure、以降は LCS と略する) は動詞が表す概念的な意味を抽象的な述語概念で表示する構造である。この構造は Rappaport & Levin (1988)、Jackendoff (1990) などによって提唱された考え方から発展してきた。意味論によって、言語の意味は基本的に、概念的意味 (conceptual meaning) と含蓄的意味 (connotative meaning) がある。概念的意味は言語表現の基本的、根幹的意味を表し、含蓄的意味は意味のプロトタイプや、メタファーによる意味拡張に重要な働きをする。LCS がその中の概念的意味のことを表す。

LCS を想定するときに、重視されるのは統語構造への反映である。例えば、影山 (1996) では gallop、canter、trot という馬の走り方を表す移動動詞のグループを挙げている。この動詞グループで、相互にどのように異なるのかという細部の問題は、LCS で検討する段階では考慮しない。しかし、gallop、canter、trot は動詞として、いずれも to~ という到着点を取る形であるのに対して、cry や laugh のような動詞は到着点を取れない (\*He cried / laughed to the store.) (影山 1996: 48)。このように統語構造に反映されるような「意味」の特徴を探るのが LCS の働きである。LCS は基本的に各単語の概念的意味を示すが、そのような静的な表示であるだけでなく、組み替えや合成のような動的な動作も受け、文法内の 1 つの表示レベルと位置付けられる。

また、項構造 (argument structure) というのは、動詞が特定の意味役割に関する情報である。例えば、P30 の例 (22) での動詞 stand、kick、travel の項構造は、それぞれ stand <対象, 場所>、kick <動作主, 対象>、travel <動作主/対象, 起点, 着点> で示している。小野 (2013) によれば、動詞の意味を項構造として捉える利点は 2 つある。1 つ目は、同じ項構造を指定する動詞が類似の意味を持つことが予測できる。2 つ目は、1 つの動詞が異なる項の表現パターンを持つことを説明できる。これを項の交替 (argument alternation) という。本研究で扱う動詞グループは類似の意味を持つので、1 つ目の利点に着目して、項構造を類義動詞の分析に応用する。

本研究では影山 (1996) が提案した LCS に基づいて分析する。以下は影山 (1996) の

LCS を鋳型として挙げる。影山 (1996) の LCS は Vendler の 4 分類 (活動動詞、到達動詞、達成動詞、状態動詞) によって、4 つの LCS をまとめているので、第 1.2.1 節～第 1.2.4 節では各動詞分類の LCS を説明する。つぎに、第 1.2.5 節は意味役割及び Vendler の 4 分類の動詞の項構造をまとめる。最後に、第 1.2.6 節は Vendler の 4 分類の動詞の LCS の関係をまとめたうえで、本研究の着目点を示す。

### 1.2.1 活動 (activity) [EVENT x ACT (ON y)]

影山 (1996) では ACT という記号を使い、継続的活動を表している。しかし、ACT の概念の導入以前では、DO という意味概念が Dowty (1979) によって設定された。しかし、意図的であるということは活動動詞の継続相と対応できないので、意図性を含む DO ではなく、Pinker (1989) の ACT という概念を使用した。

活動動詞の意味構造は自動詞と他動詞の両方に対応しうる。継続活動を表す意味要素として設定された ACT という概念は、一項述語としても二項述語としても機能することを示している。一項述語として機能する場合には work, talk, dance などの非能格自動詞に対応するのに対し、二項述語としての用法では touch, hit, kick のような接触・打撃の他動詞に対応する。従って、非能格自動詞と接触・打撃他動詞は ACT という意味概念を共有することになる。

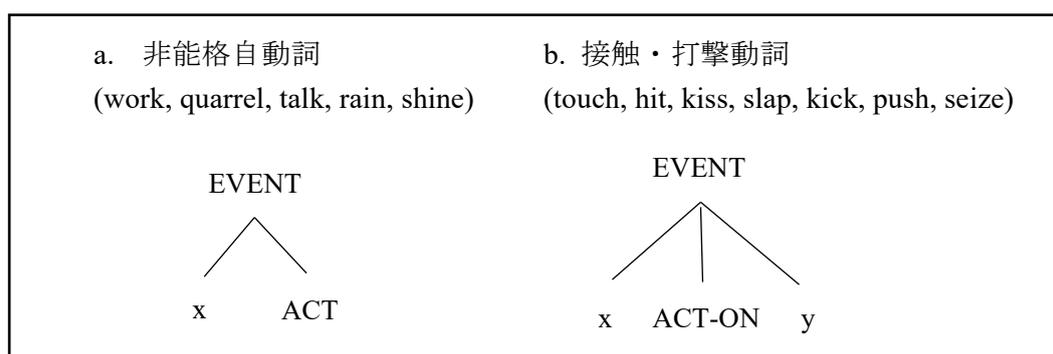


図 1-3 活動動詞の自他動詞の場合の LCS (影山 1996: 68)

他動詞的な用法では直接目的語に当たる要素が作用対象を表す前置詞概念 ON の目的

語として、一種の場所的な表現として捉えられている。この「場所的な表現」は作用対象の場所性として把握されている。

接触・打撃動詞と状態変化動詞は同様に、目的語が被動者であり、主語の行為によって何らかの影響を被っている。しかし、状態変化の有無によって対象が区別されているので、両方の目的語を同等に扱うことは適切ではない。つまり、ACT - ON の目的語は接触・打撃の及ぶ作用対象に過ぎず、状態変化の対象 (Theme) ではない。状態変化の対象はあくまで状態述語 (BE) の主語とされている。これは次の日本語の「てある」構文で説明できる。

(10) a. 状態変化

鍵が開けてある。

洗濯物が乾かしてある。

おにぎりが握ってある。

b. 接触・打撃

\*お父さんの肩がたたいてある。

\*ボクシングの相手がなぐってある。

\*杖が握ってある。

影山 (1996: 72)

例えば、(10) の例文のように、「握る」は「杖を握る」と「おにぎりを握る」での意味は違う。前者は接触動詞 (ACT ON) であるが、後者は状態変化動詞である。「てある」構文では状態変化動詞が使えるが、接触・打撃動詞は使えない。つまり、「\*杖が握ってある」は非文となり、「おにぎりが握ってある」は言える。

### 1.2.2 到達 (achievement) [EVENT BECOME [STATE y BE [Loc AT z]]]

「到達」の LCS では BECOME が変化を表し、BE が状態を表す。そして、AT は位置を抽象化した概念である。また、影山 (1996) によって、Vendler の「到達」は「物理的移動」と「抽象的变化」の2つの場合に適用できる。

まず、「物理的移動」の場合に、同じ動詞であっても、BECOME と BE のどちらに焦点をおくのかの違いがある。例えば、次の例文で BECOME は「～時間で」といった時

間枠の限定表現であり、BE は「～時間」という継続時間表現である。(11a) の「入れる」の場合は BECOME に焦点を置き、(11b) の「入れる」が BE に焦点を置いている。つまり、「入れる」は BECOME にも BE にも固定された焦点を持たないと考える。

(11) a. 車を 3 分で車庫に入れた。

b. 車を 1 時間車庫に入れた。

(12) CAUSE [BECOME [車 BE AT-IN-車庫]]  
                  |                  |  
                  3 分で          1 時間

影山 (1996: 57-58)

「物理的移動」として、継続的な移動を表す MOVE という概念もある。BECOME が持つ瞬間相と、MOVE が持つ継続相の相違は、出発ないし到着という瞬時的な位置変化 (BECOME) と、ある程度の時間幅を要求するような継続的な移動 (MOVE) とを区別する。例えば、例(13)での「どんだん」は動作の進行を意味するので、(13a) の MOVE と共起するが、(13b) の BECOME と矛盾する。

(13) a. 彼はどんだん歩いた／泳いだ／進んだ。

b. \*彼は旅館にどんだん着いた。\*彼は家を 8 時にどんだん出た。

影山 (1996: 59)

また、「抽象的な変化」の場合に、状態の変化も BECOME 型と MOVE 型に分類できる。MOVE TO～も BECOME BE AT～も結果状態に至るという含意を持つ点では同じであるが、MOVE が未完了 (atelic) であるのに対して BECOME は完了 (telic) であるというアスペクト的性質で異なっている。

例えば、例 (14) のように、(14a) (14b) では段階的变化を表す意味に解釈できない。しかし、BECOME は必ずしも一瞬の出来事に限られない。目標状態に切り替わるのは

一瞬であるが、そこに至るまでの時間幅が認められる。従って、「スープが徐々に温まった」(影山 1996: 61) のような漸次性が表せる。また、(14c)(14d) では「3 時間」は店が開くまでにかかる時間ではなく、営業中の時間であり、「30 分」かけて電気が消えるのではなく、30 分間停電したことを指している。このように、継続時間副詞は、状態変化が完了するのにかかる時間ではなく、その変化が終わった後の結果状態が続いている時間を表す。

- (14) a. \*スープが 2、3 分だけ温まった。  
 b. \*大根が 15 分間煮えた。  
 c. あの店は、午後の 3 時間ほどだけ開く。  
 d. 停電のため、電気が 30 分間消えた。

影山 (1996: 61)

影山 (1996) によれば、日本語では、「てある」構文に適合するか否かは BECOME と MOVE を判断する 1 つの基準である。例えば、(15a) は、対象物が状態変化を起こし、その結果状態が残ることを意味する。従って、結果状態を伴わない接触や打撃の動詞、あるいは移動の動詞はこの構文に馴染まない。

- (15) a. お湯が沸かしてある。      b. \*肩がたたいてある。  
       野菜が炒めてある。            \*国道が通ってある。  
       時計が修理してある。        \*橋が渡ってある。

影山 (1996: 65)

### 1.2.3 達成 (accomplishment) x/[EVENT x ACT (ON y)] CONTROL [BECOME [y BE AT z]]

達成動詞の場合に、kill、break、put という位置変化・状態変化を表す他動詞は例として挙げられる。このような動詞は主語の何らかの行為によって、目的語の状態変化

ないし位置変化が引き起こされること、言い換えれば「使役 (causation)」を意味する。使役の概念を表す CAUSE と CONTROL の間の基本的な違いは結果の成立を含意するかどうかというところにある。

具体的に言えば、次の例 (16) で CAUSE と CONTROL の違いを説明する。

(16) a. \*John turned on the light, but the light didn't come on.

b. 電気をつけたけど、つかなかった。

影山 (1996: 85)

例 (16a) では John turned on the light. が CAUSE で表せば、[John CAUSE [BECOME [the light BE ON]]] のようになる。ここでの CAUSE は結果の成立を含意している。従って、例 (16a) は非文になる。しかし、例 (16b) の日本語の場合に、もし「つける」の使役の概念を CAUSE で表記すれば、例 (16b) の意味は矛盾になる。

そこで、達成動詞の LCS では使役の概念を CONTROL という表記で使う。影山 (1996) によれば、X CONTROL Y が表す意味は「X が Y の成立を直接的に左右する」ということを表す。つまり、CONTROL は「Y の成立を直接的に左右する」という程度の意味であるが、必ずしも Y の成立を含意するわけではない。

CONTROL の意味は 2 つの場合がある。1 つ目は、もし Y の成立が含意されれば、CONTROL は使役の意味と解釈できる。2 つ目は、もし Y の成立が含意されなければ、Y は「目標」という程度に解釈される。いずれの解釈になるのかは、焦点が X CONTROL Y の X に置かれるか、Y に置かれるかによって決まる。X に置かれる場合は「行為焦点」と呼ばれ、日本語と対応する。それに対して、Y に置かれる場合は「結果焦点」と呼ばれ、英語と対応する。

#### 1.2.4 状態 (state) [STATE y BE [LOC AT z]]

状態動詞の静止状態は様々なタイプの事象の中で最も基礎的なものである。状態動

詞の LCS は BE と AT のような述語で表記する。その中で BE の意味として、物理的存在を表す Position と、抽象的状态を表す Identification と、所有を表す Possession の 3 つの意味がある。また、BE は既に継続性の意味を固有に持っているので、日本語の「～している最中だ」の構文は状態動詞と共起できない。BE の 3 つの意味について、次の例文で説明する。

(17) a. She is home. [STATE she BE<sub>Position</sub> AT-[Place home]]

b. She is healthy. [STATE she BE<sub>Ident</sub> AT-[State healthy]]

影山 (1996: 52)

影山 (1996) では 'BE AT-z' という場所的な意味概念が物理的な存在だけではなく、抽象的な状態も表している。例 (17a) での She is home. の物理的位置に対して、例 (17b) の She is healthy. は抽象的な状態である。

(18) 存在：社長のガレージには高級車が 3 台もある。

社長の家に隠し子がいる。

所有：社長には高級車が 3 台もある。

社長に隠し子がいる。

影山 (1996: 53-54)

以上の例 (18) のように、「いる」と「ある」はそれぞれ存在 (BE<sub>Position</sub>) と所有 (BE<sub>Possession</sub>) に分けられる。存在 (BE<sub>Position</sub>) と所有 (BE<sub>Possession</sub>) の違いとして、所有文では主語の所有者は人間の場合が多い。

そして、AT は位置を抽象した概念で、日本語での「に」と対応する。日本語の「で」も場所を表すが、「で」が活動の起る場所を表す副詞であるのに対して、「に」は動詞によって指定される項である。

- (19) a. 日本に1億2千万人の人間がいる。  
b. 台風は鹿児島に上陸した。  
c. 入社5年目で、課長に昇進することになった。

影山 (1996: 51)

静止位置の例 (19a) で「日本に」は状態動詞の「いる」が必要とする項である。また、例 (19b) の「に」は動きを表す動詞にとって必要な項である。例 (19c) で物理的な位置ではなく、抽象的状态を指している。以上の場合はずべて AT という概念に対応する。

### 1.2.5 意味役割について

語彙意味論では、動詞の意味を分析する重要な観点として、アスペクト、語彙概念構造、意味役割という3つがある。前節では、アスペクトと語彙概念構造の内容について検討したので、本節は意味役割を考察する。

まず、動詞の項 (argument) について説明する。動詞の項は、動詞の意味が成立するために必要な要素である。項は動詞が選択する要素であるため、文中での省略ができない。それに対して、動詞に選択されない要素は付加詞 (adjunct) という。これは文中で省略できる要素である。次の例文で、項と付加詞の違いについて述べる。

- (20) a. Lionel Messi is on the pitch.  
b. \*Lionel Messi is.  
c. Lionel Messi kicked the ball on the pitch.  
d. Lionel Messi kicked the ball.

小野 (2013: 136)

例 (20) は (20a)、(20c) とそれぞれの文の前置詞句 on the pitch を省略した文の (20b)、

(20d) である。(20a) では be 動詞が前置詞句 on the pitch を選択し、省略できないので、(20b) は非文になる。また、(20c) では前置詞句 on the pitch が動詞 kick に選択されていないので、項ではない。従って、(20d) のように省略できる。

次に、意味役割 (semantic role) について詳しく検討する。項の意味を明示すれば、動詞の意味を表すことが可能である。従って、項の表す意味である意味役割で分析することは、動詞の意味を分析する方法の 1 つになる。意味役割には何種類かがあり、動詞の意味は意味役割の組み合わせによって表せる。具体的に言えば、意味役割の種類は以下に示すようになる。

(21) 動作主 (Agent) 行為を行う人、他の対象に働きかけるもの

被動作主 (Patient) 動作の影響を受けるもの

対象 (Theme) ある状態にあるもの、移動の主体となり、変化の影響を受けるもの

経験者 (Experiencer) 感覚・感情の担い手

場所 (Location) 対象 (Theme) が存在する場所

起点 (Source) 物の移動の始点

着点 (Goal) 物の移動の終点

原因 (Cause) ある状態変化を引き起こす原因

命題 (Proposition) 文が表す意味内容

文で以上の意味役割を組み合わせる例は以下の例文である。

(22) a. The statue stood beside the fountain. (その像は噴水の脇に立っていた。)

対象                      場所

b. Messi kicked the ball. (メッシがボールを蹴った。)

動作主                  対象

c. Marvin traveled from Boston to San Francisco.

動作主/対象      起点      着点

(マービンがボストンからサンフランシスコまで旅行した。)

小野 (2013: 137)

(22a) では動詞 **stand** に選択される項がそれぞれ対象の役割と場所の役割を担っている。また、(22b) の動詞 **kick** は主語と目的語に、動作主・対象の意味役割を与える。(22c) での動詞 **travel** は移動を表すので、主語は行為の主体として動作主の役割が振られるが、移動するものとして対象の役割も持つ。対象の役割を持つものは、起点から着点まで移動するものが前置詞句で表される。

(23) a. 私はバイオリンが好きだ。

経験者

b. 地球温暖化が異常気象を招いた。

原因

c. 駅員は、この電車が一番早く成田空港に着くと言った。

命題

申 (2009: 41-44)

例 (22) で示した以外の意味役割は例 (23) であげる。経験者はある心理、知覚、状況を経験する人なので、日本語は第一人称の場合が多い。(23a) では「好き」という心理を経験する「私」が経験者である。(23b) で主語は原因の意味の役割を持ち、状態変化を引き起こすという意味を表す。最後に、命題という意味役割は、思考動詞、知覚動詞などの述語が取る。一般的に目的語節として、命題の意味役割は表されるが、主語節が命題として表される場合も見られる。(23c) は目的語節が命題の意味役割を持つ。



達成 (accomplishment)



状態 (state)



影山 (1996)

以上の4つの構造では、活動動詞の構造は非能格構造で、到達動詞と状態動詞の構造は非対格構造である。そして、達成動詞は使役構造であり、他の3つの構造を含んでいる。使役構造の中で、使役作用の部分を上位事象 (super-Event)、結果の部分を下位事象 (sub-Event) と呼ぶ。具体的な構造は以下の図のように示す。

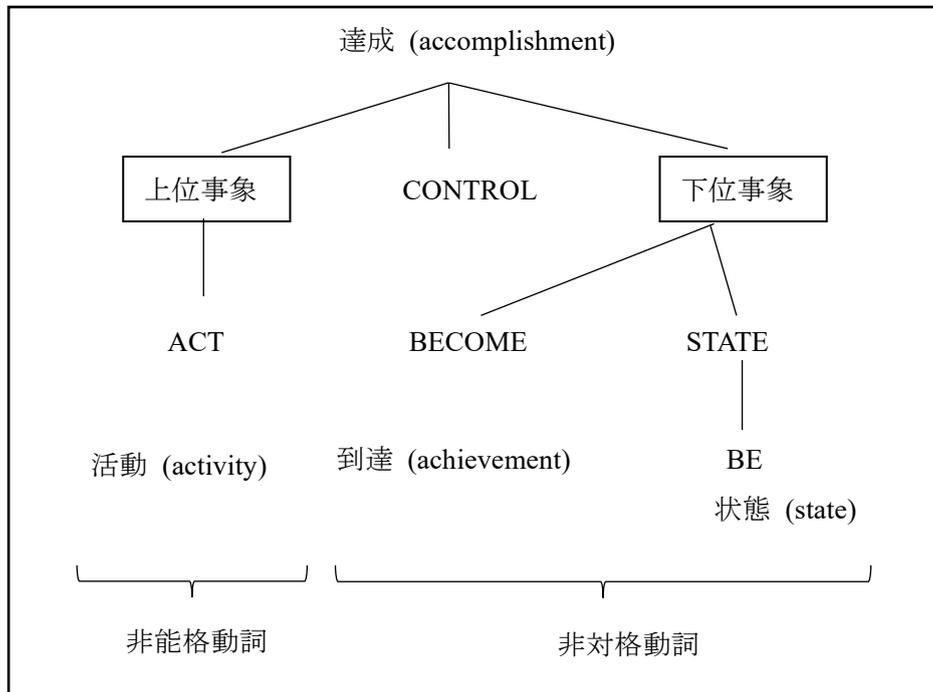


図 1-4 使役構造の雛形 (影山 1996: 90)

影山 (1996) によれば、LCS は統語構造とは無関係ではなく、何らかの一定の法則

で統語構造と結びついている。具体的に言えば、LCSにおける変項 (x や y) が統語構造で主語になるのか、目的語になるのかという対応規則が必要になる。概念構造と項構造の結びつけ規則は次のように提案されている。

(26) 外項規則：上位事象の主語が外項になる。

内項規則：下位事象がある場合は BE の主語が、また、下位事象がない場合は ACTION の対象が、内項になる。

影山 (1996: 92)

本研究で扱う「習得」に関する動詞グループは、アスペクトの分析によると、活動と達成の2つの場合に分けられる。従って、LCSと項構造についての分析はこの2つの場合に絞って検討する。そして、先行研究に基づき、本研究は2つの問題点について検討する。

まず、影山 (1996) で活動を表す他動詞は「接触・打撃動詞」で提示された。しかし、「接触・打撃動詞」ではない。従って、「習得」に関する動詞の活動を表す場合に「接触・打撃動詞」との関係は1つ目の問題となる。

また、「習得」に関する動詞の達成を表す場合に、LCSがCONTROLで使役を表すか、それともCAUSEで表すかは2つ目の問題となる。

以上の2つの問題は第三章のP102で解決する。

### 1.3 クオリア構造 (Qualia Structure) について

Pustejovsky (1998) の『生成語彙論』(*The Generative Lexicon*) においては、主に項構造 (Argument Structure)、事象構造 (Event Structure)、クオリア構造 (Qualia Structure) という3つの構造で語彙的意味と統語構造のインターフェイスを想定している。本節ではその中でクオリア構造を中心として説明する。

まず、クオリア構造の内容について、Pustejovsky (1998) は次のように定めている。

(27) Qualia Structure specifies four essential aspects of a word's meaning (or qualia):

- CONSTITUTIVE: the relation between an object and its constituent parts;
- FORMAL: that which distinguishes it within a larger domain;
- TELIC: its purpose and functions;
- AGENTIVE: factors involved in its origin or “bringing it about”.

Pustejovsky (1998:76)

小野 (2005) はクオリア構造について、以上の4つの部分を次のように日本語に翻訳している。

(28) a. 構成クオリア (Constitutive Qualia) :

物体とそれを構成する部分の関係

b. 形式クオリア (Formal Qualia) :

物体を他の物体から識別する関係

c. 目的クオリア (Telic Qualia) :

物体の目的と機能

d. 主体クオリア (Agentive Qualia) :

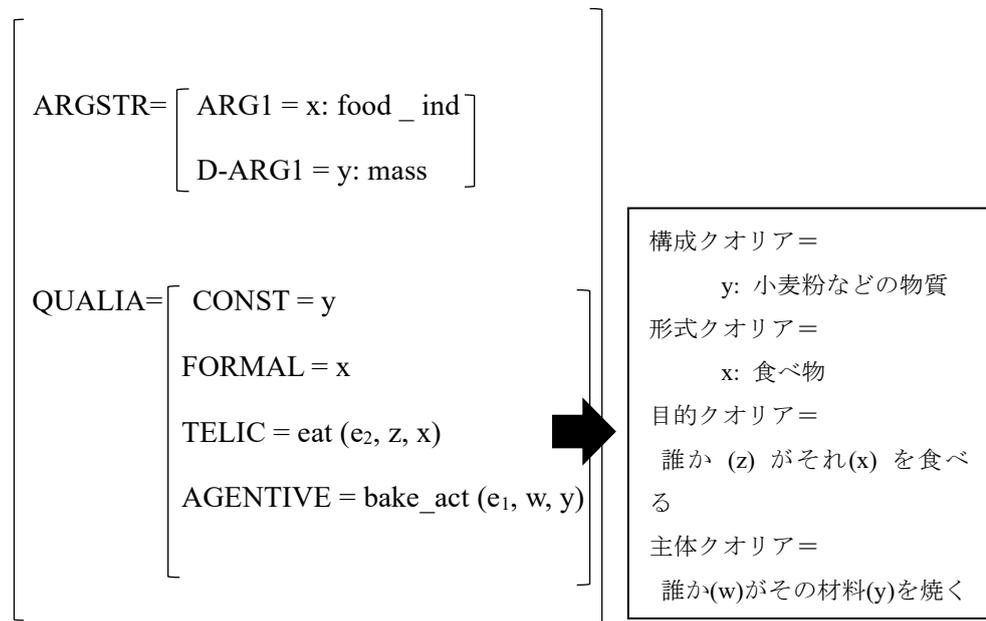
物体の起源や発生に関する要因

小野 (2005: 24)

### 1.3.1 名詞のクオリア構造

具体的にクオリア構造の例を挙げる。Pustejovsky (1998) での英語の名詞 “cake” の語彙表示は (29) の左側のように提示される。また、影山 (2005) は “cake” の語彙表示に対して、(29) の右側のように、クオリア構造の説明をした。

(29) cake



Pustejovsky (1998:123) ・ 影山 (2005: 72)

例 (29) を説明する前に、まず語彙分析でクオリア構造を使う理由、あるいは目的を明らかにする必要がある。クオリア構造で分析することによって、**cake** という名詞は、どのカテゴリーに属するか、また、どの成分からなるのかがわかるようになる。

**cake** という名詞は、構成クオリアがその構成する物質である小麦粉などの (y) であり、形式クオリアが **cake** の属するカテゴリーの「食べ物」の (x) である。そして、構成クオリアと形式クオリアが表すことは、それぞれ 2 タイプの事象に関連する。つまり、例 (29) で示した目的クオリアと主体クオリアが表す **eat** と **bake** の事象の 2 タイプである。詳しく説明すれば、目的クオリアの **eat** (e<sub>2</sub>, z, x) は、主語の (z) は **cake** の「食べ物」としての (x) を食べる (**eat**) 事象である。さらに、主体クオリアの **bake\_act** (e<sub>1</sub>, w, y) は、主語の (w) が **cake** の「小麦粉などの物質」としての (y) を焼く (**bake**) という事象である。

以上、名詞のクオリア構造を検討したが、本研究の対象は動詞であるので、動詞のクオリア構造の内容を明らかにしたい。しかし、動詞のクオリア構造については

Pustejovsky (1998) での検討が「不明瞭で理解困難な点が多い」(影山 2005: 83) という不十分なところがある。従って、Pustejovsky (1998) でのクオリア構造の元の意図に基づいて、動詞のクオリア構造を検討しなければならない。

### 1.3.2 動詞のクオリア構造

動詞のクオリア構造について小野 (2005) と影山 (2005) は詳しい枠組みが提案されている。その中で、小野 (2005) の動詞のクオリア構造は動詞の部分・全体関係と包摂関係を重視している。また、影山 (2005) では LCS や事象タイプなどの構造を使い、動詞の特質を明らかにしている。従って、以下で小野 (2005) の動詞のクオリア構造から紹介する。

#### 小野 (2005)

##### 構成クオリア (Constitutive Qualia)

構成クオリアの情報の 1 つは語義の部分・全体関係 (meronymy) に相当する。つまり、この部分・全体関係は  $An\ X\ is\ a\ part\ of\ a\ Y.$  という公式に当てはめて考えることができる。例えば、名詞の *finger* と *hand* の間に部分・全体関係が成り立っていて、 $A\ finger\ is\ a\ part\ of\ a\ hand.$  という公式で示すことができる。従って、この場合に *finger* という名詞の構成クオリアは次のように表示できる。

##### (30) *finger*

QUALIA= CONST= part\_of(x, y: hand)

小野 (2005: 27)

構成クオリアの情報のもう 1 つは、 $An\ X\ consists\ of\ Y(s).$  という公式で捉えられる。この関係の例として、*book* と *page* の関係がつぎに挙げられる。

##### (31) *book*

QUALIA= CONST= consist\_of (x, y: pages)

小野 (2005: 27)

Pustejovsky (1998) では構成クオリアが動詞のどのような意味情報を記述するのかは明確に示していない。それに対して、Fellbaum (1998) の指摘によれば、部分・全体関係が動詞の意味の記述において重要であることが分かった。ただし、「名詞の表す個体や物質の概念に比べ、動詞の表す行為、出来事、状態などの概念は明確な構成要素に分解しにくい性質を持つ」(小野 2005: 27) ので、以上の例 (30) (31) の公式を動詞にそのまま当てはめることができない。そこで、事象間の時間関係という観点から、動詞の部分・全体関係が成立することとなる。

つぎに、動詞の部分・全体関係について、drive と ride、snore と sleep という 2 組の動詞をあげ、時間的な関係を捉える。例えば、まず drive と ride の場合に、drive (運転する) の場合に必ず ride (車に乗っている) ということで、この 2 つの事象は開始時から終了時まで同時に進行している。そして、snore と sleep の場合に、snore (いびきをかく) という事象は sleep (寝ている) 時間の一部であるので、snore の事象は sleep の事象の中に含まれる。従って、drive と snore の構成クオリアは以下のように表示される。

(32) drive

QUALIA= CONST= ride (e, x, y)

(33) snore

QUALIA= CONST= sleep (e, x)

小野 (2005: 28)

形式クオリア (Formal Qualia)

小野 (2005) によれば、形式クオリアの表す意味関係は包摂関係 (hyponymy) である。

Cruse (1986) では包摂関係は一般的に、An X is a Y. あるいは An X is a kind/ type of Y. という公式で表記できる。例えば、apple: fruit、rose: flower、horse: animal というような名詞は包摂関係を持っている。それらの形式クオリアは以下のようなようになる。

(34) apple

QUALIA= FORMAL= fruit (x)

(35) horse

QUALIA= FORMAL= animal (x)

小野 (2005: 29)

動詞のクオリア構造において、形式クオリアの果たす主要な役割は 2 つあると小野 (2005) は指摘した。1 つめは、名詞の包摂関係に相当する意味関係に基づき、動詞の意味情報を指定することである。2 つめは、主体クオリアと関連づけて、行為や過程の結果についての情報を指定することである。

まず、1 つめの役割について、To  $V_1$  is to  $V_2$  in some particular manner. という公式で示すトロポニミー (troponymy) という概念を使い、動詞の表す事象に含まれる「動作」と「様態」を基にして、系列的関係が成立する。例えば、amble: walk、mumble: talk は名詞の包摂関係に相当する意味概念を持っている。

(36) amble

QUALIA= FORMAL= walk (x)

(37) mumble

QUALIA= FORMAL= talk (x)

小野 (2005: 30)

また、2 つめの役割について、事象構造の結果事象を特徴づけることである。結果

事象が状態変化の結果なのか、移動による位置変化結果なのかといったことが動詞の形式クオリアの主な中身である。つまり、動詞の中に動作の様態だけでなく、結果の状態によって語義が分別されることがある。例えば、同じ「破壊」を表す動詞の shatter、crack、splinter、fracture は、破壊されたものの状態によって互いに区別されている。

#### 目的クオリア (Telic Qualia)

目的クオリアの基本的な内容は、ある名詞で指すものがなんのために、どのように用いられるかということである。例えば、book という名詞の目的クオリアは read (e, x, y) で表記できる。しかし、book と近接する意味関係にある novel と dictionary は、同じ構成クオリアを持っているが、形式クオリアと目的クオリアに違いが出る。特に、novel と dictionary の目的が違うことによって、それぞれの目的クオリアは read (w, x) と consult (w, x) で表示される。しかし、小野 (2005) では動詞の目的クオリアについて特に記載していない。

#### (38) novel

QUALIA= CONST = bound pages (x)

FORMAL = book (x) & narrative (x)

TELIC = read (w, x)

#### (39) dictionary

QUALIA= CONST = bound pages (x)

FORMAL = book (x) & wordlist (x)

TELIC = consult (w, x)

小野 (2005: 32)

#### 主体クオリア (Agentive Qualia)

主体クオリアは、物を作り出す主体についての属性を指す。また、動詞の主体クオリアとして因果関係 (causal chain) に関する属性を含む。言い換えれば、動詞の主体クオリアとは事物の起源や発生の要因についての基本的な情報である。まず、例 (38) (39) に出た novel と dictionary という名詞の主体クオリアから検討する。

(40) novel

QUALIA= CONST = bound pages (x)

FORMAL = book (x) & narrative (x) ➡ 結果

TELIC = read (w, x)

AGENTIVE = write (z, x) ➡ 原因

(41) dictionary

QUALIA= CONST = bound pages (x)

FORMAL = book (x) & wordlist (x) ➡ 結果

TELIC = consult (w, x)

AGENTIVE = compile (z, x) ➡ 原因

小野 (2005: 34)

以上のクオリア構造の表示で、主体クオリアと形式クオリアはそれぞれ原因と結果の関係にあることが分かった。そして、小野 (2005) の観点によって、この原因と結果の関係は、動詞が表す事象概念で表せる。特に break や open などの使役動詞と呼ばれる動詞の事象において、起因事象 (causing event) と結果事象 (result event) という2つの事象からなる複合事象の構成となる。例えば、例 (42) のように、open という動詞の LCS は [[x ACT] CAUSE [BECOME [y OPEN]]] と仮定している。その中の [x ACT] が主体クオリアの指定する情報であり、[BECOME [y OPEN]] は形式クオリアが指定する情報になる。

(42) open (LCS: [[x ACT] CAUSE [BECOME [y OPEN]]])

QUALIA= FORMAL = [BECOME [y OPEN]]

AGENTIVE = [x ACT]

小野 (2005: 35)

影山 (2005)

構成クオリア (Constitutive Qualia)

Pustejovsky (1998) では構成クオリアを「物体とそれを構成する部分の関係」で定義している。動詞の場合に「動詞の意味を構成する種々の意味述語とその意味的な項を構造化して表示する LCS が最もふさわしい」(影山 2005: 84) ことが示された。LCS の表示方法は様々あるので、ここで動詞の意味を行為連鎖に基づいて構造化し、語彙の定項を組み込んだ影山 (1996) 式の LCS を使う。

形式クオリア (Formal Qualia)

形式クオリアは「物体を他の物体から識別する関係」を示している。影山 (2005) は事象タイプを使う。つまり、ある動詞がその他の動詞と区別される特徴である活動 (activity)、過程 (process)、推移 (transition)、状態 (state) といった事象タイプ<sup>3</sup>で決める。このように規定すれば、Pustejovsky (1998) での事象構造とクオリア構造が重なるところがあり、事象構造を独立させる必要がなくなるという考えもある。

目的クオリア (Telic Qualia)

目的クオリアは「物体の目的と機能」を示し、動詞の場合は行為の目的や行為の機能

---

<sup>3</sup> しかし、影山 (2005) での事象タイプは Pustejovsky (1998) での事象タイプとの違いがある。影山 (2005) は活動 (activity) というタイプについての説明が不十分である。

(EVENT STRUCTURE: Definition of the event type of a lexical item and a phrase. Sorts include STATE, PROCESS, and TRANSITION, and events may have subeventual structure.)  
Pustejovsky (1998: 61)

をこれに含めるのが適切である。人間が意図的に行う行為には、ほとんどの場合、何らかの目的が伴っている。例えば、「部屋を掃除する」という行為の目的は「部屋をきれいにするため」で表示できる。しかし、動詞は人為的な目的を持たない場合もある。そこで、自然に起こる現象の場合に目的クオリアは想定できない。例えば、「事故が起こる」や「花がしぼむ」のように、目的クオリアは空欄になる。

### 主体クオリア (Agentive Qualia)

主体クオリアは「物体の起源や発生に関する要因」を表示する。動詞の場合は、「その出来事や行為を成り立たせる下準備や前提、あるいはその動詞にとって必要なフレーム」(影山 2005: 85) が主体クオリアに該当すると考えられる。

以上で設定した動詞クオリアの枠組みを使い、具体例を挙げるために、影山 (2005) は「探す」という動詞のクオリア構造を分析した。

(43) 「(山の中をあちこち) 埋蔵金を探す」

構成クオリア = [ ]<sub>x</sub> CONTROL [GAZE - OF - [ ]<sub>x</sub> MOVE [Route ]]

形式クオリア = 過程 (process)

目的クオリア = find (e, x, y)

主体クオリア = not - have (x, y)

影山 (2005: 85)

「(山の中をあちこち) 埋蔵金を探す」での「探す」という動詞の構成クオリアの LCS が表す意味は、「主語 (x) がある経路 (Route) に沿って視線 (GAZE) を動かす」という移動である。また、形式クオリアは過程 (process) という事象タイプである。なぜなら、アスペクト的に限界のない継続的事象なので、「1年間、埋蔵金を探した」といえるが、「\*1年間埋蔵金を探した」とはいえない。そして、目的クオリアは、動詞の「探す」の目的として、「主語が何かを見つけるためである」(find (e, x, y)) と表示

される。主体クオリアは、「探す」の前提であり、「主語が埋蔵金を持っていない」(not - have (x, y)) と表示される。

### 1.3.3 動詞のクオリア構造のまとめ

小野 (2005) と影山 (2005) の動詞のクオリア構造を捉えて、由本 (2013) は以下のようにまとめた。

|        | 小野 (2005) | 影山 (2005)                             |
|--------|-----------|---------------------------------------|
| 構成クオリア | 部分・全体関係   | 語彙概念構造 (LCS)                          |
| 形式クオリア | 包摂関係と結果   | activity・state・process・transition の区別 |
| 目的クオリア | (特に記載なし)  | 含意する目的・目標・機能                          |
| 主体クオリア | 原因        | その表現が成立するための前提やフレーム                   |

表 1-1 動詞のクオリア構造の捉え方 (由本 2013: 141)

以上の2つの捉え方は共に Pustejovsky (1998) に基づいているが、表示方法は互いに違っている。クオリア構造の4つの側面は、ある動詞に対して、空欄があるのも可能である。

従って、すべての動詞が4つのクオリアを持っているわけではないので、持っているクオリアで動詞の性質を分析する。また、動詞のクオリア構造は、小野 (2005) 式でも影山 (2005) 式でも各自の内容があり、両方で動詞の意味を分析することが必要となる。第四章の P115 で「習得」に関する動詞のクオリア構造から出る情報を明らかにする。

## 1.4 複合動詞について

「習得」に関する動詞を中国語に対応させると、活動動詞の場合は“学习”“学”などとなり、達成動詞の場合には“学会”“学到”のような複合動詞がよく使われる。また、日本語では「状態変化使役」を表す場合にも「学びとる」のような複合動詞が見られる。従って、「習得」に関する動詞の意味分析を行うときに、特に中国語との対照分析を行う場合に、複合動詞の視点を入れなければならない。本節では、日本語の複合動詞の前項動詞と後項動詞（以下は V1 と V2 と表記する）の意味関係などについて説明する。

### 1.4.1 語彙的複合動詞と統語的複合動詞

影山 (1993) において、日本語の複合動詞は語彙的複合動詞（飛び上がる、押し開く…）と統語的複合動詞（払い終える、食べすぎる…）の 2 種類に分けられる。そのうち、前者は語彙部門で、後者は統語部門で形成されると指摘されている。語彙的複合動詞と統語的複合動詞はそれぞれ以下のように挙げられている。

(44)

a. 語彙的複合動詞：

飛び上がる、押し開く、泣き叫ぶ、売り払う、受け継ぐ、解き放す、飛び込む、  
（隣の人に）話しかける、こびり付く、飲み歩く、歩き回る、踏み荒す、誉め  
讃える、語り明かす、聞き返す、震え上がる、呆れ返る、持ち去る、沸き立つ

b. 統語的複合動詞：

払い終える、放し終る、しゃべり続ける、食べすぎる、食べそこなう、助け合  
う、動き出す、食べかける、しゃべりまくる、走りぬく、数え直す、見なれる、  
登り切る、やりつける

影山 (1993: 75-76)

以上の語彙的複合動詞と統語的複合動詞の2つのグループは、ともにV-V型の複合動詞を構成しているため、両者を形態で区別することが難しい。従って、影山(1993)において、両者の違いについて、複合動詞の形態から離れて、意味や生産性、特に統語的側面まで考察を広げた。語彙的複合動詞と統語的複合動詞の違いとして、具体的に言えば以下のようなになる。

まず、V1・V2の意味関係からみると、語彙的複合動詞では「動作の様態・手段(押し開ける、ころげ落ちる、もみ消す)、付帯状況(飲み歩く、恋い慕う、忌み嫌う)、アスペクト(泣き止む [=泣くのが止む]、降りしきる [=さかんに降る]、聞き漏らす [=聞くのを漏らす])など種々雑多な意味関係が観察され、しかも多くの場合、様々な程度に意味の不透明化や語彙化が進んでいる」(影山 1993: 78)。例えば、「飲み歩く」は習慣的にお酒に限定され、水やジュースなどには使われない。それに対して、統語的複合動詞にはそのような意味の習慣化がない。例えば、前に示した「飲み歩く」と違い、「飲み始める」は対象物がお酒に限られていなく、どのような液体でも構わない。つまり、統語的複合動詞はV1・V2の意味関係が完全に透明かつ合成的であり、いずれも補文関係として分析できる。

また、語彙的複合動詞と統語的複合動詞の意味的透明性の違いは生産性の違いとも呼応する。語彙的複合動詞の生産性は大きくV2に依存している。例えば、「買い取る、吸い取る、ぬぐい取る、奪い取る、切り取る」や「買い込む、吸い込む、誘い込む、落ち込む、ふさぎ込む」(影山 1993: 78)のような同じV2を持ちながら、多様なV1と結合する複合動詞である。しかし、このような生産性の高い場合に、語彙的な結合制限があり、いずれの複合動詞の形も辞書に登録する必要がある。一方、統語的複合動詞には語彙的な結合制限がなく、文や句が自由に作られるように形成される。つまり、辞書に登録する必要はない。例えば、「続ける」をV2とする複合動詞では、「老人は生き続ける」のに対して、「\*私の長女が生まれ続けた」は非文で、「女の子ばかりが何人も生まれ続けた」は文法的である(影山 1993: 78)。違う文脈で「生まれ続ける」が成立できるかどうかは、語彙的な制限ではなく、意味の制限によって結合されている。

る。

本節では、日本語の複合動詞の 2 つのタイプについて相違点を述べた。次に複合動詞の V1・V2 の意味関係について、先行研究に基づいて検討する。

#### 1.4.2 複合動詞の V1・V2 の意味関係

語彙的複合動詞の下位分類について、影山 (1993) では姫野 (1982) と Tagashira (1978) の分類をあげている。姫野 (1982) では複合動詞を「方向性 (盛り上がる、見上げる)、強調 (震え上がる、叱りつける)、成否・過不足 (見落とす、見かねる)、アスペクト (見始める、降り出す)」という 4 つの分類に分けている。しかし、これは頻度の高い V2 の語彙的な意味を抽出したことに留まっている。一方、Tagashira (1978) は V2 の語彙的な意味から離れ、V1 と V2 の意味的な関係に踏み込み、「並列 (驚き呆れる、忌み嫌う)、手段 (様態) - 結果 (這い上がる、引き上げる)、アスペクト (刷り上がる、見飽きる)、副詞的 (干上がる、吹きまくる)」という 4 つの分類にした。しかし、この 4 つの分類は互いに異質の分類であり、V1 と V2 の語彙的な意味に左右される。

影山 (1993) は姫野 (1982) と Tagashira (1978) の分類を改良するために、V1・V2 の持つ語彙的な意味を捨象し、機能関係のみ整理し、語彙的複合動詞を項構造によって、並列関係 (こいねがう)・右側主要部の関係 (切り倒す、飲み歩く)・補文関係 (歌い上げる) という 3 種類に分けている。この 3 種類のいずれも統語的な関係であることに注意すべきである。以下では、並列関係・右側主要部の関係・補文関係に詳しく触れる。

並列関係では V1 と V2 が並列される対等な 2 要素であり、V1 と V2 が主要部として考えられる。従って、語彙的複合動詞の「こいねがう」を例にすると、並列関係を持つ複合動詞の V1・V2 の項構造は以下のように融合している。

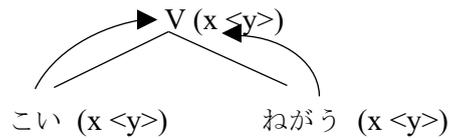


図 1-5 「こいねがう」の項構造 (影山 1993: 100)

図 1-5 が示しているように、左右両主要部の構造を想定し、V1・V2 の項構造は融合して複合動詞全体の項構造になる。しかし、並列関係の複合動詞は少数しか見当たらない。

つぎに右側主要部関係について述べる。日本語では統語構造、形態構造はともに右側要素が主要部として機能する。語彙的複合動詞の多くも右側主要部の規則で機能している。右側主要部とする場合が形態的に証明できる複合動詞のタイプは、以下のよう  
に 3 つのタイプにおいて影山 (1993) で提示された。

- (45) a. 追いかける→追っかける、引き担ぐ→引っ担ぐ、取り組む→取っ組む、  
 b. すっぱ抜く (cf. 引き抜く、打ち抜く、追い抜く、切り抜く)  
 c. 差しー：

差し+非対格：(太陽が) 差し昇る、差し出る、差し響く、差し迫る

差し+他動詞：差し入れる、差し終える、差しかける、差しかざす

影山 (1993: 102)

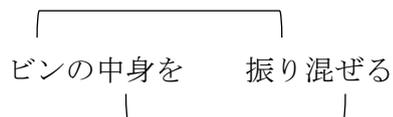
以上の (45) では右側主要部の関係の 3 つのタイプを挙げた。その中で、(45a) は V1 が音便化を被って本来の動詞形態を失っている。また、(45b) は V1 が独立した動詞と認められない形態素であり、V2 の方が形態的に重要である。そして、(45c) での V1 は意味的に希薄になり、接頭辞化する傾向がある。(45) のいずれのタイプも複合動詞の形態で右側主要部関係を示している。

しかし、右側主要部関係は以上のように形態だけに留まっているわけではなく、そ

れ以外の状況で項構造ないし主語や目的語の名詞まで分析しなければならない。例えば、例 (46) の目的語の「ビンの中身」は「中身」が主要部であり、「ビン」が「中身」を修飾している。そこで、(46) の目的語名詞句の統語的關係はそのまま複合動詞の「振り混ぜる」の V1・V2 の關係にも持ち越されると考えられる。つまり、影山 (1993) の分析によって、V1 と V2 は 同じ項構造を持つといっても、右側主要部の關係を持つ複合動詞の V1・V2 はそれぞれ修飾部と主要部と考えられる。

(46) ビンを振る, 中身を混ぜる

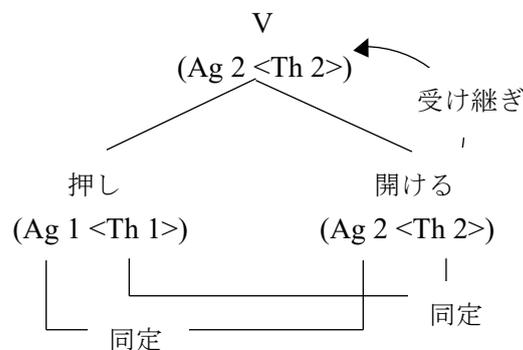
→中身を振り混ぜる, \*ビンを振り混ぜる



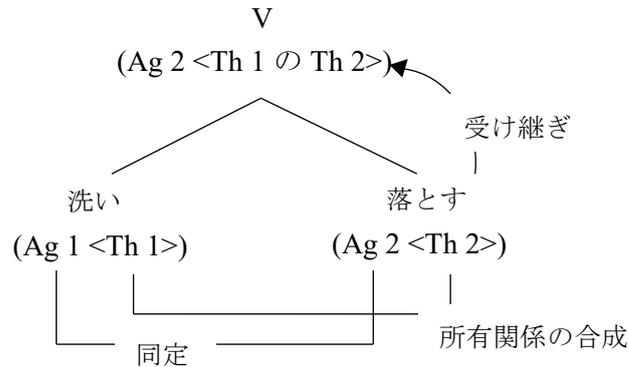
影山 (1993: 104, 105)

また、影山 (1993) は複合動詞における項構造の合成によって分類した 3 つのタイプを以下の図のように示している。

a. 主要部からの受け継ぎのみ：「ドアを押し開ける」



b. 主要部からの受け継ぎと所有関係の合成：「服の汚れを洗い落とす」



c. 主要部と非主要部からの受け継ぎ：「夜の街を酒を飲み歩く」

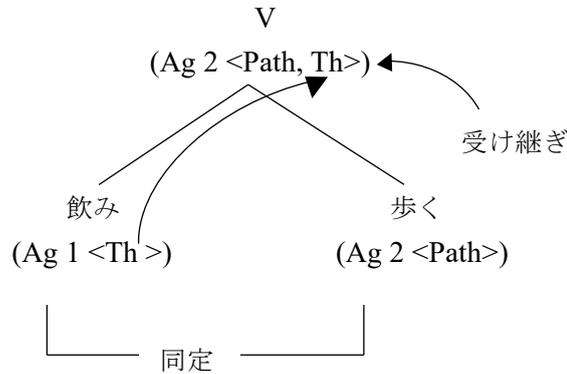


図 1-6 「右側主要部の関係」で項構造の合成の3つの状況 (影山 1993: 106-107)

図 1-6 での3つのタイプにはともに「同定」という関係が示されている。それは複合動詞の V1・V2 の項構造が一致することである。同定 (identification) は同一指標化 (co-indexation) とも呼ばれる。項の同定 ( $\theta$  同定と呼ぶ) は語彙的複合動詞の性質から導き出される一般的な操作である。例えば、影山 (1993: 107) で指摘しているように、「木を切り倒す」という動作は、木を切ることが直接の原因となり、その木が倒れる。複合動詞の「切り倒す」は1つの事象を表す単一の動詞であり、「切る」と「倒す」が別々に存在できない。そして、「切り倒す」のような単一の出来事を引き起こす動作主は同一人物でなければならない。同様に、目的語も基本的に同一対象でなけれ

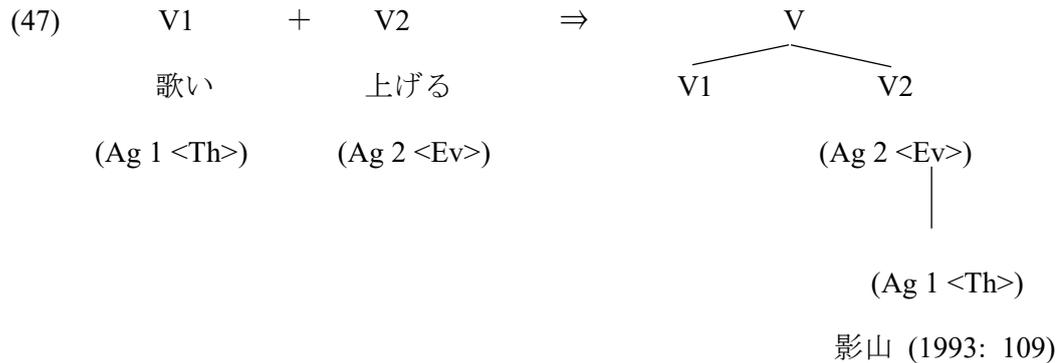
ば、全体として単一の事象とはならない。図 1-6 で示しているように、V1・V2 の動作主 (Agent) と対象 (Theme) がともに同定する場合はあるが、V1・V2 の動作主だけが同定する場合も成立する。

「a. 主要部からの受け継ぎのみ」の場合は V1 と V2 が完全に同じ項構造を持っている。V1 と V2 は右側主要部の関係を持つので、V2 が主要部であり、V2 の項構造が複合動詞全体に転写される。

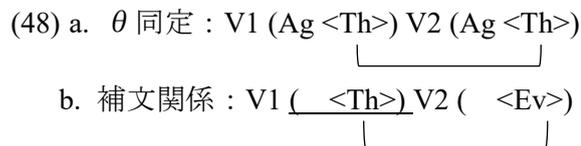
「b. 主要部からの受け継ぎと所有関係の合成」の場合は、V1・V2 の動作主がそのまま同定されるが、対象が所有関係で結ばれると解釈される。ここでの V2 の項構造はそのまま複合動詞全体に引き継がれ、V2 に欠ける情報（つまり、図 1-6 の <Th 1>）は V1 から補充され、所有関係を持つ複合的内項として合成される。

「c. 主要部と非主要部からの受け継ぎ」は V1・V2 の動作主は同一であるが、目的語の意味役割が異なる状況である。ここでは V2 の項構造はそのまま引き継がれ、そこに欠けている情報（つまり、図 1-6 の <Th>）が V1 から補充される。以上の「飲み歩く」以外に、「語り明かす、嘆き明かす、飲み明かす」も同じ状況を示している。このように、複合動詞の V1・V2 はそれぞれ独自の目的語を表出することが可能になる。

補文関係は V1・V2 の機能的関係の 3 つのタイプの最後になる。補文関係は統語的複合動詞に典型的に見られるが、語彙的複合動詞にも成立する。補文関係を持つ複合動詞は、主要部の位置づけという点で右側に主要部を持つが、V1 の項構造はそのまま V2 の項構造に埋め込まれるという点で右側主要部の関係と異なっている。次に「歌い上げる」を例として説明する。



「歌い上げる」で V2 の「上げる」は内項が Ev (=Event) で示され、V1 の「歌う」の項構造全体は V2 の内項に埋め込まれる。従って、補文関係と右側主要部の関係の違いは以下のように示される。影山 (1993) によって、(48) の補文関係と右側主要部の関係の V1・V2 の項構造を通して、 $\theta$  同定と補文関係は根本的に異質なものではなく、連続したものであることがわかる。通常の  $\theta$  同定の対象を V1 の項から V1 の項構造全体に拡張したものが補文関係である。



影山 (1993: 113)

また、影山 (1993) で語彙的複合動詞の補文関係は統語的複合動詞と異なるところがあることも検討された。複合動詞の V2 として「終える、終わる」と「上げる、上がる」は意味上で共通し、両方ともに完了のアスペクトを意味する。しかし、「お歌いになり終える、到着し終る」が統語的な複合動詞になるのに対して、「\*お歌いになり上げる、\*膨張し上がる」は語彙的に複合され、不適格性を示している。つまり、(48) のように、「～終える、～終わる」の補文構造は統語的であるので、項構造から見えない。一方、「～上げる、～上がる」の補文関係は語彙的であり、項構造のレベルにおいて表

示する。

以上の並列関係・右側主要部の関係・補文関係は V1・V2 の主要部について分類しているが、影山 (1993) はさらに、V1・V2 の時間関係について、語彙的複合動詞を区別した。それは、V1 と V2 の時間順序について、V1・V2 が同時に進行するか、V1 が V2 より先行するか、という 2 つの状況を指摘した。さらに、V1・V2 が同時に進行する場合には、「並列関係」と「付帯状況」に分け、別々に並列関係・右側主要部の関係の複合動詞に対応できるようにした。V1 が V2 より先行する場合に、通常 V1・V2 は「原因—結果」という意味関係を持つ。しかし、「手段・様態」の意味関係は「原因—結果」の意味関係との区別が明瞭でなく、V1 が V2 より先行する場合も含まれる。

由本 (2005) は影山 (1993) に基づき、「並列関係」と「付帯状況・様態」は V1・V2 が同時に進行する場合に含まれるとする。また、V1 が V2 より先行する場合に、「手段」は意図性が表されるが、意図性のない場合を「因果関係」と提示した。それ以外に、「補文関係」に加えて、5 種類のパターンを提示した。V1・V2 の時間的な関係を詳しく考察するために、次の節で LCS を用いて検討する。

影山 (1993) での「並列関係」「付帯状況」「手段・様態」は LCS で示され、(49) のように、V1 と V2 を連結する要素が重要になる。

- (49) a. 並列関係 :  $V1+V2 \Rightarrow LCS1 \text{ AND } LCS2 \quad (t1=t2)$ <sup>4</sup>  
b. 付帯状況 :  $V1+V2 \Rightarrow LCS2 \text{ WHILE } LCS1 \quad (t1=t2)$   
c. 手段・様態 :  $V1+V2 \Rightarrow LCS2 \text{ BY } LCS1 \quad (t1 \geq t2)$

影山 (1993: 115-116)

由本 (2005) での「並列関係」「付帯状況・様態」「手段」「因果関係」「補文関係」という 5 つのパターンは (49) とほぼ同じく、(50) のように LCS で意味関係を示している。

---

<sup>4</sup> t1 は、LCS1 の時間、t2 は LCS2 の時間を表す。(t1=t2) は LCS1 と LCS2 の同時性を示す。(t1 ≥ t2) は LCS1 が LCS2 に先行する場合を示す。

- (50) a. 並列関係:  $V1+V2 \Rightarrow [[LCS1] \text{ AND } [LCS2]]$  (t1=t2)<sup>5</sup>
- b. 付帯状況・様態:  $V1+V2 \Rightarrow \left( \begin{array}{c} [LCS2] \\ \text{WHILE } [LCS1] \end{array} \right)^6$  (t1=t2)
- c. 手段:  $V1+V2 \Rightarrow \left( \begin{array}{c} LCS2 \\ \text{BY } LCS1 \end{array} \right)^7$  (t1 ≥ t2)
- d. 因果関係:  $V1+V2 \Rightarrow \left( \begin{array}{c} LCS2 \\ \text{FROM } LCS1 \end{array} \right)$  (t1 ≥ t2)
- e. 補文構造:  $[LCS2...[LCS1]...]$ <sup>8</sup>

由本 (2005: 108, 109, 126)

しかし、特に由本 (2005) の 5 種類のパターンは日本語の複合動詞に限られている。ほかの言語ではそれ以外のパターンもあると考えられる。本研究で扱う「習得」に関する複合動詞の“学会”“学到”「学びとる」は状態変化結果を表す複合動詞と見なされる。その中で、日本語の複合動詞の「学びとる」には V1 が V2 に先行するので、(50c) と (50d) のどちらに適するかについて第五章で分析する。また、中国語の V1・V2 の合成するパターンは由本 (2005) に対応しないので、第 1.7 節で中国語の結果複合動詞について詳しく考察する。

#### 1.4.3 「他動性調和の原則」と「直接目的語制約」

影山 (1993) によれば「他動性調和」というのは、複合動詞の V1・V2 が、外項を

<sup>5</sup> ここでの t1、t2 も (49) と同じ意味を示している。

<sup>6</sup> 「付帯状況・様態」の場合では、Jackendoff (1990) の表記方法に従い、付帯状況を表す LCS1 は限定修飾句 (restrictive modifier) として下の段に位置付けている。

<sup>7</sup> 由本 (2005) は影山 (1993) を基にして、V1 が V2 に先行する場合に、「手段」「因果関係」という 2 つの状況に分けている。また、区別する基準として、「手段」に V1 の意図性が見られる一方、「因果関係」には V1 の意図性が見られない。

<sup>8</sup> 由本 (2005) の「補文関係」は影山 (1993) の「補文関係」と同じタイプの複合動詞であり、「項の同定は、V2 の項として V1 の LCS をまるごと埋め込むことで自動的に起こる」(由本 2005: 130)。

持つ動詞同士と外項を持たない動詞同士は複合できるが、それ以外の複合は許されないという規則である。(51)の動詞の項構造からみれば、(51a) (51b) は外項を持つが、(51c) が外項を持っていない。

- (51) a. 他動詞: (x <y>)
- b. 非能格自動詞: (x <>)
- c. 非対格自動詞: <y>

従って、「他動性調和の原則」によって、V-V 複合動詞は最大限 5 種類の組み合わせによって、外項を(52)のように持つことができる。

- (52) a. 他動詞+他動詞: 買い取る、追い払う、書き抜く
- b. 非能格+非能格: 言い寄る、飛び降りる
- c. 非対格+非対格: 滑り落ちる、居並ぶ、生まれかわる
- d. 非能格+他動詞: 乗り換える、笑い飛ばす、住み替える
- e. 他動詞+非能格: (敵を) 待ち構える

影山 (1993: 118, 119, 122)

「他動性調和の原則」は以上で示したように、日本語に適用する。一方、中国語の V-V 複合動詞の組み合わせは複雑であるので、他動性調和に従わないと沈 (2013: 388) によって指摘された。「習得」に関する複合動詞の“学会”“学到”「学びとる」が他動性調和に従うかどうかを分析する必要がある。また、他動性調和についての分析によって、“学会”“学到”「学びとる」の項構造が明らかになり、V1・V2 の意味関係も明確になる。

また、Levin & Rappaport Hovav (1995) などによれば、英語の結果複合構文には Direct Object Restriction (DOR: 直接目的語制約) があると記述されている。「直接目

的語制約」というのは、「結果を表す状態動詞は、本動詞の（疑似）直接目的語のみを叙述する」（沈 2013: 390）ということである。例えば、(53) での flat は pounded の直接目的語である metal を叙述している。

(53) The blacksmith pounded the metal flat.

|   |       |   |      |
|---|-------|---|------|
| x | pound | y |      |
|   |       | v | flat |

Levin & Rappaport Hovav (1995: 50)

また、中国語の結果複合動詞の場合では (53) と類似している例も見られる。

(54) 张三                      砍倒                      了                      大树。

Zhangsan                      cut-fall                      -PERF                      tree

張三は木を切った結果、木は倒れた。

→张三砍大树                      張三は木を切る。

→大树倒                      木は倒れる。

沈 (2013: 391)

沈 (2013) によれば、中国語は英語と同様に「直接目的語制約」の現象がある。つまり、結果複合動詞では V2 の唯一の項は V1 の内項と一致しており、「直接目的語制約」の現象がある。しかし、直接目的語制約が中国語複合動詞に適用されない例も見られる。例 (55) において、“学烦” の V2 の唯一の項は V1 の外項として同定され、V1 の内項は目的語を担っているので、「直接目的語制約」に違反している。

(55) 张三                      学烦                      了                      英语                      (DOR : ×)

Zhangsan                      study-disturbed                      -PERF                      English

張三は英語を学んだ結果、張三は嫌になった。

沈 (2013: 392)

本節で提示した中国語の複合動詞の“学会”“学到”、及び日本語の状態の使役変化を表す「学びとる」が「直接目的語制約」に適用できるか否かは第五章で分析する。

「習得」に関する動詞では達成動詞である「修める、習得する、マスターする」は状態変化使役を表している。その状態変化使役と同じく、CAUSE という概念を含む中国語の結果複合動詞には“学会”“学到”がある。“学会”“学到”が通常の中国語の結果複合動詞と同様であるかについて、本節の「他動性調和の原則」と「直接目的語制約」と V1・V2 の意味関係、及び V1・V2 各自の項構造を分析する。また、“学会”“学到”と同じ働きをしている日本語の「学びとる」の複合動詞としての状況を明らかにする必要がある。

#### 1.4.4 中国語の結果複合動詞の分類

前節ですでに中国語の結果複合動詞という概念複合動詞の種類を提示したが、本節でそれについて詳しく説明する。まず、中国語の結果複合動詞の範囲を決める。中国語の結果複合動詞では、V1 が動作を、V2 が状態変化を表し、V2 が V1 によって引き起こされる結果であることがすでに、Li and Thompson (1981)、申 (2009)、望月・申 (2011)、于 (2015) などの先行研究で述べられている。つぎに、Li and Thompson (1981)、望月・申 (2011) を通して、中国語の結果複合動詞のタイプや V1・V2 の意味関係などについて明らかにする。また、申 (2009) の結果複合動詞の分類に基づいて項構造の表記法を挙げる。

Li and Thompson (1981) によれば、中国語の結果複合動詞 (resultative verb compound,

or RVC) は V1 と V2 の意味関係からみた分類としては (56) のような 4 種類である。具体的にいうと、Cause (使役)、Achievement (到達)、Direction (方向)、Phase (局面) という 4 つの意味関係である。

(56) a. Cause

①我 把 茶杯 打-破 了  
I BA tea-cup hit-broken PEV/CRS<sup>9</sup>  
私は茶碗を割った。

②他 把 门 拉-开 了  
He BA door pull-open PEV/CRS  
彼がドアを引き開けた。

b. Achievement

③我 把 那个 字 写-清楚 了  
I BA that-CL<sup>10</sup> character write-clear PEV/CRS  
私はあの字をはっきりと書いた。

④他 买-到 了 那本 字典  
he buy-arrive PFV that-CL dictionary  
彼があので辞典を買った。

c. Direction

⑤他 跳-过-去 了  
he jump-cross-go PEV/CRS  
彼が飛び越えた。

⑥他们 跑-出-来 了  
they run-exit-come PEV/CRS

<sup>9</sup> Li and Thompson (1981) によれば、PEV (perfective aspect) は“了”の「完了」の意味を示し、CRS (currently relevant state) が“了”の「現在」の意味を持つ。

<sup>10</sup> That-CL (classifier) は中国語の“那个”を指し、日本語の「その」のような指示詞と同じ意味である。

彼らが走って外へ出た。

d. Phase

⑦他 的 钱 用-完 了  
his money use-finish PEV/CRS

彼のお金は使いきられた。

⑧把 电视 关-掉  
BA TV close-away

テレビを消してください。

Li and Thompson (1981: 55-56) 日本語訳：筆者

(56) で挙げた Cause (使役)、Achievement (到達)、Direction (方向)、Phase (局面) という 4 つの分類で、(56a) は V1・V2 の意味関係を示し、(56b) (56c) (56d) は V2 の意味に焦点を置き、V2 が表す「到達」「方向」「局面」で区別する。また、(56a) は Cause (使役) の意味関係を示すが、(56b) (56c) (56d) でも使役の意味が見られる。

例えば、(56) の例③⑤⑥⑦で、“写清楚”“跳过去”“跑出来”“用完”の V1 の動作を通して、状態変化を本動詞の主語か目的語かにさせるものと理解できるので、V1・V2 の意味関係に使役の意味が見られる。しかし、(56) の例④⑧で、“买到”“关掉”のような動詞の V2 の“-到”“-掉”が表す状態は、本動詞の主語と目的語と関係せず、V1・V2 の使役関係を持っていない。従って、Li and Thompson (1981) による結果複合動詞の分類の基準は意味関係だけではなく、V2 の意味も用いられている。

次に、望月・申 (2011) では結果複合動詞の述語の組み合わせは概略 4 種類に分類されている。(57) が示しているように、V1 はすべての動詞が担うことが可能であるが、V2 が結果状態を表すために、ほとんどの場合、状態変化を表す非対格動詞あるいは形容詞が担っている。しかし、例外として (57d) で示されるように、“-会” (～ができる)、“-懂” (～を理解する) などの状況を表す他動詞が担う場合も見られる。

(57) a. 動作を表す他動詞 + {非対格動詞／形容詞} :

喝醉、推开(门)、打破(窗户)

b. 非能格動詞 + {非対格動詞／形容詞} :

哭湿(手帕)、喊哑(嗓子)、坐直(身子)

c. {非対格動詞／形容詞} + {非対格動詞／形容詞} :

累坏(身体)、醉倒

d. 動作を表す他動詞 + 状態を表す他動詞 :

学会(英语)、听懂(俄语)

望月・申 (2011: 4)

以上での結果複合動詞の分類について、Li and Thompson (1981) は V1・V2 の意味関係、特に V2 の意味によって区別している。また、望月・申 (2011) は V1・V2 の品詞、さらに動詞の様態に従って、結果複合動詞を分類した。中国語の“学会”“学到”は Li and Thompson (1981)によれば、(56b) の Achievement (到達) の分類に属する。また、“学”は動作を表す他動詞であり、“会”が状態を表す他動詞であるのに対して、“到”は非対格動詞と見なされる。“学会”“学到”の V1・V2 の品詞によって、“学会”は (57d) に対応して、“学到”は (57a) に対応する。

#### 1.4.5 結果複合動詞の項構造と V1・V2 意味関係について

申 (2009) は、項構造について、結果複合動詞を詳しく分析し、“推开”型、“哭走”型、“跳烦”型及び“跌倒”型、“吃腻”型、“下输”型、“玩忘”型という 6 つのタイプを挙げている。

(58) I : V2 が複合動詞の目的語の結果状態を叙述する場合

a. “推开(押す+開く(あく))”型

b. “哭走（泣く＋行く、うるさく泣いて、逃げ帰らせる）”型

II : V2 が複合動詞の主語の結果状態を叙述する場合

c. “跳煩（踊る＋飽きる）”型及び“跌倒（転ぶ＋倒れる）”型

d. “吃膩（食べる＋飽きる）”型

e. “下輸（将棋をさす＋負ける）”型

f. “玩忘（遊ぶ＋忘れる）”型

申 (2009: 119-137)

申 (2009) での項構造の観点は影山 (1993) とやや異なっているが、第 1.6.2 節での項構造の受け継ぎ方についての分析と類似しており、V1・V2 の項構造と本動詞の項構造の受け継ぎの関係について以上の 6 つの分類をまとめている。その各分類の項構造を Li (1990) の表記方法に従って、(59) のように表記する。Li (1990) に従って、1 及び 1' は、それぞれ V1 及び V2 の主語、2 及び 2' は、それぞれ V1 及び V2 の目的語を表す。つまり、V1 の項構造は <1, 2>、V2 の項構造は <1', 2'> で表す。

(59) a. V1 の項構造            <1, 2><sup>11</sup>

b. V2 の項構造            <1', 2'>

この項構造の表記方法に従えば、(58) の 6 つの分類の項構造の受け継ぎ方は次のようになる。例えば、(60a) では“推开”の“推”に主語と目的語が共にあり、<1, 2> で表す。“推开”の“开”に主語だけがあり、<1', > で表す。また、“推开”は全体としての主語と目的語があり、“推”の目的語と“开”の主語が同定し、本動詞を <1, 2-1'> で表す。

(60) I : V2 が複合動詞の目的語の結果状態を叙述する場合

---

<sup>11</sup> 申 (2009) で用いた項構造の表記方法は、ただ主語と目的語を表すのみで、「1 が外項、2 が内項」を表すわけではない。

a. “推开”型： $\langle 1, 2 \rangle + \langle 1', \rangle \rightarrow \langle 1, 2-1' \rangle$

b. “哭走”型： $\langle 1, \rangle + \langle 1', \rangle \rightarrow \langle 1, 1' \rangle$

II：V2が複合動詞の主語の結果状態を叙述する場合

c. “跳烦”型及び“跌倒”型： $\langle 1, \rangle + \langle 1', \rangle \rightarrow \langle 1-1', \rangle$

d. “吃腻”型： $\langle 1, 2 \rangle + \langle 1', \rangle \rightarrow \langle 1-1', 2 \rangle$

e. “下输”型： $\langle 1, 2 \rangle + \langle 1', 2' \rangle \rightarrow \langle 1-1', 2-2' \rangle$

f. “玩忘”型： $\langle 1, \rangle + \langle 1', 2' \rangle \rightarrow \langle 1-1', 2' \rangle$

申 (2009: 140)

本研究での“学会”“学到”は別々に“下输”型と“推开”型に対応すると考えられる。(60)の内容に従い、“学会”の項構造を $[\langle 1, 2 \rangle + \langle 1', 2' \rangle \rightarrow \langle 1-1', 2-2' \rangle]$ で表し、“学到”の項構造を $[\langle 1, 2 \rangle + \langle 1', \rangle \rightarrow \langle 1, 2-1' \rangle]$ で表す。また、この2つの分類の項構造について詳しく分析するのは第五章で行う。

つぎに、中国語の結果複合動詞を日本語の複合動詞に当てはまると、どの種類に対応するのかについて検討する。

まず、望月・申 (2011) によれば、中国語の結果複合動詞は「動詞+補語」の構造であり、日本語の補文関係の複合動詞に対応する。例えば、(61)のように日本語の補文関係の複合動詞は、中国語のV2が“-遍”“-光”“-漏”などの生産力が強い結果複合動詞に対応する。しかし、「読み続ける」(読むことを続ける)のようなV2がアスペクトに関わる日本語の複合動詞は、事態全体が完結性を持たないので、中国語の複合動詞に直接に対応しない。その原因は、中国語の複合動詞の典型として、V2は結果事象を表す述語として働くので、V2はアスペクトを表さない。

(61) 鳴り渡る：响遍/响彻    知れ渡る：传遍    見逃がす：看漏  
書き落とす：写漏    見落とす：看漏    使い果たす：用尽/用光  
呼びならわす：叫惯

また、中国語の結果複合動詞は日本語の「付帯状況・様態」の複合動詞の一部と対応する。(62)のように、日本語複合動詞の「付帯状況・様態」ではV2が方向性(62a~62d)、あるいは経路位置関係(62e~62i)を表す場合がよく見られる。この2つの場合は前節で(56)の中国語の結果複合動詞の場合と照らし合わせると、各々(56c)のDirection(方向)と(56b)のAchievement(到達)の場合と一致している。(62)の日中の複合動詞の対応が成立する原因は、これらの動詞のV2が、方向性や経路位置関係を表し、事象の完結性も内包する「到達動詞」であるからである。

- (62) a. ~上がる⇒<~上> : 爬上(這い上がる)、跳上(跳ね上がる)  
 b. ~降りる⇒<~下> : 跳下(飛び降りる)、滑下(滑り降りる)  
 c. ~落ちる⇒<~落> : 滑落(滑り落ちる)、滾落(転がり落ちる)  
 d. ~戻る⇒<~回> : 跑回(駆け戻る)  
 e. ~出る/出す⇒<~出> : 爬出(這い出る)、滚出(転がり出る)  
 f. ~込む⇒<~进> : 跑进(駆けこむ)、飞进(飛び込む)  
 g. ~去る⇒<~开/走/去> : 跑开(走り去る)、飞走(飛び去る)  
 h. ~着く⇒<~到> : 游到(泳ぎ着く)  
 i. ~抜ける/越える/過ぎる⇒<~过/越> : 飞过(飛び越える)

さらに、日本語の「因果関係」を持つ複合動詞も、中国語の結果複合動詞に対応する。日本語の「因果関係」は前節で述べたように、複合動詞のV1がV2に先行し、V1の意図性が見られず、「原因—結果」の意味関係を持っている。同じく意図性を持たず、「因果関係」を持つ中国語の複合動詞は、生産性が高く、(63)でその例を挙げる。

- (63) 遊び疲れる: 玩累      飲み潰れる: 醉倒      溺れ死ぬ: 淹死  
 抜け落ちる: 脱落      焼け死ぬ: 烧死

望月・申 (2011:9)

しかし、沈 (2013) は中国語の結果複合動詞は統語的複合動詞と判断しており、以上の望月・申 (2011) における中国語の結果複合動詞は、語彙的複合動詞との対応という観点と異なっている。次に、沈 (2013) の観点を詳しく説明する。

影山 (1993) における統語的複合動詞は、「他動詞型補文構造」と「非対格型補文構造」という2つの場合がある。次にそれぞれの場合の例文をあげ、次の図1-7で統語構造を分析する。

a. 小坊主が除夜の鐘をつき終えた。

b. 夜の鐘が鳴りかけた。

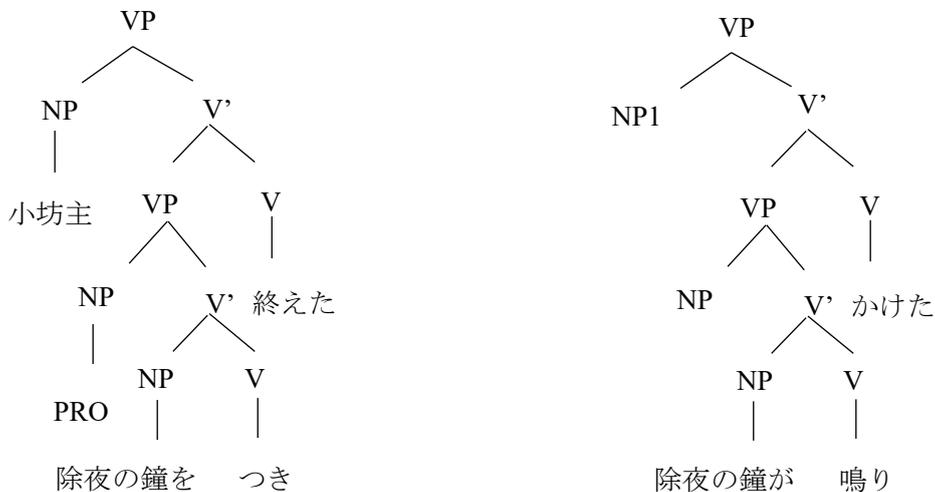


図1-7 「他動詞型補文構造」<sup>12</sup>と「非対格型補文構造」の統語構造

(影山 1993:141-142)

以上の2つのタイプからみれば、統語的複合動詞は、語彙的複合動詞の「補文構造」

<sup>12</sup> 「他動詞型補文構造」でのPROは、補文の「除夜の鐘をつき」の主語として音形の無い空要素として設定されている。

( (50e) の [Lcs2...[LCS1]...] ) のタイプと似ている。しかし、影山 (1993) ではこの両者の根本的な違いを述べていない。沈 (2013) においては、統語的複合動詞と語彙的複合動詞の違いは、複合動詞の複合レベルが統語レベルにあるか、それとも語彙的レベルにあるかである。また、複合動詞の複合レベルは CAUSE CHAIN と関わっている。沈 (2013) の結論として、中国語の結果複合動詞では CAUSE という関数が潜在的に表示されるので、統語レベルで複合すると考えられる。従って、中国語の結果複合動詞は統語的複合動詞であると結論される。

松本 (1998) では「～残す」「～残る」のような、「V1 が V2 の背景的情報を示し、V2 が意味的主要部になる」というタイプがあり、それは「先行事象—結果事象」型と呼ばれる。中国語の結果複合動詞は、この種類の日本語の複合動詞とも対応する。例えば、「残る」に相当する“-剩(下)”という V2 があり、「焼け(自動詞) + 残る(自動詞)」は中国語で“卖(他動詞) + 剩下(自動詞)”に対応する。しかし、中国語では V1 が非対格自動詞の場合に、このような対応関係は成立できない。例えば、「消え残る」の意味は中国語に対応させると、“\*消(非対格) + 剩下(自動詞)”とはいえない。従って、中国語において、V1 は非対格事象として、時間的な先行関係を持って V2 の事象とは連結することができない。この現象は、中国語の結果複合動詞の典型的概念鋳型が、使役状態変化の [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [BE AT -z]] と関連しているものであると考えられる (望月・申 2011: 13)。

以上の内容をまとめると、中国語の結果複合動詞は日本語の語彙的複合動詞と対応して、意味関係のタイプからみれば、「補文関係」「因果関係」と「手段」の一部という 3 つの場合がある。また、中国語の結果複合動詞は統語的複合動詞と見なすべきだという観点も挙げられた。この 2 つの矛盾した主張については、次の CAUSE CHAIN の内容を詳しく説明してから明らかにする。

#### 1.4.6 中国語の結果複合動詞の CAUSE CHAIN について

前節で日中の複合動詞の対応関係を踏まえたうえで、特に結果複合動詞は CAUSE

CHAIN と深く関わっていることが分かった。そこで、以下で CAUSE CHAIN について複合動詞の現れ方をまとめる。

前節の LCS の内容でも提示したように、CAUSE CHAIN のモデルは Jackendoff (1990)、影山 (1996) などによって提案された。CAUSE CHAIN の構成要素として、原因は動作動詞であり、結果は状態動詞と理解できる。その原因と結果を結ぶ関数は CAUSE で表される。

沈 (2013) によれば、日本語と中国語は同様に V1 と V2 を複合して表示するが、日本語は語彙レベルで複合するのに対して、中国語は統語レベルで複合する。そこで、日本語では CAUSE という関数を顕在的に表示するのに対して、中国語では CAUSE を潜在的に表示する (沈 2013: 378)。そして、沈 (2013) では中国語の結果複合動詞は統語的複合動詞であると主張されている。

(64) 日・中の共通点と相違点 ( () は潜在的であることを表す)

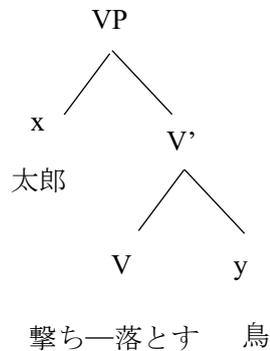
a. 語彙レベルの複合 (日本語) : [x ACT ON y] + [x CAUSE [y BECOME...]]

b. 統語レベルの複合 (中国語) : [x ACT ON y] + [(x CAUSE) [y BECOME...]]

沈 (2013: 378)

日中の結果複合動詞の複合レベルの LCS をさらに説明するために、次に 2 つの例を挙げて、それらの統語構造で CAUSE の顕在性と潜在性を表す。

a. 太郎は鳥を撃ち落とす



b. 武松打死一只老虎

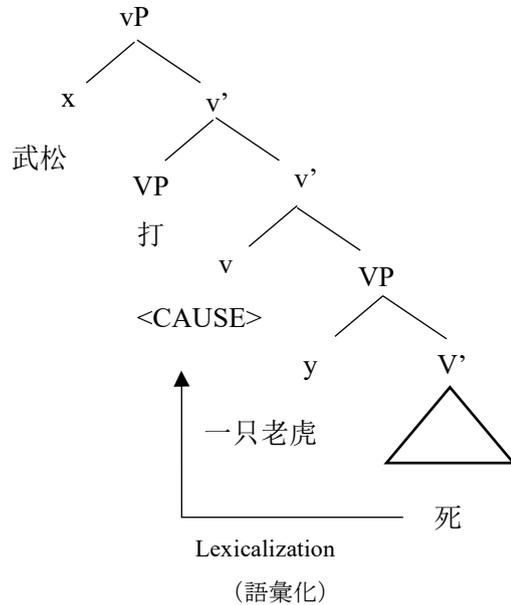


図 1-8 日本語と中国語の結果構文の統語構造 (沈 2013:379)

以上、日本語の語彙的複合動詞と、中国語の結果複合動詞の例を挙げた。図 1-8 の「a. 太郎は鳥を撃ち落とす」では「撃ち落とす」が語彙レベルで複合し、語彙的複合動詞と見なされる。複合動詞「撃ち落とす」の統語構造は [V-CAUSE-V] の 1 つの位置に生起する。

それに対して、「b. 武松打死一只老虎」の“打死”は統語レベルで複合して、統語的複合動詞と見なされる。“打死”の統語構造は V1+CAUSE+V2 の 3 つの位置に生起するという複雑な状況を示す。さらに、[x ACT ON y] + [(x CAUSE) [y BECOME [BEAT-z]]] の BECOME という述語“死”が語彙化して、[V1-CAUSE] (“打”-CAUSE) と複合するという現象が起きる。

沈 (2013) の CAUSE CHAIN についての結果複合動詞の観点は、影山 (1993) での語彙的複合動詞と統語的複合動詞の区別を補足している。しかし、沈 (2013) の観点が本当に中国語の結果複合動詞に適用できるかどうか、特に本研究の対象となる複合動詞

に適用できるかどうかは問題である。

また、CAUSE については、すべての結果複合動詞が CAUSE を持っているわけではない。例えば、例 (63) で挙げた日本語の「因果関係」に対応する中国語の複合動詞“玩累”“脱落”“烧死”も「因果関係」を持つと考えられる。ここでこれらの動詞はどの種類に属するにかにかかわらず、V1 が原因であり、V2 が結果であるが、V1 に意図性が見られないことは確かである。

影山 (1996) の LCS は前節で述べたが、「使役」を表す時には CAUSE だけではなく、CONTROL も使える。その CAUSE と CONTROL の違いというのは、前者で使役の意図性が見られる一方、後者では意図性が見られないという点である。従って、“玩累”“脱落”“烧死”には「使役」の意味はあるが、それは CAUSE ではなく、CONTROL で表される。

中国語の結果複合動詞と対応する日本語の複合動詞は確かに幅広く存在するが、日本語の結果複合動詞は語彙レベルで、中国語の方は統語レベルで複合する。以上の先行研究に基づいて、「習得」に関する動詞において具体的な状況を分析していく。

#### 1.4.7 本研究における複合動詞の観点

結果複合動詞は達成動詞の LCS と類似しているため、達成動詞と同じな語彙概念を持つ結果複合動詞について、次のような観点によって第五章の P131 で考察を行う。

まず、先行研究で複合動詞において V1・V2 の意味関係は重要な問題とされている。V1・V2 と関わる項構造と意味役割の受け継ぎの問題も検討する必要がある。

また、本節は結果複合動詞を中心とするので、主語と目的語の制約は「他動性調和の原則」と「直接目的制約」で分析する。

そして、本節では日本語と中国語の対照分析を行うので、両方とも持つ CAUSE CHAIN について検討し、統語レベルの違いを探す。

### 1.5 思考動詞について

以上の考察で「習得」に関する動詞を単純語動詞、あるいは複合動詞として持つ性質・特徴を分析した。しかし、類義の動詞グループの内部の性質だけが重要であるとは言えない。この動詞グループのほかの動詞との関係、あるいはすべての動詞での位置づけも語彙的意味分析の一環となる。「習得」に関する動詞といえば、動作が含まれるが、心理的な動作と考えてもよい。従って、本節で「習得」に関する動詞を、心理的な動きを表す動詞と関連づけ、「心理的」の意味側面を挙げて分析する。

吉永 (2008) は、感情・知覚感覚・思考など心理作用を表す動詞を心理動詞と規定した。また、心理動詞の中核的な意味では、感情・知覚感覚・思考認識のいずれかの精神作用を表すのに対して、表情態度など顕著な外見的兆候を表さず、伝達活動や目的遂行活動を表さないという3つの点が認められる。

実際に心理動詞には下位分類があり、表 1-2 が表しているように、「感情的」「知覚感覚的」「思考認識的」という3つのタイプに分けられる。

|               |                                  |                       |
|---------------|----------------------------------|-----------------------|
| 感情的<br>心理動詞   | 感情：色々な精神状態、心理的作用。                | 悩む、困る、あきれる、焦る、悲しむ     |
| 知覚感覚的<br>心理動詞 | 知覚感覚：感覚器官から刺激により感知される神経作用。具体的。   | 痛む、痺れる、震える、音がする       |
| 思考認識的<br>心理動詞 | 思考認識：知的な精神活動。目的を伴うことが多く、能動的、意志的。 | 思う、考える、疑う、信じる、わかる、覚える |

表 1-2 心理動詞の下位分類 (吉永 2008: 87)

「習得」に関する動詞が表す心理活動は、表 1-2 の「思考認識的心理動詞」が示す内容と類似している。従って、「習得」に関する動詞を、「思考動詞」との関係について

て分析していく。

### 1.5.1 思考動詞のアスペクト

国立国語研究所 (1985) は、心理動詞は時間的境界がはっきりしないため、アスペクトから解放されると述べている。また、心理動詞はすべて状態動詞と見なされる観点もある。例えば、Grimshaw (1990) は、*fear* は状態動詞であるので、進行形 *be-ing* を持たないと述べた。なお、状態動詞の場合だけではなく、Endo and Zushi (1993) によれば、*love* は主語の特質を示す个体述語であることが原因で、進行形 *be-ing* もない。そのいずれも、心理動詞はアスペクトを持たないと主張している。

しかし、これらの観点に対して、三原 (2000)、吉永 (2008)、高橋 (2017) などは心理動詞がアスペクトを持っていると主張している。本研究では、心理動詞を吉永 (2008) に基づいて、アスペクトを持つ観点から分析を行う。

吉永 (2008) において心理動詞は自他動詞によって、「驚く型・悩む型・信じる型」という 3 種類に分けている。その中で同じ自動詞である「驚く型・悩む型」は、比較的短期的・長期的な心理動作を表す。本研究での対象語は他動詞であるので、他動詞の「信じる型」だけに注目する。「信じる型」の心理動詞は完全には思考動詞に当てはまらないが、「考える、覚える、思う」などの思考動詞が確かに含まれる。次に、動詞の意志性・持続性・限界性の側面から、「信じる型」の特徴をまとめる。

まず、意志性について、「信じる型」の主語は多くが意志性のある「主体」(Agent) を表すが、「経験者」(Experiencer) の場合も含まれる。つまり、「信じる型」の動詞は意味内容によって、対象への働きかけを強く含意する意志性の強い場合と、動作対象への働きかけが積極的でない意志性が弱い場合がある。これは動詞の「～しよう」の意志形で検証される。例 (65) が示しているように、(65a) は主語が「主体」を表し、意志性が強く見られる。それに対して、(65b) の主語は「経験者」であり、意志性が弱いので、意志形が (65a) より少なく使われる。

- (65) a. 考えよう、決心しよう、理解しよう (Agent 主語)  
 b. \*疑おう、心配しよう、恐れよう<sup>13</sup> (Experiencer 主語)

吉永 (2008: 100)

また、持続性について、「信じる型」の思考動詞が具体的に検討された。これらの動詞には持続性の強いものと持続性の弱いものの両方が含まれる。例 (66) のように、「長い間」と共起できる動詞では持続性は強く、「長い間」と共起しにくい動詞は持続性が弱いと判断できる。

- (66) a. 長い間 [信じている／願っている／望んでいる／念じている／祈っている]  
 (持続性が強い)  
 b. \*長い間 [わかっている／忘れている／決意している／覚悟している／把握している]  
 (持続性が弱い)

吉永 (2008: 110)

次に、心理動詞はすべて「開始限界」を持っているので、ここでの限界性は「終了限界」のみを対象として考察する。例 (67) のように、「信じる型」動詞の終了限界性を観察するために、①「～終わる」、②結果構文、③「～かけ」構文、④完了的時間成分という文法的特性を利用して、動詞の文法現象を考察する。例 (67) では①～③の文法性は低いと見られるので、それらの終了限界性が見られない。また、「覚える、暗記する」などの思考動詞は (67e) の例文が成立するので、弱い限界性を有すると思われる。

<sup>13</sup> 例 (65b) の「疑おう、心配しよう、恐れよう」は吉永 (2008:100) において、非文のマーク「\*」をつけた。しかし、「あのサー・オズワルドを疑おうなんて、いったい誰が考えるかしら」(『七つの時計』, アガサ・クリステイー) のような例文があるので、非文ではない場合もみられる。また、吉永 (2008) の観点によって、例 (65b) の場合は意志性がないわけではなく、意志性が弱いと示したので、本研究は「?」のマークはより適切だと思われる。

そして、例 (66b) (67a) (67c) も完全に非文とはいえないので、本研究は吉永 (2008) との違う判断を持っている。

- (67) ①「～終わる」 (限界性のない動詞は成立しにくい)
- a. \* [考え／理解し／覚え] 終わる。
- ② 結果構文 (限界性のない動詞は成立しにくい)
- b. \* テストの問題を完璧な出来に [考えた／熟考した]。
- ③「～かけの N」 (限界性のない動詞はこの名詞化が許容されない)
- c. \* [考えかけ／理解しかけ] の数学の定理
- ④完了的時間成分「～で」との共起 (限界性のない動詞は共起できない)
- d. ? 難しい数学の問題を五分で [理解した／考えた／分かった]。
- e. 英語の単語帳を一冊、三日間で覚えた。

吉永 (2008: 115)

以上の考察の結果について、思考動詞は意志性と持続性を持つことは確かである。しかし、例 (67) の分析は不十分であるので、思考動詞の終了限界性の状況分析が必要となる。

### 1.5.2 思考動詞の主観性

思考動詞は、「主観性」というもう 1 つの特徴を持っている。思考動詞は形態的に補文を取る特徴があり、非断定の意味で使われる精神活動を表している。そこで、「主観性」について、Hooper (1975) において叙実性 (factivity) ・ 断定性 (assertivity) 補文を取る動詞を、(68) のように 5 つのグループに分けている。

叙実述語 (factive predicate) とは、話し手が思考動詞の補文によって表される命題が真であることを前提とするが、非叙実述語 (non-factive predicate) はそのような前提を持っていない。また、断定性は強断定 (strong assertivity) ・ 弱断定 (weak assertivity) が含まれる断定と非断定に分けている。それは、主体の表す強い・弱い意志が示されたのか、意志が示されなかったのかによって判断できる。

以下の「叙実・断定」動詞では、「習得」に関する動詞と意味の近い“learn”がある。また、すべての「叙実・断定」動詞について、“know”という基本的な意味があるうえに、ほかの意味が付加している<sup>14</sup>。

- |                 |                         |
|-----------------|-------------------------|
| (68) a. 非叙実・弱断定 | think, believe, suppose |
| b. 非叙実・強断定      | admit, affirm, agree    |
| c. 非叙実・非断定      | be likely, doubt, deny  |
| d. 叙実・断定        | discover, know, learn   |
| e. 叙実・非断定       | regret, forget, amuse   |

Hooper (1975: 92)

次に、森山 (1992) は文末思考動詞の「思う」について、「不確実を表す用法」と「主観明示法」という2つの場合に分けている。つまり、例 (69a) のように、不確実を表す用法は、話し手自身が本来わからないものとして捉えているのではなく、独断として話し手の認識を表す。また、例 (69b) のように、主観明示用法は、個人的な意見を述べる。

- (69) a. あの辺りに停めたと思う。(不確実を表す用法)  
b. 日本の医療制度は間違っていると思う。(主観明示用法)

森山 (1992: 108, 110)

森山 (1992) に基づいて、小野 (2011) は「思う」の補文の内容を、①蓋然性表示、②主観表示、③意志表示、④想起内容表示という4つの場合を設定した。以下で示しているように、例 (70a) は非事実であり、蓋然性を表す。例 (70b) は事実と関係なく、伝達要素の強い主観表示である。また、例 (70c) の用法は、会議などの場面で使われる進行に関する表現であり、「～たい」「～しよう」のように意志形の補文であるが、

---

<sup>14</sup> “Every verb of the semifactive class includes the basic meaning of *know* but, in addition, includes some others semantic content.” (Hooper 1975: 109)

事実を示している。例 (70d) では「彼が来る」ことを想起したもので、「うれしい」という評価がなされる。

- (70) a. 明日は晴れると思う。 (蓋然性表示)
- b. この本を買いたいと思う。 (主観表示)
- c. この第3 専門部会を終わらせていただきたいと思います。 (意志表示)
- d. 彼が来ることをうれしく思う。 (想起内容表示)

小野 (2011: 199)

森山 (1992) と小野 (2011) の「思う」についての観点を合わせて、「習得」に関する動詞の主観性についての分析の側面を考える。まず、Hooper (1975) では「叙実・断定」動詞 “learn” のように、動詞の補語は確実性を示している。つまり、(70a) の蓋然性表示は「習得」に関する動詞には使われない。また、伝達要素の強い主観表示は、「習得」に関する動詞には適合しないと考えられる。最後の意志表示と想起内容表示は、断定・叙実の特性と一致するが、本当にあるかどうかは実例で分析する。

第六章は、まず思考動詞の限界性があるか否かを例文で先行研究に基づいて検討する。また、「習得」に関する動詞は補語を持つ場合があるが、それらの補語の内容を「思う」の場合と参照しながらまとめる。

## 第二章 「習得」に関する動詞のアスペクトについて

「習得」に関する類義語動詞のグループの語彙的意味を明らかにするために、本章では動詞の重要な意味としてアスペクト的意味を分析する。日本語の動詞アスペクトとは、動詞が表す事象が時間との関係を示す性質である。したがって、本章の分析によって、「習得」に関する動詞グループでは、動詞がそれぞれ完成性・継続性、限界性などのアスペクト的性質を持つことについて明らかになる。

本稿の対象が「習得」に関する類義語動詞であるといっても、この動詞グループの範囲は明確ではないので、その基準を決めなければならない。類義語の意味を分析する場合、それらの動詞の意味が近いほど、区別しにくくなり、さらに細分化された意味分析が必要となる。そこで、「習得」に関する動詞グループに入れる基準として、単純に「習得する、学習する」というような意味を持つこととする。本稿で対象とする『新明解類語辞典』(2015)と『類語大辞典』(2002)では、新しく編集され、収録した項目数も多数である。この2つの類義語辞典の項目の意味と合わせて、「習得」に関する動詞を、「修める、習得する、マスターする、研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」のような動詞に絞る。

本研究は動詞の語彙的意味を明らかにするために、以下の4つの側面からアスペクトを分析する：

(一) この動詞グループは動詞の基本的なアスペクト的性質、完成性・継続性をどのように示しているのかについて明らかにする。

(二) 時間と関係があるので、動詞のアスペクトは限界性が重要であり、「習得」に関する動詞グループの限界性を検討する。

(三) 変化があるかどうかについて検討する。また、変化があるなら、その変化のプロセスの様子を考察する。

(四) 変化がある場合に、動作の主体か客体かのどちらに変化が起きるについて明

らかにする。

## 2.1 動詞の分類について

本研究で定めた「習得」に関する動詞は、「修める、習得する、マスターする、研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」という動詞グループに絞られる。この動詞グループが、動作動詞と変化動詞のどちらに属するかという、基本的な動詞分類を行った。そして、実例で考察する前に、まず動詞分類の仮説を立てる。

### (1) 「習得」に関する動詞の分類についての仮説：

「習得」に関する動詞には動作動詞と変化動詞がともに存在する。

#### 動作動詞

研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う

#### 変化動詞

修める、習得する、マスターする

以上の仮説では、動作・変化の観点からみれば、「習得」に関する動詞には動作動詞と変化動詞がともに存在する。動詞の本来の性質から見れば、動作動詞のグループでは、必然的な終了限界がなく、動作の形で持続する。変化動詞のグループは、変化達成の時点で状態の変化が見られ、必然的な終了限界がある。具体的な状況は以下の例文で表す。

### (2) 子供たちは貧しさの中で多くのものを学ぶ。<sup>15</sup>

(『世界は「使われなかった人生」であふれてる』、沢木耕太郎)

---

<sup>15</sup> 「学ぶ」の意味は『大辞林』(2006)の解釈によれば、動作動詞の「勉強する。学問をする。」の意味を持つのではなく、「教えを受けて知識や技芸を身につける。」のような変化動詞の使い方も見られる。本研究では「学ぶ」の動作動詞の使い方だけを基本的な使い方として扱われ、変化動詞の使い方は検討しない。

(3) そんなふうに、間違いになりやすい規制が音楽にはうんとありまして、それを勉強する。

(『同じ年に生まれて』, 大江健三郎・小澤征爾)

(4) そのための段階的な指導を, 前半のレッスンで簡単な設定を通し「問題解決のステップ」によって学習する。

(『子どもの規範意識を育てる』, 河村真理子)

(5) またマンションで犬を飼いたいという一家が、カンニングの竹山隆範とともに犬の飼い方を習う。

(『新潟日報』, 共同通信社・新潟日报社)

(6) セミナーに参加した医師や看護師の中から数人が MD アンダーソンがんセンターに行き約2ヶ月研修する。

(『最先端のがん治療』, 実著者不明)

(7) 1957年10月14日、イタリアのガヴィに生まれ、ジェノヴァ大学で現代史を修める。

(『ユダヤ人とドイツ』, エンツォ・トラヴェルソ・宇京頼三)

(8) そして、ブルックナーは、このゼヒターのシステムを完全にマスターする。

(『ブルックナー』, 門馬直美)

(9) 安政二年(1855)幕府の海軍伝習所創設とともに伝習生となり、海軍操練、航海術、造船学をはじめオランダ語、天文、海洋、代数、幾何なども習得する。

(『百五十九人の大臣』, 松山弘志)

以上の例文は本研究で扱う「習得」に関する動詞のスル形の現在時を表している。このような例文では動詞の本来の意味的な特徴、すなわち動作動詞と変化動詞の特徴が現れやすい。例(2)～(6)の動作動詞の場合に、(6)の「2ヶ月」という時間限界がある以外に、(2)～(5)の動作動詞では動作の必然的な終了限界がないことが表さ

れている。しかし、例 (7) ～ (9) では変化動詞が状態への変化達成を意味しているので、変化達成時は終了限界であると理解できる。

さらに、この仮説の分類が適切であるかを検証するために、動作動詞・変化動詞による動詞の完成性・継続性の違いを区別する必要がある。詳しい内容はそれぞれ第 2.2 節と第 2.3 節で考察する。

## 2.2 完成性

完成性は、言い換えれば、「限界づけられ性」ともいえる。工藤 (1995)・工藤 (2014) によれば、完成性は「ひとまとまり性」「開始限界達成性」「終了限界達成性」「変化達成性」という 4 つのタイプがある。前の 3 つは動作動詞に対応し、最後の 1 つが変化動詞に対応する。本節では、動詞のアスペクト的意味の完成性が表す限界性を、動作動詞と変化動詞の 2 つの場合に分けて考察する。

### 2.2.1 動作動詞の場合

本節では動作動詞の完成性について検討するために、以下のように「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」のスル形の過去形の例文を選んだ。

(10) 二十年にもおよぶ持病の片頭痛とのつきあいの中で、私はいろんなことを学習した。

(『みみずくの夜メール』, 五木寛之)

(11) 日曜日には一緒に勉強した。

(『TV ピープル』, 村上春樹)

(12) 妻の白玉玲さんも前年の 1958 年に入学しており、八年間、二人は一緒に学んだ。

(『北京』, 安保華子)

(13) 福島は週二回、五年間ぐらい原田からドラムを習った。

(『東京 Jazz』, 高木信哉)

- (14) 明治八年から三か年、ハーバード大学で法律を学び、あと二年間はニューヨークの法律事務所で実務を研修した。

(『アメリカ素描』, 司馬遼太郎)

動作動詞は必然的な終了限界を持っていないが、時間的限界の表す副詞と共に起すれば、動作の限界性は副詞によって変わる。例 (10) ~ (14) は「二十年」「日曜日」「八年間」「二年間」のようなある時間帯と共に起し、これらの動詞は「完成性=ひとまとまり性」を表している。この場合、動詞が表す運動の開始限界と終了限界がともに捉えられ、時間的なひとまとまりが示されるので、「ひとまとまり性」を表していると言える。

また、動作動詞の場合には、「ひとまとまり性」のほかに、開始限界達成性も終了限界達成性も見られる。実例として以下の例文を挙げる。

- (15) ハリー、ロン、ハーマイオニーは三人とも、他の寮生と離れて、夜遅くまで勉強した。

(『ハリー・ポッターと賢者の石』, J・K・ローリング)

- (16) しかし私たちは、大学に入る前に、かなりの一般教養を学びました。

(『家族の力はとり戻せるか』, アンドレーアス・ヘルトリヒ・チャールズ・モリソン)

- (17) 初めは、昭和二十三年頃、五十歳になる少し前に一水会の弦田英太郎さんのところにいって絵を習いました。

(『ビッグ・リトル・ノブ』, 小川信子・田中厚子)

例 (15) ~ (17) では、動詞の完成性は「終了限界達成性」と「開始限界達成性」を表す。例 (15) (16) はそれぞれ「夜遅くまで」「大学に入る前」という終了限界を捉え、

例 (17) は「昭和二十三年頃」という開始限界を捉えている。従って、この場合の動詞は完成性を表す時に、(15)(16) は「終了限界達成性」、(17) は「開始限界達成性」を表す。

本節の実例を通して、「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」という動詞グループはスル形で動詞の完成性を表す時に、共起している副詞によって「ひとまとまり性」「開始限界達成性」「終了限界達成性」を表せることがわかった。

### 2.2.2 変化動詞の場合

本節では変化動詞の完成性について検討するために、以下のように「修める、習得する、マスターする」のスル形の過去形を取り上げる。

(18) 医師になって五年が過ぎ、内科治療の基礎と胃腸透視・上部消化管内視鏡検査、腹部超音波検査をどうにか習得した。

(『ひとを治療するということ』, 高森道雄)

(19) すぐにスタイルだけはマスターした。

(『タン・ナピ・ナピ』, 平島幹)

(20) 十代の頃にピアノ、ヴォイス、音楽理論、ダンスを修めた。

(『ECM の真実』, 稲岡邦彌)

本節では第 2.2.1 節と同じく、動詞の限界性を考察するために、時間的な成分と共起する例文を挙げた。また、第 2.2.1 節の例文と違い、例 (18) ~ (20) では「五年」「すぐ」「十代の頃」という時間帯と時点を表す 2 タイプの共起成分がある。「五年」「十代の頃」が時間帯を表す場合、焦点は時間帯の終了限界に置かれ、その終了限界時は変化達成時となる。また、「すぐ」という時点を表す場合、「すぐ」の前後で主体の状態が変化するので、「すぐ」という時点は変化達成時であると理解できる。そこで、以上の場合に「修める、習得する、マスターする」のスル形は完成性を表す時に、「変化達

成性」を表すと考えられる。

「習得」に関する動詞グループの完成性を考察した結果、それらの動詞のスル形の限界性は「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」と「修める、習得する、マスターする」という2タイプに分けられる。図 2-1 でこの2タイプの限界性を示す。

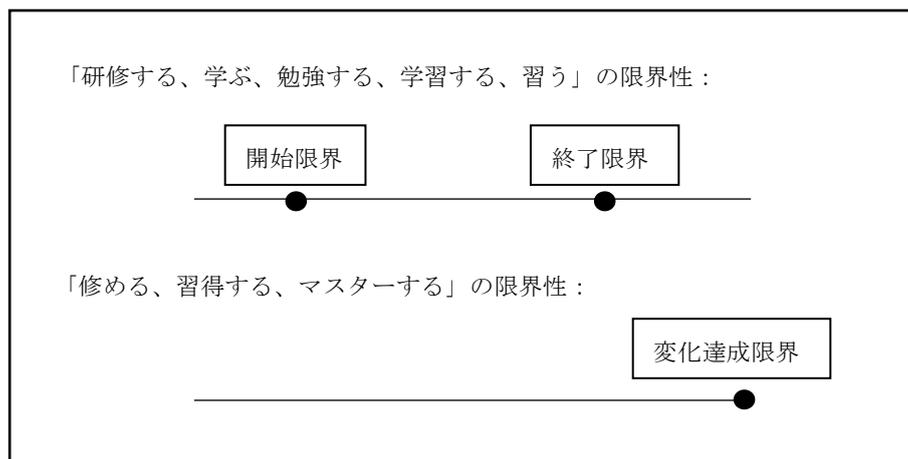


図 2-1 「習得」に関する動詞のスル形の限界性

従って、「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の場合には開始限界と終了限界が捉えられ、「修める、習得する、マスターする」の場合には終了限界、言い換えれば変化達成限界が捉えられる。工藤 (1995) などによれば、この2タイプの限界性はそれぞれ動作動詞と変化動詞の限界性と一致する。

## 2.3 継続性

動詞の出来事が時間の流れによって表される構造は、限界の時点のほかに、継続性を表す過程もその一部である。日本語動詞はスル形・テイル形が基本的なアスペクトの形であり、本節でテイル形について検討する。

### 2.3.1 動作動詞の場合

「習得」に関する動詞の「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」のグループのテイル形の例文として以下を挙げる。例 (21) ～ (25) の動詞のテイル形はすべて動作継続を表している。

(21) 訪問看護ステーション内においても、独自で研修している。 (動作継続)

(『継続看護実践ガイド』, 佐藤清江)

(22) 高校生らしき受験生たちが、懸命に勉強している。 (動作継続)

(『いやでもわかる経済摩擦』, 実著者不明)

(23) 子どもは、「スイミー」の授業で、倒置法を学習している。 (動作継続)

(『授業づくりへの道』, 大森修)

(24) 妹達は、三歳から三味線や琴を習い、茶室で茶立ての作法も習っている。

(動作継続)

(『朔太郎とおだまきの花』, 萩原葉子)

(25) わが家では、ふたりの姉も含めて、結局、姉弟全員が、M学園で学んでいる。 (動作継続)

(『徳川慶喜家によろこそ』, 徳川慶朝)

### 2.3.2 変化動詞の場合

「習得」に関する動詞の「修める、習得する、マスターする」のグループではテイル形は例 (26) ～ (28) のように変化結果の継続を表す。

(26) 明治五年官費で米国へ留学し、造船学を修めている。 (変化結果の継続)

(『維新京都を救った豪腕知事』, 明田鉄男)

(27) したがって 8 までの命名しか習っていないチンパンジーにとって、8 という数詞は 8 位上の数を命名するものとして習得している。 (変化結果の継続)

(『チンパンジーの心』, 松沢哲郎)

(28) あらゆる格闘技を身につけ、様々な武器を使い、メカニックの取り扱いもひと通りマスターしている。(変化結果の継続)

(『仮面ライダーV3 大全』, サデスパー堀野など)

奥田 (1977) の動作動詞と変化動詞の区別では、テイル形が「動作の継続」を実現するか、それとも「変化の結果の継続」を実現するののかという基準が示されている。例 (21) ~ (25) と例 (26) ~ (28) から見れば、「習得」に関する動詞は2タイプのグループに分かれ、動作動詞と変化動詞の特徴とそれぞれ一致する。

しかし、「修める、習得する、マスターする」のテイル形は変化結果の継続だけを表すのではなく、動作継続を表す場合もある。例文は以下のようになる。

(29) 小学校 1 学年から、いや就学前から必死で英語を習得している幼児や児童の姿を想像することができるのではないのでしょうか。(動作継続)

(『日本の学校英語教育はどこへ行くの?』, 河合忠仁)

(30) しかしそういうミュージシャンも先ほど説明したような呼吸法や姿勢についてちゃんとマスターしている。(動作継続)

(『サックス入門ゼミ』, 河原塚ユウジ))

(31) また、6月、9月の英語教室や国語のローマ字学習で、外国の言葉や文字を意欲的に習得していた。(動作継続)

(『エンカウンターで道徳』, 岡田直美)

以上の動作継続の現象は工藤 (2014) の観点と同じである。工藤 (2014) では「主体変化主体動作動詞」のテイル形は基本的に結果継続を表す。例えば、

(32) <主体変化主体動作動詞：結果継続>

- ・花子は浴衣を着ていた。
- ・太郎は一番前の席に座っていた。
- ・帰ってみたらお客さんが来ていた。

(工藤 2014: 210)

しかし、(32) のように「主体変化主体動作動詞」は再帰構造であり、「主体の意志的動作」の側面が捉えられる。そこで、動作場所や移動経路を表す「デ格」「ヲ格」の名詞と共起した場合、動作の様態を表す副詞が共起した場合には、動作継続を表すようになる。

(33) <主体変化主体動作動詞の動作継続を表す場合>

- ・お母さんが鏡の前で浴衣を着ていた。 (動作継続)
- ・先生が大通りを車で帰っていた。 (動作継続)
- ・おばあさんがよろよろと立ち上がっていた。 (動作継続)

(工藤 2014: 210)

「習得」に関する動詞も同じように、例 (29) ～ (31) では「必死で」「ちゃんと」「意欲的に」はすべて動作の様態を表す副詞である。従って、例 (29) ～ (31) は動作の様態を表す副詞と共起し、継続性も動作継続を表す。

「習得」に関する動詞の 2 タイプの動詞の継続性は例文から見れば、継続性の形がそれぞれ違っている。具体的に、「習得」に関する動詞の 2 タイプを限界性と合わせて図 2-2 で表す。

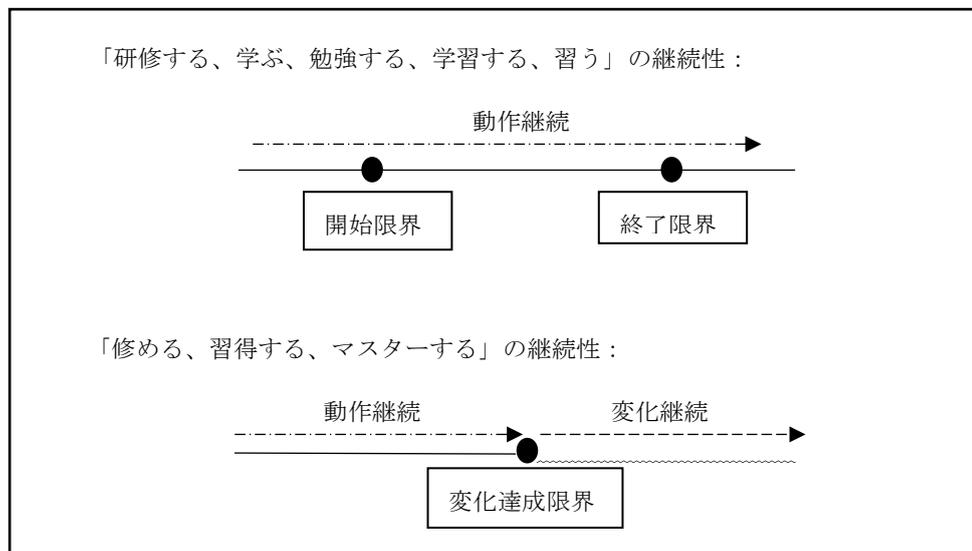


図 2-2 「習得」に関する動詞のスル形の継続性

「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」というグループでは、運動の期間のすべての時点で、まるごとの動作が行われる。従って、開始限界・終了限界があるにもかかわらず、継続性は動作継続を表す。

一方、「修める、習得する、マスターする」というグループでは、運動には変化が見られるので、変化達成限界で運動を 2 部分に分ける。動詞の継続性は、基本的に変化達成限界の後に焦点が置かれるので、変化継続を表す。しかし、動作の様態を表す副詞などと共起すれば、変化達成限界の前に焦点が置かれ、動作継続になる。

## 2.4 意志性

奥田 (1977) では動詞が「動作・変化と主体・客体の関係」によって区別されると提示した。そして、工藤 (1995) ・工藤 (2014) でも、この基準によって動詞の分類が行われた。工藤 (2014) において、時間限界のあり様には、客体における変化の有無、主体の意志性の有無と絡み合っていると指摘されている。従って、意志性の重要性によって、本節で「習得」に関する動詞の意志性を検討する。

「習得」に関する動詞を、森山 (1988) と工藤 (2014) の観点にそれぞれ合わせて、どの動詞分類に近いのかを判断する。

森山 (1988) では動詞を持続の局面について「過程」「維持」「結果持続」という 3 種を示した。具体的な説明は以下のようになる。

(34) 「過程」：動きが運動として展開している期間

「結果持続」：動きの結果が持続的である

「維持」：動きの結果の保存が主体に行われる

(森山 1988: 142)

以上の「結果持続」と「維持」は、動きの結果が主体に行われるか否か、つまり「主体の意志性」によって区別される。例えば、「三時間時計がとまる (結果持続)」「人が三時間座る (維持)」の違いである (森山 1988: 142)。

「習得」に関する動詞では「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」は前節の考察によって動作動詞であり、持続の局面において「過程」を表す。また、「修める、習得する、マスターする」は変化動詞であり、その変化の結果の保持が主体によって行われるか否かについて、次の例文で判断する。

(35) 学究肌の難波は、一念発起して通信教育で読唇術を習得した。

(『迷犬ルパンの東京暗殺マニュアル』, 辻真先)

(36) 彼は「オヌシ、モ、ワルジャノウー」という日本語をはじめ各種昔のひと  
の会話を完璧にマスターした。

(『超貧乏旅』, 田中良成)

(37) パリでカストリアディスは、1946 年から 3 年間ソルボンヌ大学のルネ・ポ  
ワリエ教授の下で哲学の国家博士号の課程を修める。

(『環境保全と自治社会の形成』, 里上讓衛)

例 (35) ～(37) は動詞の主体がそれぞれ「難波」「彼」「カストリアディス」である。以上の例文を通して、「習得した」「マスターした」「修める」の変化結果は動作の主体によって行われることがわかった。そこで、森山 (1988) によって、「修める、習得する、マスターする」の持続の局面では「結果持続」を表すものとする。

工藤 (2014) は主体の問題だけではなく、客体における変化の有無、主体の意志性の有無という観点を絡み合わせて、動詞の下位分類を行った。例えば、主体動作客体変化動詞（開ける、着せる、建てる）、主体変化主体動作動詞（着る、帰る、座る）、主体変化動詞（開く、腐る、建つ）、主体動作動詞（揺する、飲む、歩く）である。その中で、主体変化動詞（開く、腐る、建つ）と主体動作動詞（揺する、飲む、歩く）は自動詞の場合が多いので、ここで主体動作客体変化動詞（開ける、着せる、建てる）と主体変化主体動作動詞（着る、帰る、座る）に注目する。

まず、主体動作客体変化動詞（開ける、着せる、建てる）の場合は、主体における動作の側面と客体における変化の側面の両方を捉えている。例 (38) は主体の観点から動作の側面を焦点化し、動作継続を表す。しかし、この動詞グループでは変化の側面も捉えられるので、例 (39) は結果継続を表す。例 (39) の動作主体「太郎」「花子」は変化を客体である「手」「髪」にもたらず。

| (38) <動作主体> | <動作客体> | <動作継続> |
|-------------|--------|--------|
| ・先生が        | 窓を     | 開けていた。 |
| ・大工さんが      | 家を     | 建てていた。 |
| ・太郎が        | 荷物を 棚に | 上げていた。 |
| ・花子が 教室に    | 花を     | 飾っていた。 |

- (39) ・太郎が手を上げていた。 (結果継続)  
 ・花子は髪に花を飾っていた。 (結果継続)

(工藤 2014: 205)

また、主体変化主体動作動詞（着る、帰る、座る）の場合では、自らに変化をもたらす主体の意志的動作を表す。主体動作客体変化動詞との違いは、主体の動作が、客体に変化をもたらすか、それとも主体自身にもたらすかという区別である。前節での例 (32) 「花子は浴衣を着ていた」が表すように、主体変化主体動作動詞は結果継続を表し、「花子」の動作を通して「花子」自身に変化をもたらす。

「習得」に関する動詞は前節で示したように、「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」と「修める、習得する、マスターする」の2グループに分けられる。各グループの例文を例 (40) ～(43) と例 (35) ～ (37) で示す。

(40) 犬や猫は一度に多数の子を出産し、生まれてきた子は、生後百日ぐらいの間に、親や、同時に生まれた兄弟姉妹からさまざまなことを体験的に学習する。

(『人類の自己家畜化と現代』, 吉田眞澄)

(41) 目下、娘たちは新潟市内の学校で集中的に日本語を勉強している。

(『告白』, チャールズ・R・ジェンキンス)

(42) 涂宗瀛は何といっても曾国藩の薫陶を受け、また理学を学んでいる。

(『西太后』, 高陽)

(43) 妻はカルチャーセンターに通って英会話を習っている。

(『小説伝・純愛伝』, 小林恭二)

例 (40) ～(43) での「生まれてきた子」「娘たち」「涂宗瀛」「妻」は動詞の主体と見なされる。これらの例文では変化の意味がないので、動作の主体と動作客体の「さまざまなこと」「日本語」「理学」「英会話」は変化を受けない。これは主体動作動詞の例 (38) の状況と同じである。

例 (35) ～ (37) での主体はそれぞれ「難波」「彼」「カストリアディス」である。また、主体から動作を客体の「読唇術」「昔のひとの会話」「国家博士号の課程」にもた

らし、そして起こされた結果は主体自身に変化をもたらす。従って、「修める、習得する、マスターする」の動詞グループは主体変化主体動作動詞の状況と同じである。

本節で森山 (1988) の観点から主体において変化の結果が保持されるかどうかを考察した。また、工藤 (2014) によって主体の意志性や、変化の結果が主体あるいは客体にもたらしたかなどの問題において、「習得」に関する動詞の主体・客体を多面的に分析した。

## 2.5 変化プロセスについて

第 2.2 ～ 2.4 節では「習得」に関する動詞の 2 タイプを中心としたが、本節では変化動詞の変化プロセスに注目し、「習得」に関する動詞の「修める、習得する、マスターする」のグループを分析対象とする。

高橋 (2003) は動詞の変化の局面について詳しく検討した。その中で、変化動詞は主体の変化を表す動詞であることが示された。そして、その変化を瞬間的な変化と時間のかかる変化の 2 タイプに分けている。瞬間的な変化の場合には、変化の局面だけあり、変化の局面は変化の始発と完成の局面を含む。また、時間のかかる変化の場合には、変化始発の局面・変化の局面・変化完成の局面という 3 つの局面がある。

高橋 (2003) によれば、変化は瞬間的な変化として表される場合が多いが、時間のかかる変化もかなり存在する。その場合に、変化の局面で捉えているのか、完成の局面で捉えているのかが問題になる。例 (44) ～ (46) は時間のかかる変化を表しているが、例 (44) は変化の局面を捉え、例 (45)(46) は完成の局面を捉えている。つまり、同じ時間のかかる変化であっても、捉える局面が違っているのである。

(44) 先生のお宅から渋谷の駅までくる間にまめができた。(私の人生観)

(45) うん、もう少し…できた。(やさしい日本人)

(46) ごはん、もうすぐできます。(むらぎも)

(高橋 2003: 72)

また、工藤 (2014) では、例えば「建つ」のような変化動詞は、長い時間のかかる変化を表す。その中で、変化プロセスが表されているが、変化達成時間が問題になる。また、工藤 (2014) によれば、変化が瞬間的に起こる場合は少なく、通常、一定の時間がかかる。そのような動詞は、「どンドン、徐々に、次第に」のような進展プロセスの様子を表す副詞と共起した場合には、変化動詞のテイル形は変化の結果の継続を表すのではなく、変化進行の継続を表すことになる。

(47) 新校舎が建っていた。

(48) ゴキブリが死んでいた。

(49) 「高炉はいつ建ちますの」「突貫工事に入っているから、今年の暮には建つでしょう」(華麗なる一族)

(50) 「ほとんどに死んで了うまでには実は気がつかないで少しずつ死んでいるわけなんだね」(宗方姉妹)

(工藤 2014: 208)

「習得」に関する動詞グループ「修める、習得する、マスターする」では第 2.2.2 節の例 (18) ~ (20) で示したように、「五年」「すぐ」「十代の頃」という時間帯と時点を表す 2 タイプの共起成分がある。例 (18) ~ (20) では変化の過程が示されている。

(18) 医師になって五年が過ぎ、内科治療の基礎と胃腸透視・上部消化管内視鏡検査、腹部超音波検査をどうにか習得した。

(『ひとを治療するということ』, 高森道雄)

(19) すぐにスタイルだけはマスターした。

(『タン・ナピ・ナピ』, 平島幹)

(20) 十代の頃にピアノ、ヴォイス、音楽理論、ダンスを修めた。

従って、「習得」に関する動詞グループ「修める、習得する、マスターする」は変化始発の局面・変化の局面・変化完成の局面という 3 つの局面を持つ。進展プロセスの様子を表す副詞と共起すれば、変化動詞のテイル形は変化の結果の継続を表すのではなく、変化進行の継続を表す。これらの変化動詞の変化の局面は図 2-3 のように示される。

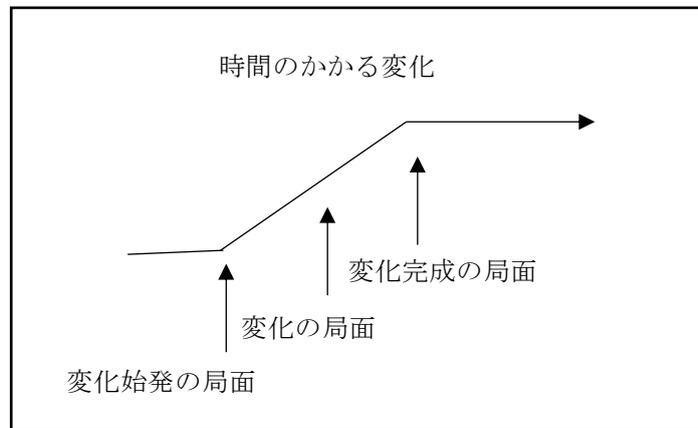


図 2-3 「習得」に関する変化動詞の変化の局面

## 2.6 まとめ

本稿での分析を通して、「習得」に関する動詞のアスペクト的特徴を次のようにまとめる。「習得」に関する動詞グループはスル形・テイル形で完成性・継続性を表す。実例を通して、第 2.1 節の (1) で立てた動作動詞と変化動詞についての仮説は成立している。つまり、「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」は動作動詞であり、「修める、習得する、マスターする」が変化動詞である。

限界性に関して、「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の場合に開始限界と終了限界が捉えられ、「修める、習得する、マスターする」の場合に終了限界、言い換えれば変化達成限界が捉えられる。

継続性の場合に、「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」というグループは、開始限界・終了限界があるにもかかわらず、継続性は動作継続を表す。一方、「修める、習得する、マスターする」というグループで、運動には変化が見られるので、変化達成限界で運動を2部分に分けている。動詞の継続性は、基本的に変化継続を表す。

また、「習得」に関する動詞グループの意志性について、「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」というグループは主体動作動詞と同じ状況である。「修める、習得する、マスターする」というグループ、主体変化主体動作動詞の状況と同じである。

さらに、「修める、習得する、マスターする」というグループは変化動詞であり、変化プロセスのある変化とみなされる。その場合に、変化始発の局面・変化の局面・変化完成の局面という3つの局面はあり、進展プロセスの様子を表す副詞と共起しし、テイル形が変化進行の継続を表す。

### 第三章 「習得」に関する動詞の語彙概念構造と項構造について

第二章の結果として、「習得」に関する動詞はアスペクトの観点からみれば、2タイプに分けられる。その中で、Vendlerの4分類によって、「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」のグループは活動動詞に対応し、「修める、習得する、マスターする」のグループは達成動詞に対応する。そこで、「習得」に関する動詞のLCSと項構造が、活動動詞と達成動詞のLCSと項構造にそのまま当てはまるのかどうか検討する必要がある。従って、本章では活動と達成の2つの場合に分けて「習得」に関する動詞のLCSと項構造を分析する。

#### 3.1 活動 (activity) の場合

活動動詞には自動詞と他動詞両方が含まれる。影山 (1996) によれば、詳しくは、非能格自動詞 (walk, quarrel, talk など) と接触・打撃動詞 (touch, hit, kick など) の場合がみられる。そして、それぞれのLCSは、[x ACT] と [x ACT ON - y] で表示される。

##### 3.1.1 活動動詞のLCS

まず、「習得」に関する動詞「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」のグループでは、ほとんどが他動詞であるが、自動詞の場合も見られる。例えば、「勉強する」には「物事にはげむこと。努力すること。」(『大辞林』, 2006) という意味があり、この意味では目的語をつけることができないので、非能格自動詞とみなされる。具体的な状況は次の例文で示される。例 (1) (2) は「勉強する」の自動詞の場合であり、活動動詞のLCSは [x ACT] で示される。

- (1) 民間のシンクタンクの方がよほど勉強している。

(『国会会議録』)

(2) 高校生らしき受験生たちが、懸命に勉強している。

(『いやでもわかる経済摩擦』, 実著者不明)

しかし、「習得」に関する動詞「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」は通常、他動詞として使われる。活動動詞の他動詞の LCS は [x ACT ON - y] で表示される。その LCS の中で ACT は継続活動を表し、ON が前置詞であり、活動の対象 (Patient) を提示する。影山 (1996) では継続的活動を表す他動詞の LCS は ON という前置詞句で表されると記述されている。つまり、ON は無標の状態では実際の接触を表すのに対して、有標の状態では未だ接触していないことを表すことになる。

影山 (1996) では活動動詞の具体的な動詞タイプの想定において、「習得」に関する活動動詞との違いが出てくる。ON という概念は、直接的な接触を意味する動詞を指しているが、「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」のような「習得」に関する動詞では、目的語への接触は見られない。動詞の行為の目的語への影響を説明するために、次の例文を挙げる。

(3) 地域的な相違を比較することが、同時に歴史的な、時間的な相違を学習することにつながるという、民俗学的歴史の特性を生かした歴史学習を提示しているのである。

(『社会科歴史教科書成立史』, 梅野正信)

(4) 十年前だったら、皆が、「ああ、日本はおもしろい国だ、すぐ勉強したい」と言いましたが、いまでは自分の将来の仕事をきちんと考えて、日本とビジネスをする仕事をするならもちろん日本語を勉強する。

(『日本語の開国』, 国際交流基金日本語国際センター編)

(5) 10 歳のころから池坊の花道を習う。

(『和樂』, 石塚晶子)

(6) 日本舞踊家元の長男として幼少より踊りの基礎を学ぶ。

(『あの人が選んだ東京手みやげ』, 実著者不明)

(7) 研修員受入事業は、開発途上諸国の中堅技術者、行政官、研究者ほかを当該国政府または国際機関の要請に基づき、日本に受入れて、我が国の進んだ技術を研修する機会を与える技術協力の最も基本的な形態である。

(『わが外交の近況』, 外務省編)

例 (3) ~ (7) では動詞「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の目的語は「歴史的な、時間的な相違」「日本語」「池坊の花道」「踊りの基礎」「技術」である。これらの目的語はすべて実在物ではないので、影山 (1996) で示した接触・打撃動詞と対応しない。しかし、「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」は心理的、精神的な行為を表す動詞として、目的語への影響は接触・打撃ではないが、精神的な作用での働きかけは確かにある。従って、この目的語への精神的な作用は、ON という概念で表すことが可能である。そこで、例 (3) ~ (7) での他動詞の LCS は [x ACT ON - y] で示される。

### 3.1.2 活動動詞の項構造

以上の「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」という動詞グループは他動詞の場合には、動詞は二項動詞である。すなわち動詞の必須項 (obligatory argument) の数について LCS での x、y が表す主語と目的語という二項を指す。例 (3) ~ (7) では必須項の二項の 1 つを省略する必要があるので、以下では項を省略していない例文で項構造を分析する。

(8) 乳児は言葉を学習する能力をもっているのである。

x (動作主) y (対象)

(『生命の奇跡』, 柳澤桂子)

(9) 法的規制は販売員が商品知識を勉強する意欲を妨げるといふ、製パン業組

x (動作主) y (対象)

合幹部の奇妙な言い訳である。

(『悪魔の鍋』, ハンス・ウルリッヒ・グリム)

- (10) 高齢者福祉部会は高齢者福祉に直結する介護保険や医療制度といった高齢者が不安に思うことの解決方法などを、障害児者福祉部会は障がいのあ

x (動作主)

る人が不安に思うことの解決方法などを研修しています。

y (対象) (『浜北区版広報はままつ』)

- (11) 母が子どもの頃は、ピアノを習うなんてほんとうに限られた家庭の子だけ

x (動作主)

y (対象)

でしたから、そんな自分の夢を私に託したのでしょう。

(『おかあさんの夢づくりノー』, 中山庸子)

- (12) アメリカの二十八代大統領だったウッドロー・ウィルソンは、八歳までア

x (動作主)

ルファベットを学ぶことができず、十一歳まで読むことができなかつたと

y (対象)

いう。

(『ディスレクシアの素顔』, 玉永公子)

例 (8) ~ (12) が示しているように、動詞「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の必須項である「乳児は」「販売員が」「障害児者福祉部会は」「母が」「ウッドロー・ウィルソンは」は「動作主」(agent) の意味役割を表し、「言葉を」「商品知識を」「解決方法などを」「ピアノを」「アルファベットを」は「対象」(theme) の意味役割を表している。そして、前の例 (2) が示したように、「勉強する」の自動詞の場合は主語の「動作主」だけがある一項動詞である。

(2) 高校生らしき受験生たちが、懸命に勉強している。

x (動作主) (『いやでもわかる経済摩擦』, 実著者不明)

従って、「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」という動詞グループの項構造は次のようにまとめられる。

(13) 「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の項構造：

[x, y] ⇒ [動作主, 対象] (「勉強する」の自動詞: [動作主])

## 3.2 達成 (accomplishment) の場合

影山 (1996) によれば、達成動詞の LCS は [x / [EVENT x ACT (ON-y)] CONTROL [BECOME [y BE AT z]]] で表記される。達成動詞の LCS では、x が外項の主語を表し、y が内項の目的語を表す。「習得」に関する達成動詞グループの「修める、習得する、マスターする」を LCS でどのように表記するのかについて、本節で達成動詞の LCS の左側の部分から詳しく検討する。

### 3.2.1 達成動詞の LCS

まず、達成動詞の LCS の [x / [EVENT x ACT (ON-y)] CONTROL [BECOME [y BE AT z]]] で使役の意味を表す概念 CONTROL の前の部分、つまり x / [EVENT x ACT (ON-y)] から分析する。達成動詞は状態変化使役を表す。具体的に言えば、主語の何らかの行為によって、目的語の状態変化ないし位置変化が引き起こされることを意味する。従って、x / [EVENT x ACT (ON-y)] の部分は状態変化を引き起こす起因と見なすことができる。そして、「習得」に関する達成動詞を達成動詞の LCS の鋳型に当てはまると、この部分を x で表すのか、それとも [EVENT x ACT (ON-y)] で表すのかが一番目の問題となる。これは主語が状態変化を引き起こしたのか、主語の行為が状態変化を引き起こしたのかという問題であり、第二章の図 2-2 (Page 10) を振り返ってみれば解決できる。第二

章の図 2-2 での変化動詞「修める、習得する、マスターする」は本節での達成動詞とほぼ同じ動詞グループを指している。変化動詞の継続性は、「変化達成限界」を区切りとして、前方は「動作継続」を示し、後方は「変化継続」を示している。この「動作継続」があるからこそ、「修める、習得する、マスターする」という動詞グループでは主語の行為によって状態変化が引き起こされたことがわかる。

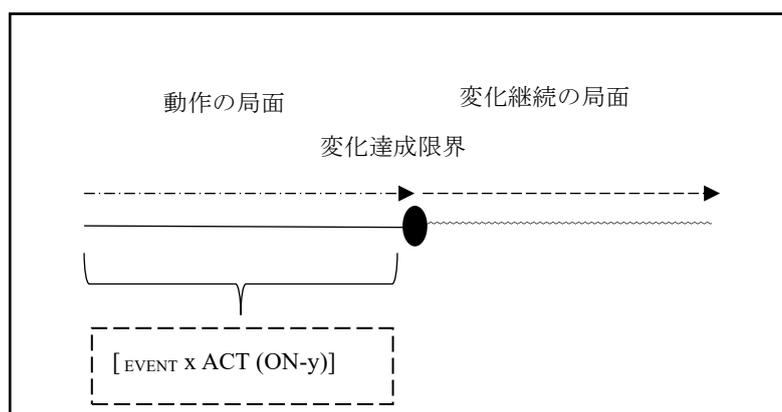


図 3-1 「習得」に関する達成動詞の継続的活動を表す部分

次に、達成動詞の LCS の  $[x / [EVENT X ACT (ON-y)] CONTROL [BECOME [y BE AT z]]]$  で使役の意味を表す概念 CONTROL の後の部分  $[BECOME [y BE AT z]]$  について分析する。この部分で  $[y BE AT z]$  はある状態を示し、BECOME は変化を意味している。しかし、「修める、習得する、マスターする」という動詞グループの場合において、 $[BECOME [y BE AT z]]$  という表記が正しいかどうかは二番目の問題である。

第二章の例 (35) ~ (37) を通して、「修める、習得する、マスターする」という動詞グループは、主体変化主体動作動詞の状況と似ていることがわかった。従って、このタイプの達成動詞の LCS では、状態変化を表す部分の主語は、継続活動を表す部分の主語と一致して動詞全体の主語となる。つまり、「修める、習得する、マスターする」の LCS は達成動詞の LCS の鋳型に適合せず、 $[BECOME [y BE AT z]]$  の表記ではなく、 $[BECOME [x BE AT z]]$  と表記すべきである。

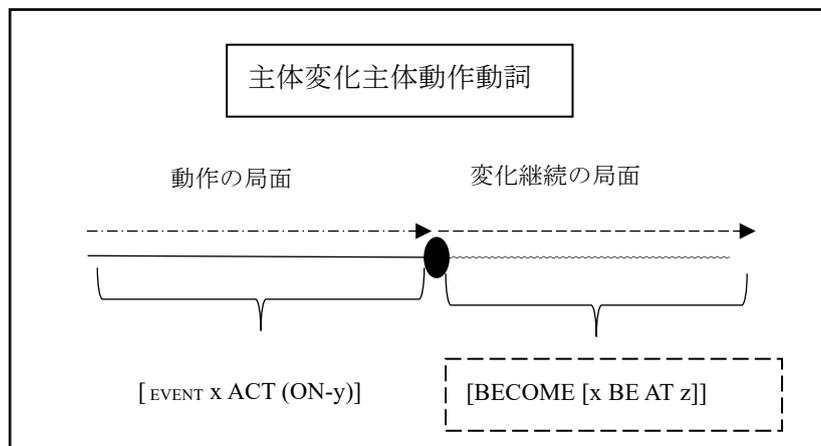


図 3-2 「習得」に関する達成動詞の状態変化を表す部分

最後に、以上の 2 つの部分をつなぐ「使役」という概念について検討する。影山 (1996) によれば、達成動詞での「使役」は CONTROL という表記で使われる。例えば、X CONTROL Y という関係では、CONTROL は Y の成立を直接的に左右するという程度の意味であるが、必ずしも Y の成立を含意するわけではない。

そして、影山 (1996) では「使役」が CONTROL という概念で表すのか、それとも CAUSE という概念で表すのかについて詳しく議論されている。その結果として、CONTROL の概念は CAUSE より広く、Y の成立が含意される場合には「結果焦点」と呼ばれ (CAUSE で表せば、「結果焦点」だけになる)、Y の成立が含意されていない場合には「行為焦点」と呼ばれる。例えば、Pinker (1989)、池上 (1981, 1988) の例文で「結果焦点」と「行為焦点」について示されている。例 (14) のように、英語の二重目的語構文なら、動詞 grow, throw などは「結果焦点」であるが、動詞 bake, make などは「行為焦点」である。例 (15a) の turn on は「結果焦点」の役割に作用するので、(15a) は非文になる。例 (15b) の日本語の「電気をつける」は「結果焦点」「行為焦点」のどちらでも良いので、CONTROL の概念に適合している。

(14) a. Sue threw Bob a ball. ← Sue threw a ball to Bob. (結果焦点)

b. Sue baked Bob a cake. ← Sue baked a cake for Bob. (行為焦点)

(15) a. \*John turned on the light, but the light didn't come on. (結果焦点)

b. 電気をつけたけれど、つかなかった。(結果焦点/行為焦点)

影山 (1996: 85)

「習得」に関する動詞の場合について見ると、「修める、習得する、マスターする」の例文は以下のようなになる。

(16) a. 十代の頃にピアノ、ヴォイス、音楽理論、ダンスを修めた。(結果焦点)

(『ECM の真実』, 稲岡邦彌)

b. \*ダンスを修めたけど、修められなかった。

(17) a. そして核兵器製造にも用いられる遠心分離機を使ったウラン濃縮技術を

習得した。(結果焦点)

(『高知新聞』, 高知新聞社)

b. \*ウラン濃縮技術を習得したけれど、習得できなかった。

(18) a. 彼は「オヌシ、モ、ワルジャノウー」という日本語をはじめ各種昔のひ

との会話を完璧にマスターした。(結果焦点)

(『超貧乏旅』, 田中良成)

b. \*昔の人の会話をマスターしたけれど、マスターできなかった。

動詞の「修める、習得する、マスターする」が状態変化の成立を含意するかどうかについて明らかにするために、以上の例 (16a)、(17a)、(18a) から例(16b)、(17b)、(18b) を作った。例 (16b)、(17b)、(18b) は状態変化の成立を含意しない前提で作った例文で、全部非文になるので、「修める、習得する、マスターする」は状態変化の成立を含意することを示している。従って、「修める、習得する、マスターする」は状態変化の結果に焦点を置き、LCS の表記は CONTROL でも CAUSE でも使える。

「習得」に関する達成動詞の「修める、習得する、マスターする」を LCS で表記する場合に、以上の要素を組み合わせれば (19) のようになる。

(19) 「修める、習得する、マスターする」の LCS :

[ [EVENT X ACT (ON-y)] CONTROL / CAUSE [BECOME [x BE AT z]]]

### 3.2.2 達成動詞の項構造

「習得」に関する達成動詞の「修める、習得する、マスターする」は他動詞である。必須項は x, y が表す主語と目的語という 2 つの項なので、二項動詞である。LCS と項構造のリンキングは具体的には (20) のように示される。

(20) 「修める、習得する、マスターする」の LCS と項構造のリンキング :

[ [EVENT X ACT (ON-y)] CONTROL / CAUSE [BECOME [x BE AT z]]]

↓
↓
↓

外項 (動作主)    内項 (対象)                      外項 (動作主)

また、次の例文で「修める、習得する、マスターする」の項構造を分析する。

(21) 観覚は比叡山や南都で仏学を修めた人だった。  
           x (動作主)                      y (対象)                      探訪日本の古寺』, 足立巻一)

(22) 実施者は生殖医学に関する高度の知識・技術を習得した医師で、細心の注  
           x (動作主)                                              y (対象)  
           意のもとに総ての操作・処置を行う。

(『日本で不妊治療を受けるということ』, まさのあつこ)

(23) 夏目がグルー語をマスターしたのは地元に着した彼の生活にどうして  
           x (動作主)    y (対象)

も必要であったからで、決して仕事に生かそうと思った訳ではない。

(『恋をしよう』, 谷崎泉)

以上の例 (21) ~ (23) では、「観覚は」「実施者は」「夏目が」という項が「動作主」の意味役割を表している。また、「仏学を」「知識・技術を」「グルー語を」は「対象」の意味役割を表している。「修める、習得する、マスターする」の項構造 (24) のように表記できる。

(24) 「修める、習得する、マスターする」の項構造:

[x, y] ⇒ [動作主, 対象]

### 3.3 まとめ

本章の LCS と項構造の分析を通して、「習得」に関する動詞について、以下の 2 点の性質を明らかにした。

1 つ目は、活動動詞の場合に、通常の接触・打撃動詞のように、目的語に直接的な接触があるわけではない。「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」は目的語への影響、あるいは抽象的な作用が見られる。つまり、直接的な接触だけではなく、活動動詞では抽象的な働きかけも可能である。

もう 1 つは、達成動詞の場合に、動作で状態変化を引き起こす状況が必ず成立するかどうかという問題である。例文の分析によって、「修める、習得する、マスターする」は必ず状態変化を引き起こすことがわかった。それゆえに、LCS の表記において、CONTROL はもちろん、CAUSE でも使役の概念が表せる。

## 第四章 「習得」に関する動詞のクオリア構造について

先行研究では動詞のクオリア構造について、小野 (2005) と影山 (2005) という 2 つのクオリア構造があり、両方ともに独自の特徴を持っている。本章ではこの 2 つのクオリア構造に分けて分析する。また、「習得」に関する動詞も前章に基づいて、活動動詞の「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」と達成動詞の「修める、習得する、マスターする」に分けて、各動詞グループの状況におけるクオリア構造を検討する。

### 4.1 動詞クオリア構造の小野 (2005) 式

小野 (2005) は動詞のクオリア構造について、以下のように規定している。本節では、「習得」に関する動詞を活動動詞と達成動詞に分けて、以下のように 3 つの側面（構成クオリア・形式クオリア・主体クオリア）から分析する。

#### (1) 動詞のクオリア構造：

構成クオリア＝部分・全体関係

形式クオリア＝包摂関係と結果

目的クオリア＝（特に記載なし）

主体クオリア＝原因

小野 (2005)

#### 4.1.1 「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の場合

構成クオリア

小野 (2005) の構成クオリアは、時間的な部分・全体関係を示している。つまり、drive と ride、snore と sleep の動詞のペアのように、開始時から終了時まで同時に進行する

か、あるいは1つの事象がもう1つの事象が表す時間の一部であるかという関係を指している。従って、「研究する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の構成クオリアを分析するために、それぞれが表す事象と時間的な部分・全体関係を持つ事象によって表示する。

- (2) 明治八年から三か年、ハーバード大学で法律を学び、あと二年間はニューヨークの法律事務所で実務を研修した。

(『アメリカ素描』, 司馬遼太郎)

- (3) かたわら演劇センターで演技を学び、卒業後はオールド・ヴィック座で演出を学んだ。

(『現代ヨーロッパ映画の監督たち』, 田山力哉)

- (4) ハリー、ロン、ハーマイオニーは三人とも、他の寮生と離れて、夜遅くまで勉強した。

(『ハリー・ポッターと賢者の石』, J・K・ローリング(著)・松岡佑子(訳))

- (5) そのための段階的な指導を、前半のレッスンで簡単な設定を通し「問題解決のステップ」によって学習する。

(『子どもの規範意識を育てる』, 河村真理子)

- (6) 福島は週二回、五年間ぐらい原田からドラムを習った。

(『東京 Jazz』, 高木信哉)

以上の例文は前章でも使ったが、ここで実例を用いて、「研究する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の事象と時間的な部分・全体関係を持つ事象を分析する。例 (2) ~ (6) における「研究する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の事象は (7) の右側の動詞と部分・全体関係を持っている。

- (7) 例 (2) ~ (6) での動詞とは時間的な部分・全体関係を持つ動詞：

研修する： 練習する

学ぶ： 演出する

勉強する： 考える

学習する： 考える

習う： 練習する

具体的に言えば、「法律事務所で実務を研修した」、「ドラムを習った」の「研修する」「習う」という事象は「練習する」という事象と同時に進行する可能性があるので、「練習する」と部分・全体関係を持っている。また、「夜遅くまで勉強した」、「レッスンで簡単な設定を通し「問題解決のステップ」によって学習する」では「勉強する」「学習する」は進行する間に、「考える」という事象が伴うので、「考える」と部分・全体関係を持っている。最後に、「卒業後はオールド・ヴィック座で演出を学んだ」での「学ぶ」の具体的な内容の事象、つまり「演出」が関わるので、この例文での「学ぶ」は「演出する」という事象と部分・全体関係を持つことになる。

従って、小野(2005)の観点によって、例(2)～(6)での「研究する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の構成クオリアは以下のようなになる。

(8) 明治八年から三か年、ハーバード大学で法律を学び、あと二年間はニューヨークの法律事務所で実務を研修した。

・研修する

クオリア構造＝構成クオリア＝練習する (e, x, y)

(9) かたわら演劇センターで演技を学び、卒業後はオールド・ヴィック座で演出を学んだ。

・学ぶ

クオリア構造＝構成クオリア＝演出する (e, x, y)

(10) ハリー、ロン、ハーマイオニーは三人とも、他の寮生と離れて、夜遅くま

で勉強した。

- ・勉強する

クオリア構造＝構成クオリア＝考える (e, x, y)

(11) そのための段階的な指導を，前半のレッスンで簡単な設定を通し「問題解決のステップ」によって学習する。

- ・学習する

クオリア構造＝構成クオリア＝考える (e, x, y)

(12) 福島は週二回、五年間ぐらい原田からドラムを習った。

- ・習う

クオリア構造＝構成クオリア＝練習する (e, x, y)

#### 形式クオリア

小野 (2005) では動詞の形式クオリアは、様態・動作の包摂関係あるいは結果を示すという 2 つの場合がある。しかし、結果事象は状態変化の結果か、移動による位置変化結果の場合に限られる。本節の「研究する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」は活動を表す動詞なので、様態・動作の包摂関係で形式クオリアを示す。

小野 (2005: 30) の分析によれば、様態・動作の包摂関係は  $To V_1 \text{ is to } V_2 \text{ in some particular manner.}$  という公式で表示できる。つまり、当該動詞の上位のカテゴリーの動詞が形式クオリアになる。「独学する、自習する、予習する、兼学する」などの動詞は、「研究する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」と様態・動作に基づいて、系列的な関係が成立する。しかし、「独学する、自習する、予習する、兼学する」などの動詞は、「研究する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の下位のカテゴリーの動詞に属するので、形式クオリアになれない。従って、ここでの形式クオリアは空欄になる。

#### 主体クオリア

最後に、小野 (2005) では動詞の主体クオリアは、結果を示す形式クオリアに対して、原因によって示される。しかし、小野 (2005) での動詞の主体クオリアは、break や open などのような使役動詞だけに適用できるので、活動動詞への適用については述べていない。従って、活動動詞の主体クオリアも空欄になる。

以上の分析をまとめると、「研究する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」のクオリア構造は、小野 (2005) では、構成クオリアだけが明確である。

(13)<sup>16</sup>・学ぶ、勉強する、学習する

クオリア構造＝構成クオリア＝考える (e, x, y)

・研究する、習う

クオリア構造＝構成クオリア＝練習する (e, x, y)

#### 4.1.2 「修める、習得する、マスターする」の場合

構成クオリア

前節で示したように、小野 (2005) の構成クオリアは、時間的な部分・全体関係を示している。つまり、drive と ride、snore と sleep の動詞のペアのように、開始時から終了時まで同時に進行するか、あるいは 1 つの事象がもう 1 つの事象が表す時間の一部であるかという関係を指している。これに基づいて、次の例文で「修める、習得する、マスターする」の構成クオリアを分析する。

(14) 医師になって五年が過ぎ、内科治療の基礎と胃腸透視・上部消化管内視鏡検査、腹部超音波検査をどうにか習得した。

(『ひとを治療するということ』, 高森道雄)

(15) パリでカストリアディスは、1946 年から 3 年間ソルボンヌ大学のルネ・ポ

---

<sup>16</sup> (13) で示した構成クオリアは唯一の可能性ではない。例えば、(8) の「学ぶ：演出する」のように、動詞の「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の内容は具体的な動作を表すときに、その動作で構成クオリアを示すことができる。

ワリエ教授の下で哲学の国家博士号の課程を修める。

(『環境保全と自治社会の形成』, 里上讓衛)

(16) しかしそういうミュージシャンも先ほど説明したような呼吸法や姿勢についてもちろんとマスターしている。

(『サックス入門ゼミ』, 河原塚ユウジ)

次に、(17) では以上の例文で「修める、習得する、マスターする」が表す事象と時間的な部分・全体関係を持つ事象を分析する。従って、例 (14) ~ (16) の「修める、習得する、マスターする」の事象は (17) の右側の動詞と部分・全体関係を持っている。

(17) 例 (14) ~ (16) での動詞とは時間的な部分・全体関係を持つ動詞：

習得する       : 覚える  
修める         : 履修する  
マスターする : 覚える

具体的に言えば、「内科治療の基礎と胃腸透視・上部消化管内視鏡検査、腹部超音波検査をどうにか習得した」、「呼吸法や姿勢についてももちろんとマスターしている」での「習得する」「マスターする」という事象は「覚える」という事象と同時に進行する可能性があるので、「覚える」と部分・全体関係を持つ。また、「哲学の国家博士号の課程を修める」での「修める」は、「履修する」という事象と同時に進行するので、この2つの事象は部分・全体関係と見なされる。

以上、小野(2005)の観点によって、例 (14) ~ (16) における「修める、習得する、マスターする」の構成クオリアは次のように表示できる。

(18) 医師になって五年が過ぎ、内科治療の基礎と胃腸透視・上部消化管内視鏡検査、腹部超音波検査をどうにか習得した。

- ・習得する

クオリア構造＝構成クオリア＝覚える (e, x, y)

(19) パリでカストリアディスは、1946年から3年間ソルボンヌ大学のルネ・ポワリエ教授の下で哲学の国家博士号の課程を修める。

- ・修める

クオリア構造＝構成クオリア＝履修する (e, x, y)

(20) しかしそういうミュージシャンも先ほど説明したような呼吸法や姿勢についてもちゃんとマスターしている。

- ・マスターする

クオリア構造＝構成クオリア＝覚える (e, x, y)

#### 形式クオリア

小野 (2005) では動詞の形式クオリアは、様態・動作の包摂関係あるいは結果を示すという2つの場合がある。本節の対象語の「修める、習得する、マスターする」は状態変化を表す達成動詞であるので、結果事象で形式クオリアを表示することになる。また、小野 (2005) によれば、使役動詞は起因事象と結果事象という2つの事象からなる複合事象の構成であるので、LCSを用いて形式クオリアを示す。

第三章ではLCSについての分析で「修める、習得する、マスターする」のLCSは次のように表した。

(21) 「修める、習得する、マスターする」のLCS :

[[EVENT X ACT (ON-y)] CAUSE [BECOME [x BE AT z]]]

結果事象を表す部分は [EVENT BECOME [x BE AT z]] であるので、「修める、習得する、マスターする」の形式クオリアもこれで表せる。

(22) 「修める、習得する、マスターする」

クオリア構造=形式クオリア=[<sub>EVENT</sub> BECOME [x BE AT z]]

主体クオリア

小野 (2005) において、結果事象を示す形式クオリアに対して、動詞の主体クオリアは起因事象で示される。例えば、小野 (2005) で **break** や **open** などのような使役動詞は LCS で主体クオリアを示す。「修める、習得する、マスターする」の LCS を上の (21) のように確認したうえで、主体クオリアは (23) のように表すことができる。

(23) 「修める、習得する、マスターする」

クオリア構造=主体クオリア=[<sub>EVENT</sub> X ACT (ON-y)]

以上の分析をまとめると、「修める、習得する、マスターする」のクオリア構造は以下のように表示できる。

(24) ・習得する、マスターする

クオリア構造=構成クオリア=覚える (e, x, y)

形式クオリア=[<sub>EVENT</sub> BECOME [x BE AT z]]

主体クオリア=[<sub>EVENT</sub> X ACT (ON-y)]

・修める

クオリア構造=構成クオリア=履修する (e, x, y)

形式クオリア=[<sub>EVENT</sub> BECOME [x BE AT z]]

主体クオリア=[<sub>EVENT</sub> X ACT (ON-y)]

## 4.2 動詞クオリア構造の影山 (2005) 式

影山 (2005) において動詞のクオリア構造は (25) のようにまとめることができる。

(25) 動詞のクオリア構造 :

構成クオリア=語彙概念構造 (LCS)

形式クオリア=activity・state・process・transition の区別

目的クオリア=含意する目的・目標・機能

主体クオリア=その表現が成立するための前提やフレーム

影山 (2005)

しかし、形式クオリアの事象タイプは、本節では影山 (2005) とは異なる事象タイプで表す。先行研究で述べたように、Pustejovsky (1998) は事象タイプについて STATE (状態)、PROCESS (過程)、TRANSITION (変化) という 3 つのタイプを設定した。史 (2013) によれば、Pustejovsky (1998) の事象タイプは Vendler (1967) の動詞分類と以下のように対応する。

| (26) Pustejovsky (1998) の事象タイプ | Vendler (1967) の動詞分類                       |
|--------------------------------|--------------------------------------------|
| STATE (状態)                     | ➡ STATE (状態)                               |
| PROCESS (過程)                   | ➡ ACTIVITY (活動)                            |
| TRANSITION (変化)                | ➡ [ ACHIEVMENT (到達)<br>ACCOMPLISHMENT (達成) |

史 (2013: 14)

史 (2013) の観点によって、本研究の対象語となる活動動詞の「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」と達成動詞の「修める、習得する、マスターする」はそれぞれ PROCESS (過程)、TRANSITION (変化) に対応し、それによって形式クオリアも表示できる。

また、(25) のように、目的クオリアは「含意する目的・目標・機能」、主体クオリアは「その表現が成立するための前提やフレーム」として設定しているが、具体的な動

詞における判断の基準が明確ではない。そこで、次に活動動詞と達成動詞の場合にわけて検討する。

#### 4.2.1 「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」

構成クオリア・形式クオリア

活動動詞の「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の構成クオリアと形式クオリアは確定しているので、以下のように示すことができる。

(27) 「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」:

クオリア構造＝構成クオリア＝[EVENT X ACT (ON y)]

形式クオリア＝PROCESS (過程)

目的クオリア

影山 (2005) によれば、目的クオリアは「含意する目的・目標・機能」で表示される。しかし、活動動詞は継続的な動作を表すので、目的などの意味を含意しない。活動動詞の目的クオリアは空欄になる。

主体クオリア

主体クオリアは「その表現が成立するための前提やフレーム」であるが、活動動詞の場合には成立するための前提がないので、主体クオリアも空欄になる。

#### 4.2.2 「修める、習得する、マスターする」

構成クオリア・形式クオリア

達成動詞の「修める、習得する、マスターする」の構成クオリアと形式クオリアは以下のように示すことができる。

(28) 「修める、習得する、マスターする」

クオリア構造=構成クオリア=[ [EVENT X ACT (ON-y)] CAUSE [BECOME [x BE  
AT z]]]

形式クオリア=TRANSITION (変化)

目的クオリア

目的クオリアは「含意する目的・目標・機能」で表示される。達成動詞の場合、目的も LCS で表せる。第三章で、達成動詞の LCS について、「結果焦点」と「行為焦点」という 2 つのタイプがあることを考察した。「結果焦点」は結果の成立を含意するのに対して、「行為焦点」は結果の成立を含意しない。つまり、「結果焦点」は目的と結果が一致する。しかし、「行為焦点」の場合には目的だけがあり、結果が成立するかどうかはわからない。

第三章の結論によって、達成動詞の「修める、習得する、マスターする」の場合は「結果焦点」であるので、目的と結果が一致する。前節の小野 (2005) 式の形式クオリアを参考にすると、以下のようになる。

(29) 「修める、習得する、マスターする」

クオリア構造=目的クオリア=[EVENT BECOME [x BE AT z]]

主体クオリア

主体クオリアは「その表現が成立するための前提やフレーム」であり、これは小野 (2005) 式の主体クオリアと同様であると見なせる。「修める、習得する、マスターする」の主体クオリアを小野 (2005) 式表記と同じように示す。

(30) 「修める、習得する、マスターする」

クオリア構造=主体クオリア=[EVENT X ACT (ON-y)]

従って、「修める、習得する、マスターする」のクオリア構造は次のようにまとめられる。

(31) 「修める、習得する、マスターする」

クオリア構造=構成クオリア=[ [EVENT X ACT (ON-y)] CAUSE [BECOME [x BE AT z]]]

形式クオリア=TRANSITION (変化)

目的クオリア=[EVENT BECOME [x BE AT z]]

主体クオリア=[EVENT X ACT (ON-y)]

#### 4.3 まとめ

本節で影山 (2005) 式の動詞クオリア構造の内容を主として、小野 (2005) 式の構成クオリアで補充しながら、活動動詞の「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」と達成動詞の「修める、習得する、マスターする」に分けて整理する。

(32) 「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」

・ 学ぶ、勉強する、学習する

クオリア構造=構成クオリア=考える (e, x, y) / [EVENT X ACT (ON y)]

形式クオリア=PROCESS (過程)

目的クオリア=空欄

主体クオリア=空欄

・ 研究する、習う

クオリア構造=構成クオリア=練習する (e, x, y) / [EVENT X ACT (ON y)]

形式クオリア=PROCESS (過程)

目的クオリア=空欄

主体クオリア=空欄

(33) 「修める、習得する、マスターする」

・習得する、マスターする

クオリア構造=構成クオリア=覚える (e, x, y) /

[[EVENT X ACT (ON-y)] CAUSE [BECOME [x BE AT z]]]

形式クオリア=[EVENT BECOME [x BE AT z]] / TRANSITION (変化)

目的クオリア=[EVENT BECOME [x BE AT z]]

主体クオリア=[EVENT X ACT (ON-y)]

・修める

クオリア構造=構成クオリア=履修する (e, x, y) /

[[EVENT X ACT (ON-y)] CAUSE [BECOME [x BE AT z]]]

形式クオリア=[EVENT BECOME [x BE AT z]] / TRANSITION (変化)

目的クオリア=[EVENT BECOME [x BE AT z]]

主体クオリア=[EVENT X ACT (ON-y)]

以上のクオリア構造を通して、次の観点が得られる。

まず、活動動詞には目的クオリアと主体クオリアはない。目的クオリアと主体クオリアが示す「目的」「原因」は活動動詞にはない要素なので、検討する必要がない。

また、影山 (2005) 式のクオリア構造は、活動動詞や達成動詞のように、動詞の分類による分析を行うことができるが、個々の具体的な動詞の分析には不十分である。

最後に、小野 (2005) 式の構成クオリアは、時間的な部分・全体関係で表す点が、動詞の意味分析に対する新しい視点と見なすことができる。

## 第五章 「習得」に関する複合動詞の日中対照

先行研究で示したように、中国語の結果複合動詞は複合動詞の大多数を占めている。結果複合動詞は常に「動作＋補語」の構造であり、使役状態変化を表す。それは、「習得」に関する達成動詞の「修める、習得する、マスターする」の使役状態変化と一致している。具体的には、中国語の「習得」の意味を表す結果複合動詞“学会”“学到”が本章の対象となる。また、それと対応するものとして、日本語の複合動詞「学びとる」がある。本章の結果複合動詞の分析において着目する点として、動詞の項構造及び意味役割を明確にして、それによって主語と目的語の制約を考察し、「使役」の機能も明らかにする。

### 5.1 結果複合動詞の項構造と意味役割

本節では複合動詞の“学会”、“学到”を対象として、中国語の“一会”、“一到”の結果複合動詞のV2の意味を把握するために、Li and Thompson (1981)、望月・申 (2011)を参照する。先行研究によれば、中国語の“会”、“到”は「できる」「着く」を意味している。この“会”、“到”は複合動詞のV2となると、“学会”は「学ぶ」＋「できる」の意味を表し、“学到”は「学ぶ」＋「完成する」の意味の組み合わせとなる。

#### 5.1.1 複合動詞のV1・V2の意味関係について

中国語の場合に複合動詞のV1・V2の品詞で分ければ、“学会”の“学”と“会”は「他動詞＋他動詞」であるが、“学到”は「他動詞＋非対格自動詞」と見なせる。申 (2009)の結果複合動詞の分類によれば、“学会”は“推开”型に従い、“学到”が“下輸”型に従う。“学会”、“学到”の実例は次の例(1)(2)となる。

(1) 他 在 学校 里 学会 三国 语言, ……

彼 いる 学校 中 習得する 三ヶ国 言語

彼は学校で三ヶ国の言語を習得した

(《不必要的胜利》, 契诃夫)

(2) 我们 从 歌者 那里 学到 了 唱歌 的 技术, ……

私達 -から 歌手 そこ 学びとる LE 歌い の 技

私達は歌手から歌いの技を学びとった

(《生命之书 365 日的静心冥想》, 克里希那穆提)

先行研究では、沈 (2013) の主張によって中国語の結果複合動詞は統語的複合動詞であると認められ、V1・V2 の意味関係はある程度「補文関係」と同じ意味関係を持つ。

それを検討する前に、まず、影山 (1993) の観点に基づいて、V1・V2 の時間的關係に着目して分析する。影山 (1993) では「補文関係」の時間的關係は明確にされていない。しかし、2つの時間的關係として、V1・V2 の出来事が同時に行われる「並列関係」、及び V1 が V2 に先行する「原因—結果関係」では、後者の方は結果複合動詞に対応すると考えられる。複合動詞の主要部の位置づけという観点からは、日本語の「補文関係」の複合動詞はほぼ「右側主要部の関係」と同様に主要部の位置が右側となる。影山 (1993) によれば、日本語の複合動詞と違い、中国語の複合動詞の場合には、左側主要部が主体となる。つまり V1 が主要部となる。本研究の対象の“学会”、“学到”はともに V1 の“学”が主要部となる。主要部の位置は異なっているが、V1・V2 の時間的關係は一致している。なぜなら、複合動詞の内部には時間的關係の「前」と「後」を明示する形態はないので、発話の直線性から V1 が V2 に先行する関係を認知することしかできないからである。従って、中国語の“学会”、“学到”は、日本語の「原因—結果関係」と同じく、V1 が V2 に先行するが、複合動詞としての主要部は日本語と異なり、左側主要部と見なされる。

(3) 日本語の「右側主要部の関係」(3a) と「補文関係」(3b)

a.  $\theta$  同定 : V1 (Ag <Th>) V2 (Ag <Th>)

b. 補文関係 : V1 ( <Th> ) V2 ( <Ev> )

影山 (1993: 113)

日本語の「右側主要部の関係」と「補文関係」という関係は (3) で示すように、同じく右側が主要部であるが、「補文関係」では V1・V2 の内項が同定せず、V1 の事象全体が V2 に内項として埋め込まれている。

中国語の結果複合動詞は、左側主要部の特徴から、(3b) の右側主要部の状況と違うのは明らかである。次に (4) で中国語の「補文関係」の V1・V2 の関係を示す。中国語の「補文関係」を持つ複合動詞では、V1・V2 の主体 (Ag) があるか否かに関わらず、V2 の表す事象全体 (Ev) が主要部の V1 の内項となる。

(4) 中国語の「補文関係」

V1 ( (Ag) <Ev> ) V2 ( (Ag) <Th> )

しかし、本研究の結果複合動詞の“学会”、“学到”は、(4) の関係に当てはめると、“一会”、“一到”の事象は“学”の内項となる。その場合、“学会”、“学到”の意味は不適切になるので、以上の「補文関係」に当てはまらず、むしろ (3a) の  $\theta$  同定が当てはまる。

また、“学会”、“学到”は結果複合動詞の時間的關係からみれば、V1・V2 が「原因—結果関係」であるので、影山 (1993: 116) の例 (72b) の LCS ([LCS1] CAUSE [LCS2]) に対応する。“学会”、“学到”の V1・V2 の関係は CAUSE という関数で連結される。

### 5.1.2 複合動詞の項構造の受け継ぎ

結果複合動詞の“学会”、“学到”の V1・V2 の意味関係を明らかにしたうえで、本節では V1・V2 の項構造及び複合動詞全体の項構造との受け継ぎの関係、及び  $\theta$  同定を分析する。

中国語の“学会”の V1・V2 はともに他動詞であり、主語と目的語を持っている。また、前述したように、中国語の複合動詞は左側が主要部なので、本動詞の項構造が左側の V1 に受け継がれる。“学会”の  $\theta$  同定というのは、V1・V2 の主語と目的語が両方ともに同定されることである。“学会”の項の受け継ぎは図 5-1 で示される。

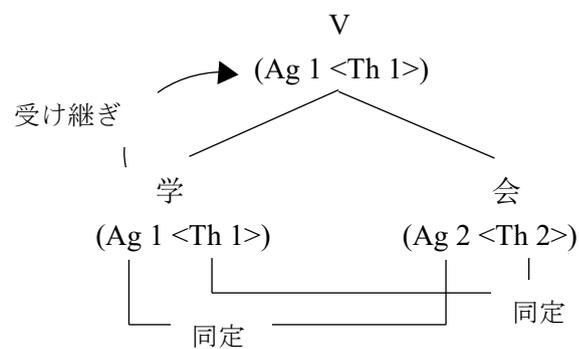


図 5-1 “学会”：主要部からの受け継ぎのみ

中国語の“学到”は「他動詞+非対格自動詞」の組み合わせなので、V1 が主語と目的語を持つが、V2 は主語だけを持つ。“学到”の場合も“学会”と同じく、「左側主要部」に従い、V1 の“学”の項を受け継ぐ。“学到”の  $\theta$  同定は、V2 の“到”の唯一の主語が“学”の目的語と同定されることである。

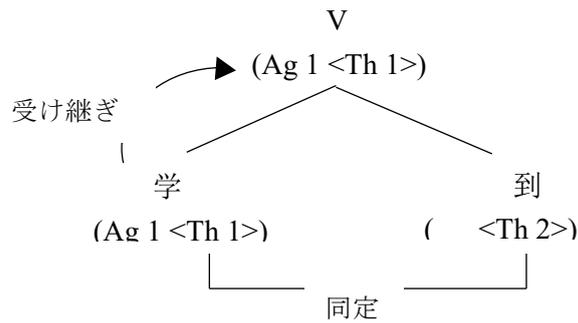


図 5-2 “学到”：主要部からの受け継ぎのみ

以上の“学会”、“学到”の項構造をまとめる。(5)ではLi(1990)の複合動詞の項構造の表記法に従って表記する。その表記の意味は、V1の項構造を<1, 2>、V2の項構造を<1', 2'>で示す。矢印の後は、V1・V2の項構造の組み合わせであり、θ同定の概念も含まれている。

(5) “学会”、“学到”の項構造

学会：[<1, 2> + <1', 2'> ⇒ <1- 1', 2-2'>]

学到：[<1, 2> + <1', > ⇒ <1, 2-1'>]

5.1.3 複合動詞の意味役割の受け継ぎ

“学会”、“学到”の項構造は上述したように示されるが、同じ主語であっても、主体(Agent)と「経験者」(Experiencer)の場合もあるので、意味役割を考える必要がある。

まず、“学会”の主語はV1とV2においては同一の主語である。“学会”のV1の“学”は主語が主体で、目的語が対象(Theme)で表される。しかし、“学会”のV2の“会”は状態を表す他動詞なので、主語が「経験者」と理解される。“学会”は左側主要部があるので、本動詞がV1の項構造を受け継ぐ。つまり、“学会”は複合動詞として“学”と同じように、主語が「主体」、目的語が「対象」となる。

また、“学到”は「他動詞+非対格自動詞」の複合構造である。“学到”のV1の“学”

は主語が主体で、目的語が対象で表される。V2の“到”の意味は「着く」で、非対格動詞の主語は「対象」と見なされる。“学到”も左側主要部なので、V1の主語と目的語を受け継いで、「主体」と「対象」を表す。

(6) “学会”、“学到”の意味役割

- a. “学” + “会” ⇒ “学会”  
(主体, 対象) + (経験者, 対象) ⇒ (主体, 対象)
- b. “学” + “到” ⇒ “学到”  
(主体, 対象) + (対象, ) ⇒ (主体, 対象)

5.1.4 “学会”、“学到”に対応する日本語の場合

中国語の“学会”、“学到”は日本語の複合動詞と対応させると、「学びとる」という複合動詞になる。「学びとる」は“学会”、“学到”とほぼ同じ意味であり、「他動詞+他動詞」の組み合わせである。「学びとる」の実例を(7)で挙げる。

- (7) 他人や物・環境と対応していく基礎的なありかたや、価値観・規範等を学びとる。

(『子どもと文化』, 古田足日)

「学びとる」を意味関係からみると、由本(2005)の「手段」という意味関係と一致する。つまり、V1がV2に先行し、V1がV2の意図性を持つ「手段」となる。由本(2005)によれば、この種類をLCSで表せば、V1・V2の関係は[[LCS2] BY [LCS1]]となる。しかし、日本語の複合動詞は、中国語と異なって右側主要部であるので、「学びとる」の主要部はV2の「とる」となる。「学びとる」のV1・V2は他動詞なので、それぞれの主語と目的語が互いに同定されている。また、右側主要部の関係で、「学びとる」の項はV2の「とる」の項を受け継ぐ。

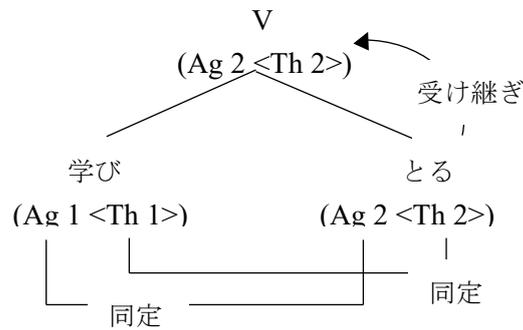


図 5-3 「学びとる」：主要部からの受け継ぎのみ

図 5-3 で示した「学びとる」の  $\theta$  同定と項構造を踏まえて、「学びとる」の項構造と意味役割を (8) のように表記する。「学びとる」の  $V1 \cdot V2$  は他動詞であり、それぞれの項は同様に「主体」と「対象」を表す。

(8) 「学びとる」の項構造と意味役割の受け継ぎ

「学びとる」の項構造： $[<1, 2> + <1', 2'\rangle \Rightarrow <1- 1', 2-2'\rangle]$

「学びとる」の意味役割：「学び」 + 「とる」  $\Rightarrow$  「学びとる」  
 (主体, 対象) + (主体, 対象)  $\Rightarrow$  (主体, 対象)

## 5.2 結果構文の主語と目的語の制約について

複合動詞の制約はすでに日本語や英語においては先行研究によって検討されてきたが、中国語の複合動詞に適用するか否かも検討する必要がある。本節で「他動性調和の原則」と「直接目的制約」で複合動詞の主語と目的語への制約を明らかにする。

### 5.2.1 “学会”、“学到”の「他動性調和の原則」

先行研究ですでに述べられているが、「他動性調和の原則」は、外項を持つ動詞同士

と、外項を持たない動詞同士は複合できるという原則である。また、それ以外の複合は許されないという主語に関する制約でもある。「他動性調和の原則」によれば、V-V 複合動詞は最大限 5 種類の組み合わせが可能である。

前節の項構造によって、“学会”、“学到”の V1・V2 の外項と内項はすでに明らかになった。つまり、“学会”は「他動詞+他動詞」の組み合わせであり、“学到”は「他動詞+非対格自動詞」の組み合わせであるので、“学会”は「他動性調和の原則」に従うが、“学到”は従わないという結論が出る。

(9) “学会” : (x <y>)+(x <y>) (他動性調和 ○)

“学到” : (x <y>)+ <y> (他動性調和 ×)

中国語の複合動詞には、ほかにも「他動性調和」が適用しない例が見られる。例えば、沈 (2013) で、“小偷居然把警察追累了”(泥棒は意外にも、警察官に追われた結果、警察官を疲れさせた) (沈 2013: 388) の“追累 (追う+疲れる)”は、他動性調和に従わない例として挙げられる。“追累”は (9) の“学到”と同じ状況で、「他動詞+非対格自動詞」の組み合わせである。

沈 (2013) によるもう一つの観点は、中国語の結果複合動詞文における主語が必ず V1 の外項ではない点である。例えば、“这场饥荒饿死了不少人”(この大飢饉はたくさんの人を飢え死なせた) (沈 2013: 388) という文で、主語の“饥荒”は V1 “饿”と V2 “死”の項ではなく、外来項と見なされる。しかし、本章の“学会”、“学到”の項の場合、沈 (2013) のこの観点は成り立たないと考えられる。

以上の内容に基づいて、中国語の結果複合動詞は日本語と違い、「他動性調和の原則」に従う状況があるが、従わない可能性もある。それによって、“学会”は他動性調和に従うのに対して、“学到”は従わない。この現象をもたらす原因として、中国語の複合動詞の組み合わせはより複雑で、結果複合動詞の CAUSE CHAIN と関係づけられることが考えられる。

### 5.2.2 “学会”、“学到”の「直接目的語制約」

Levin & Rappaport Hovav (1995) によれば、英語の結果複合構文には「直接目的語制約」(DOR: Direct Object Restriction) が見られる。「直接目的語制約」というのは、「結果を表す状態動詞は、本動詞の直接目的語のみを叙述する」という制約である。例えば、(10) において、結果を表す状態の flat (平らな) は、pounded (砕いた) の直接目的語である metal (金属) を叙述している。

(10) The blacksmith pounded the metal flat.

Levin & Rappaport Hovav (1995: 50)

従って、「直接目的語制約」を複合動詞に適用すれば、「複合動詞の目的語は V2 の項になる」という形で働く。例 (11) は「張三は技術を学びとった」という意味で作った“学会”、“学到”の例文である。“学会”、“学到”では「直接目的語制約」の適用に関して、例 (11) で示すように、両方とも適用する。前節で既に示したように、“学会”の目的語は V1・V2 の目的語と一致し、“学到”の目的語が V2 の主語となる。従って、“学会”、“学到”は2つの状況があるが、どちらも V2 が本動詞の目的語を叙述する。

(11) a. 张三            学会            了            技术            (DOR : ○)

Zhangsan    study-grasp    -PERF<sup>17</sup>    technology

b. 张三            学到            了            技术            (DOR : ○)

Zhangsan    study-reach    -PERF    technology

(張三は技術を学びとった)

しかし、中国語の結果複合動詞では「直接目的語制約」に従わない場合も存在する。

<sup>17</sup> PERF は perfective aspect (完了のAspect) の省略である。

例えば、沈 (2013) で挙げた例として、“张三学烦了英语”（張三は英語を学んだ結果、張三は嫌になった）（沈 2013: 392）では、複合動詞の目的語“英语”は V2 と関係せず、V1 の目的語となる。従って、「直接目的語制約」に違反していると判断される。沈 (2013) によれば、“学烦”が「直接目的語制約」に違反するという現象の原因は、この結果複合動詞に CAUSE という関数が含まれていないということにある。結果複合動詞に CAUSE があれば、「直接目的語制約」が適用される。CAUSE がなければ、「直接目的語制約」に従わず、それへの違反となる。なぜなら、CAUSE あり、CAUSE なしの複合動詞の違いは、動詞の他動性にあるからである。CAUSE ありの複合動詞は他動性が高い、CAUSE なしの複合動詞は他動性が低いと考えられる。

### 5.2.3 中国語の複合動詞の処置構文化と受動文化について

複合動詞の他動性の高低は、処置構文（把構文）化と受動文（被構文）化で確認できる。つまり、他動性が高い複合動詞は処置構文と受動文に変換でき、他動性が低い複合動詞は変換できない。

前節の「直接目的語制約」についての結論は“学会”、“学到”には CAUSE があるということであった。また、中国語の“学会”“学到”に CAUSE があるか否か検証するために、例 (11) の処置構文化と受動文化への変換を例 (12) (13) で行った。

(12) a. 张三 把 技术 学会 了。 (処置構文)

Zhangsan DISP<sup>18</sup> technology study-grasp -PERF

b. ?张三 把 技术 学到 了。 (処置構文)

Zhangsan DISP technology study-reach -PERF

(13) a. 技术 被 张三 学会 了。 (受動文)

technology PASSIVE Zhangsan study-grasp -PERF

b. ? 技术 被 张三 学到 了。 (受動文)

<sup>18</sup> DISP は disposal (処置) を意味している。

technology PASSIVE Zhangsan study-reach -PERF

例 (12) (13) では“学会”の処置構文化と受動文化は成立するが、“学到”の処置構文化と受動文化の例文では多少違和感がある。従って、ほかの例文を挙げてみる。例 (14) ~ (17) では括弧の中が分析の対象となる。例文を通して、“学会”、“学到”は処置構文化と受動文化ともに可能である。しかし、例 (12) (13) で問題となった“学到”は、処置構文において、ほぼすべて“学到”の後ろに着点である“手”が付いている。“-到手”は「手に入れる」を意味している。従って、“学到”は“学会”のように他動性の高さを示さない。

(14) 你呢, [把 拼音 学会 了] 没有?

DISP Pinyin study-grasp -PERF

(あなたは? ピンインをマスターしましたか?)

(《到莫斯科去》, 胡也频)

(15) 总算 [把 技术 学到 了 手]。

DISP technic study-reach -PERF hand

(やっと技術を学んで、手に入れました。)

(《人民日报》)

(16) 凭什么凝聚着我们祖祖辈辈智慧和心血的技术,

在 [被 外国人 学会] 并抢先注册后, 就不再是我们的成果?

PASSIVE foreigner study-grasp

(なぜ、私たちの代々の知恵と苦勞が含まれた技術は、外国人に学びとられて、先に登録させた結果、私たちの成果にならなかったのか。)

(《人民日报》)

(17) 方法、理论甚至理念可以 [被 人 学到] …

PASSIVE person study-reach

(方法、理論及び考えは、人に学びとられる…)

(微博 (SNS))

以上の分析を通して、“学会”は他動詞同士の組み合わせであるので、他動性が高く、CAUSE があると認められる。それに対して、“学到”は他動詞と非対格自動詞の組み合わせであるので、他動性が低くなり、CAUSE がないとは言えないが、使役の意味は弱いと言える。

### 5.2.3 日本語「学びとる」との対応

本節で“学会”、“学到”に対応する日本語の「学びとる」が「他動性調和の原則」と「直接目的語制約」に従うかどうかを検討する。まず、「学びとる」も“学会”と同様に、「他動詞+他動詞」であり、「他動性調和の原則」に従うと判断できる。また、(18b)のように、「学びとる」の目的語は「とる」の目的語と一致するので、「直接目的語制約」にも従う。さらに、「直接目的語制約」に従うので、「学びとる」には CAUSE があることが明白である。

#### (18) a. 他動性調和の原則

「学びとる」:  $(x \langle y \rangle) + (x \langle y \rangle)$

#### b. 直接目的語制約

張三は規範を学びとった。 (DOR : ○)

### 5.3 CAUSE CHAIN についての比較

以上の分析によって、“学会”、“学到”、“学びとる”のどちらでも意味関係は「原因—結果」の関係であり、原因事象と結果事象を連結する CAUSE という使役の意味が含まれる。CAUSE の存在によって、複合動詞の他動性が判断できる。従って、CAUSE は複合動詞にとって重要な要素と考えられる。本節の分析で複合動詞における CAUSE のあり方を統語構造によって考察する。

### 5.3.1 “学会”、“学到”の CAUSE CHAIN について

沈 (2013) によれば、結果複合動詞の CAUSE について、顕在的と潜在的の相違がある。つまり、日本語は CAUSE という関数が顕在的に表示されるのに対して、中国語では CAUSE が潜在的に表示されるという相違があるという観点である。さらに、顕在的な CAUSE は語彙レベルにあり、複合動詞の V1・V2 を語彙レベルで複合させる。潜在的な CAUSE は統語的レベルにあり、複合動詞の V1・V2 を統語レベルで複合させる。本節で“学会”“学到”がこの観点に対応するかどうかについて、統語構造で検討する。

まず、例 (11a) での結果複合動詞の“学会”の統語構造から見てみよう。図 5-4 で示されるように、“张三”は“学会”の「主体」であるが、CAUSE の「主体」でもある。また、V2 の“会”は「対象」の“技术”を持つ。

しかし、図 5-4 の右側のように、複合動詞では“会”が CAUSE と連結して働いている。従って、“技术”は「CASUE-会」という述語の全体の「対象」になる。図 5-4 から見れば、“学会”の例文の統語構造において CAUSE は統語レベルにあると考えられる。

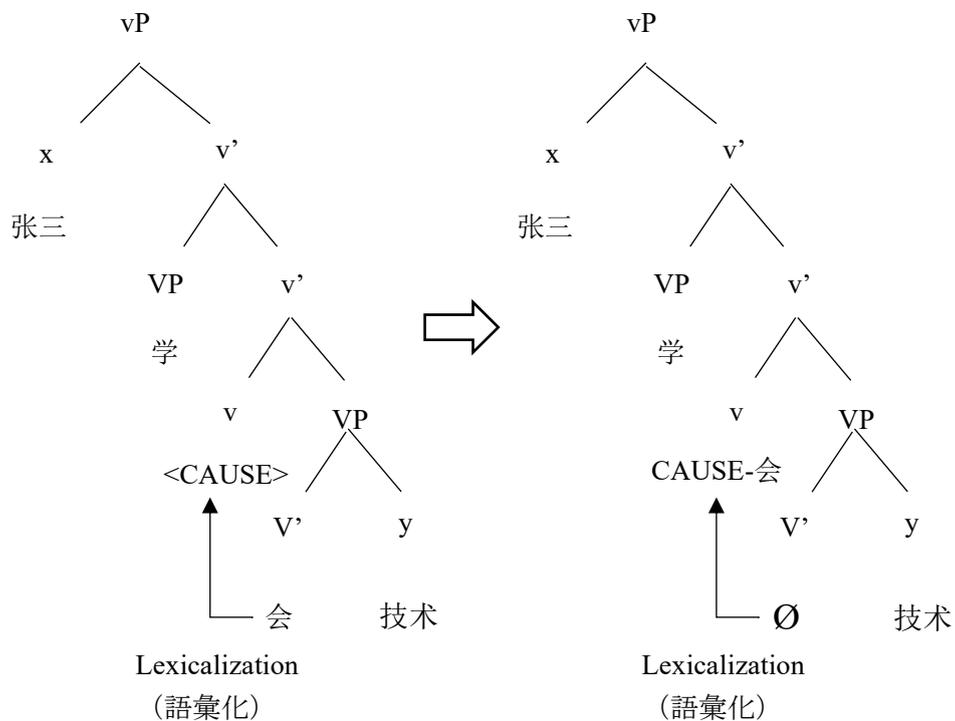


図 5-4 “学会” (CAUSE 潜在) の統語構造

次に、例 (11b) での結果複合動詞の“学到”の統語構造を見る。“学到”は“学会”と違い、V2 は非対格自動詞であるが、“学会”と同様に、“张三”は“学到”の「主体」であり、また、CAUSE の「主体」でもある。また、非対格自動詞 V2 の“到”は「対象」の“技术”を持つ。

しかし、図 5-5 の右側のように、複合動詞では“到”は CAUSE と連結している。従って、“技术”は「CASUE-到」という他動性を持つ述語の「対象」になる。図 5-5 から分かるように、“学到”は統語構造において、CAUSE が統語レベルにあると考えられる。

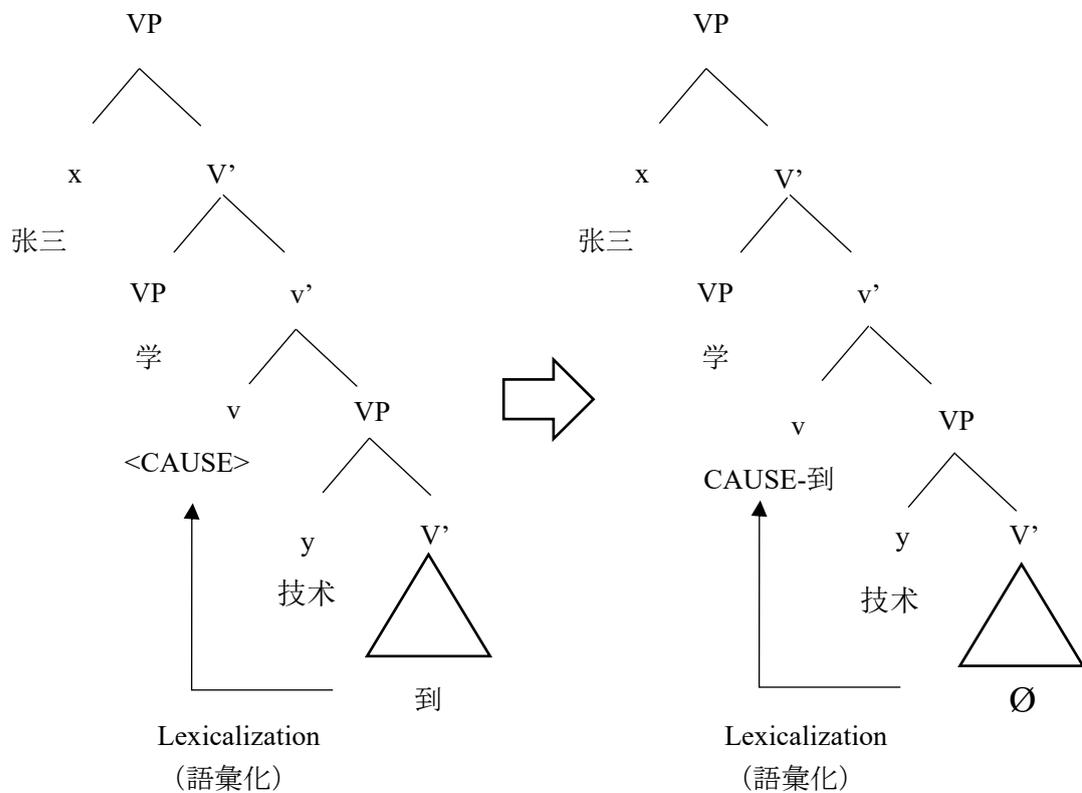


図 5-5 “学到” (CAUSE 潜在) の統語構造

### 5.3.2 日本語と中国語の場合の対照について

日本語の「学びとる」の場合も「原因—結果関係」の複合動詞であるので、CAUSEがあり、時間的に前後の順序の2つの事象を連結する。しかし、「学びとる」のCAUSEは統語構造には存在せず、図5-6のように「学び-とる」という語彙レベルにあると考えられる。従って、日本語の「学びとる」が語彙的複合動詞であることは、図5-6から結論できる。

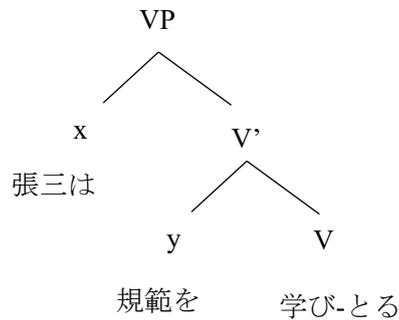


図 5-6 「学びとる」(CAUSE 顕在) の統語構造

以上の統語構造の分析によって、“学会”“学到”及び「学びとる」は沈 (2013) での観点に対応すると結論できる。つまり、中国語の“学会”“学到”は統語レベルで複合され、日本語の「学びとる」は語彙レベルで複合される。また、“学会”“学到”は確かに複合動詞として使われるが、V2 の“会”“到”は“学”の補語とも見なされる。従って、中国語の“学会”“学到”の V1・V2 の連結関係は日本語の「学びとる」のようには強くなく、CASUE が「潜在的」であることも理解しうる。

また、複合動詞ではないが、同じように CAUSE を持つ「習得する、マスターする、修める」のような達成動詞について、ここで“学会”“学到”「学びとる」とともに検討する。影山 (1996) 式の LCS によれば、「修める、習得する、マスターする」のような達成動詞は [x ACT (on y) CAUSE [BECOME [x BE AT z]]] で表される。その中で、CAUSE という概念によって、原因となる活動 [x ACT (on y)] と、結果となる状態変化 [BECOME [x BE AT z]] を連結させている。「習得する、マスターする、修める」の CAUSE は語彙レベルにあるので、顕在的な CAUSE と考えられる。従って、「習得する、マスターする、修める」は複合動詞ではないが、2 つの事象を持つところは複合動詞と似ている。

#### 5.4 まとめ

本章で扱った中国語の“学会”“学到”は結果複合動詞であり、実際に使用する場面では日本語の達成動詞の「修める、習得する、マスターする」と対応することが多い。“学会”“学到”の複合動詞としての性質・特徴などを検討した結果、“学会”“学到”は統語的複合動詞と考えられる。

第二章で考察した動詞アスペクトの内容で、「修める、習得する、マスターする」は主体変化主体動作動詞と判断された。つまり、達成動詞が含む2つの事象はすべて動詞の主体が行う。複合動詞と比べると、“学会”は主体変化主体動作動詞と近く、V1・V2が表す事象の主体が本動詞の主体となる。しかし、“学到”のV1・V2の主体は同定されないので、主体動作客体変化動詞の構造と似ていると言えるかもしれない。結果複合動詞の事象の主体と、達成動詞の変化・動作の主体との関連性は、今後の課題として検討していきたい。

## 第六章 「習得」に関する動詞と思考動詞の関連性

先行研究でも述べられているように、「習得」に関する動詞には心理的な要素が含まれるので、本章で心理動詞の思考動詞を中心にして、両方の比較分析を行う。まず、先行研究では明確ではなかった思考動詞の限界性を明らかにして、「習得」に関する動詞の場合と比較する。また、「思う」を主とする思考動詞の主観性に基づいて、「習得」に関する動詞の場合を分析する。最後に、この2つの動詞グループの意味的な関連性をまとめ、「習得」に関する動詞グループの位置づけを定める。

### 6.1 思考動詞の限界性について

本節の思考動詞は他動詞の「思う、考える、分かる、覚える、知る」を対象とする。そして、工藤 (2014) の動詞分類によって、限界性を検討する。次に、工藤 (2014) の動詞分類を再度挙げる。

#### (1) 工藤 (2014) の動詞分類

##### ① 主体動作客体変化動詞 (開ける、着せる、建てる)

開始限界 (主体動作起動) 必然的終了限界 (客体の変化達成)

●~~~~~●.....

##### ② 主体変化動詞 (開く、腐る、建つ)

必然的終了限界 (変化達成)

~~~~~●.....

③ 主体動作動詞 (揺する、飲む、歩く)

開始限界（主体動作起動）



工藤 (2014: 204)

そこで、動詞の「思う、考える、分かる、覚える、知る」を動作・変化の視線で分ける。その中で、「思う、考える」は変化がないので、主体動作動詞に相当する。また、「分かる、覚える、知る」は変化があるので、主体変化動詞に相当する。(1) の内容に従えば、「思う、考える」は開始限界のみを持ち、「分かる、覚える、知る」は終了限界のみを持っている。以下の例文で「思う、考える、分かる、覚える、知る」を時間的な副詞成分との共起で分析する。

例 (2) ~ (5) で「思う」「考える」のスル形とテイル形によって動詞の限界性及び、変化の有無を検討する。以上で見たように、「思う」「考える」は主体動作動詞に相当するので、開始限界だけを持っている。例 (2) (4) のスル形の場合には、「口からこぼれ出した瞬間」は時点を表し、「二十歳の頃」は時間帯であるが、その中でのある時点に注目が置かれる。両方とも、「思う」「考える」の開始限界を提示している。また、例 (3) (5) で「思う」「考える」はテイル形の場合には、「そのとき」という時点と、「つぶやきながら」という時間帯と共起している。例 (3) はある時点での動作を表し、例 (5) はその時間帯で進んでいる動作を表す。2 例のどちらも変化は見られない。

(2) 「あの、午後八時十分のことですけど」口からこぼれ出した瞬間、「ああ、もう引き返せないんだー」と思った。

(『札幌殺人事件』, 内田康夫)

(3) 私はそのとき、「話すこと・聞くこと」の本質を見たように思った。

(『よみがえれ！テレビ脳っ子・ゲームっ子』, 安藤修平)

(4) 自分の生き方を共感を持って理解してくれるような子供がいたらいいと、二十歳の頃は考えた。

(『二度目の結婚物語』, 青木裕子)

- (5) 日本人学生の武君は、さっきからしきりに「和語、漢語、外来語」とつぶやきながら例を考えている。

(『国語1』, 宮地裕)

以下の例 (6) ~ (11) では「わかる、覚える、知る」という3つの思考動詞のスル形とテイル形を挙げる。以上の分析では、この3つの動詞は主体変化動詞に相当する。

まず、例 (6) (8) (10) では「午後になって」「すぐに」「数日のうちに」はすべて「わかる」「覚える」「知る」の変化達成時点と見なされる。つまり、工藤 (2014) によれば、これらの副詞的表現はこの3つの動詞にとって、必然的終了限界を表す。

また、例 (7) (9) (11) では、「すでに」「その時」「結婚当初から」も変化達成時点を表す。「わかる」「覚える」「知る」の継続性を表す場合にも、必然的終了限界がある。

- (6) 午後になってやっと、漏水の原因とその場所がわかった。

(『人質カノン』, 宮部みゆき)

- (7) サンニヌ台の炉跡から見つかった炭化物は、1500年ほど前のものとすでにわかっている。

(『「海底遺跡」超古代文明の謎』, 倉橋日出夫)

- (8) 彼女はすぐにその使い方を覚えた。

(『オードリー』, アレグザンダー・ウォーカー)

- (9) 今でも、私は私の気持ちをふっきらせた胡社長のその時の言葉を覚えている。

(『地図を持たない旅人』, 蕭乾)

- (10) しかしその鈴子が店の中で辛い立場にいることを、私は通い続けた数日のうちに知った。

(『吉川英治文学新人賞篇』, 連城三紀彦)

- (11) アフロージュの姉、サイナージオが結婚当初から具合が悪いことは、村の

誰もが知っている。

(『ムスリムの女たちのインド』, 柴原三貴子)

従って、思考動詞の「思う、考える、分かる、覚える、知る」は限界性によって、主体変化動詞と主体動作動詞に分けられる。さらに、「習得」に関する動詞は、動作動詞と変化動詞の2つの場合がある。第二章の結果によって、この4つタイプの動詞の限界性を次の内容で表して比較する。結果として、(12a) と (12c) はともに動作動詞であるが、終了限界の有無によって異なっている。また、(12b) と (12d) は変化動詞であり、限界性も同様に変化達成限界だけを持っている。

(12) 限界性についての比較：

a. 「思う、考える」

開始限界 (主体動作起動)

●~~~~~

b. 「わかる、覚える、知る」

必然的終了限界 (変化達成)

~~~~~●.....

c. 「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」

開始限界

終了限界

●~~~~~●

d. 「修める、習得する、マスターする」

終了限界

~~~~~●.....

6.2 「習得」に関する動詞の主観性について

「習得」に関する動詞が心理動詞の思考動詞と同じように、主観性を持っているか

どうかについて、以下の例 (13) ~ (15) で分析する。まず、「習得」に関する動詞は思考動詞と違い、思考の内容を表す補文を持っていない。そのかわりに、「～こと」という形で、習得する内容を表すことが見られる。以下の例文では「学ぶ」「勉強する」「習う」の例を挙げる。

- (13) ブローデルは、自分が観察するものをすべて自分の滋養とすることを学んだ。

(『ブローデル伝』, ピエール・デックス)

- (14) 不思議な植物やきのこの育て方、どんな用途に使われるかなどを勉強した。

(『ハリー・ポッターと賢者の石』, J・K・ローリング)

- (15) 古い牛の骨を削って、小さな馬やバッファローを作ることをこの二人から習った。

(『魂の指導者クロウ・ドッグ』, リチャード・アードス)

Hooper (1975) は “learn” を「叙実・断定」動詞と判断した。その中で、「叙実」は、その内容が「真」であるかどうかということを目指す。例 (13) ~ (15) で下に曲線を引いた内容はすべて「真」と考えられる。従って、これらの場合で動詞の叙実性は成立する。

先行研究では、「思う」のような思考動詞の主観性について、①蓋然性表示、②主観表示、③意志表示、④想起内容表示という 4 つの場合が設定されたが、そのいずれも「習得」に関する動詞とは関係がない。「習得」に関する動詞には主観性を持たないことは明確である。

6.3 思考動詞との関係

本節では動詞のアスペクトと主観性について、「習得」に関する動詞を心理動詞の思考動詞との異同について分析したうえでまとめる。まず、思考動詞を含む心理動詞は

状態動詞として扱われることが多い。しかし、思考動詞は実際には状態動詞ではない。前述した内容と吉永 (2008) によれば、思考動詞は状態動詞と違い、意志性と持続性を持っている。また、限界性について、「思う、考える」は主体動作動詞に相当し、開始限界を持っているが、「わかる、覚える、知る」は主体変化動詞に相当し、必然的終了限界を持っている。また、(12) の内容に従って、思考動詞の限界性は、「習得」に関する動詞との相違はあるが、両方とも限界性を持っている。従って、動詞のアスペクトから見れば、思考動詞は状態動詞ではない。

「習得」に関する動詞は、思考動詞と同じように心理的要素を持っている。この心理的要素に影響を及ぼすものは、動詞の主観性と考えられる。思考動詞は、例えば、「思う」を見ると、①蓋然性表示、②主観表示、③意志表示、④想起内容表示というような主観性を持っている。しかし、「習得」に関する動詞は主観性を持たないことが明らかである。従って、「習得」に関する動詞は、同じく思考認識的動き・変化を表すが、主観性については思考動詞とは異なっている。

本章で思考動詞との関連性を分析する目的は、「習得」に関する動詞のグループが動詞全体で持つ位置を見つけることである。例えば、「activity (活動) → walk (歩く) → amble (ゆっくり歩く), stride (大またに歩く)」のように、動詞の間の上位・下位関係を見つけることである。

結論として、図 6-1 で「習得」に関する動詞と思考動詞との共通性を示すが、この2つの動詞グループには上位・下位関係がない。「習得」に関する動詞と思考動詞は、同様に「思考認識的な動き・変化」という意味を持ち、意味的に重なる点がある。

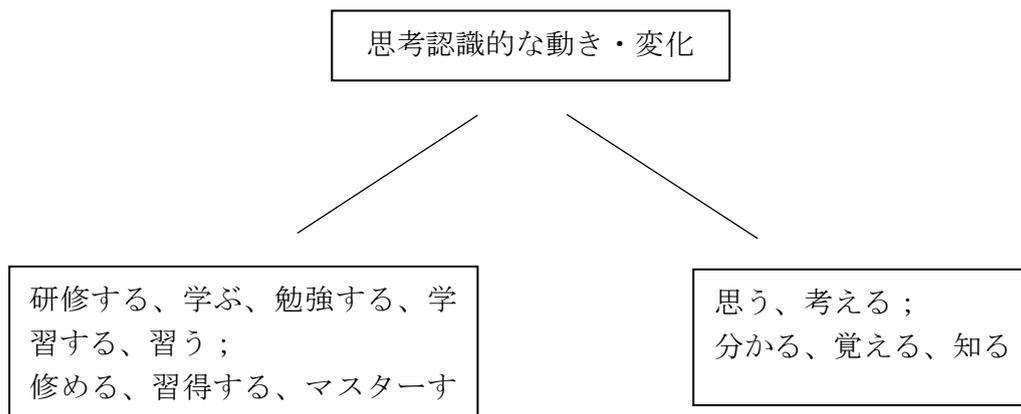


図 6-1 「習得」に関する動詞は思考動詞との共通性

結 論

本研究では本論の内容を通して、類義語動詞の語彙的意味の分析を行った。本論の分析の結論として、「習得」に関する動詞グループの語彙的意味をまとめる。さらに、類義語の動詞グループを分析する場合に考察すべき側面を提案する。そこで、本章ではこの2つの方面から本研究の結論を詳しく述べる。

7.1 「習得」に関する動詞の語彙的意味

本研究において、「習得」に関する動詞として中心的に扱う動詞グループは「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う、修める、習得する、マスターする」である。本論の分析は主に、動詞が表す動作・変化という観点及び、活動動詞・達成動詞の動詞内部の構造という観点からなる。

7.1.1 動詞が表す動作・変化という観点

「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う、修める、習得する、マスターする」という動詞グループは、動作・変化の観点から、動作動詞の「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」と変化動詞の「修める、習得する、マスターする」に分けられる。この動作・変化の区別について詳しく検討することによって、変化動詞の「修める、習得する、マスターする」にも動作が存在することがわかった。

動作動詞の「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」の場合の意志性、限界性についてまとめる。動作動詞の「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」は、目的語を持つ他動詞であるが、主体の動作だけを述べ、主体の意志性を示す。

また、動作動詞は、開始限界があるが、必然的終了限界は持っていない。しかし、「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」は終了限界を持つ場合が見られ、開始と終了限界が共にある時間帯と共起する場合も見られる。

変化動詞の「修める、習得する、マスターする」においては、主体の変化に注目が置かれるが、意志性を表す主体の動作も表す。変化動詞の「修める、習得する、マスターする」を分解すると、主体の動作が先行して、動作の終了限界は主体変化の達成時でもあり、その後が変化の維持になるという動作と変化の2つの部分からなる。変化動詞の「修める、習得する、マスターする」が持続性を表すときには、通常は変化達成時以降の変化結果の維持を表す。しかし、動作の様態などに注目する副詞成分と共起すれば、持続形が変化達成時以前の主体の動作の持続を表すことは、「修める、習得する、マスターする」が動作と変化を共に持つことを証明している。

7.1.2 活動動詞・達成動詞の内部構造

「習得」に関する動詞は Vendler (1967) の4分類によれば、活動動詞と達成動詞に対応する。つまり、前節での動作動詞の「研修する、学ぶ、勉強する、学習する、習う」は活動動詞であり、変化動詞の「修める、習得する、マスターする」は達成動詞である。この分類によって、活動動詞のLCSは [x ACT (ON-y)] で示されるが、達成動詞のLCSは [[x ACT ON-y] CAUSE [BECOME [x BE AT z]]] で示される。LCSの構造からみれば、活動動詞は達成動詞に含まれる。これも前節での「修める、習得する、マスターする」に動作と変化がともにある観点と一致する。

達成動詞の内部構造については、LCSの [[x ACT ON-y] CAUSE [BECOME [x BE AT z]]] において [x ACT ON-y] が表す活動と、[BECOME [x BE AT z]] が表す状態変化を連結する関数の CAUSE が重要な要素である。本論の分析によって、CAUSEの前にある成分は「原因」となり、CAUSEの後にある成分は「結果」となる。つまり、「修める、習得する、マスターする」にある動作と変化の2つの部分は、「原因—結果」の関係を持っている。また、「修める、習得する、マスターする」には意志性があるので、

「結果」である部分は「目的」でもある。従って、「修める、習得する、マスターする」に含まれる活動は意志性を持ちながら動作を行い、「目的」に向かって「結果」を引き起こす。

また、達成動詞の場合は複合動詞とも関連する。なぜなら、複合動詞にある前項動詞と後項動詞の意味関係は、「修める、習得する、マスターする」にある「原因—結果」の関係と類似しているからである。第六章の結論によって、日本語の場合には、達成動詞は語彙的複合動詞と同じように、CAUSEは語彙的レベルにある。しかし、中国語の場合には、結果複合動詞は統語的複合動詞なので、CAUSEは統語的レベルにある。

7.2 類義語動詞の語彙的意味の分析

類義語動詞の語彙的意味の分析として、本研究は動詞の語彙的アスペクト、LCS、動詞の項構造・意味役割、及びクオリア構造などの側面から考察を行った。本節では、その各側面の具体的な着目点をまとめる。

動詞の語彙的意味において、動詞のアスペクトは重要な動詞の性質であり、動詞のLCSや項構造などを検討する以前に明らかにしなければならないものである。動詞のアスペクトは、動詞の様態と時間の関係を示す。従って、アスペクト的性質である限界性、持続性、意志性が検討の対象となる。それらの性質を通して、当該動詞が持続する動作であるのか、状態変化であるのかなどの動詞の分類が明らかになる。

動詞の分類によって、動詞の意味概念を記述する動詞のLCSは明確になる。LCSでの関数によって、動詞の意味を抽象化した形で把握でき、特に動詞グループとしての意味的特徴を捉えることができる。さらに、動詞の項構造も動詞の性質に影響する。例えば、ある文の中で同じ主語であっても、動詞の違いによって主語が表す意味役割は、「動作主」と「経験者」で違いが出る。従って、項構造も動詞の意味を反映する。

さらに、本研究では動詞の意味を全体的に把握するために、クオリア構造という構造を利用した。クオリア構造は構成クオリア、形式クオリア、目的クオリア、主体クオリアという4つ性質からなる。しかし、クオリア構造を動詞に応用する場合、クオ

リア構造の内容はまだ統一されていない。そこで、本研究では動詞のクオリア構造についての先行研究を検討したうえで、「習得」に関する動詞のクオリア構造を提案した。クオリア構造は動詞の LCS、事象構造、項構造などの内容を含めて、動詞の語彙的意味の特徴を全面的に把握する。

本研究で動詞の意味的な特徴を明らかにしたが、動詞の「内部」だけでは不十分であるので、動詞の「外部」との関連性を見つける必要がある。まず、対照言語学の観点から、日本語をほかの言語と対照しながら、互いに異なるところによって、日本語では現れない現象を検討する。本研究では日本語・中国語を対照した結果、日本語の「習得」に関する動詞は、中国語の場合に結果複合動詞と対応することが分かった。従って、日本語では扱わなかった複合動詞の問題にも着目した。

また、「習得」に関する動詞グループのすべての動詞における位置づけを通して、このグループをほかの動詞グループと関連づけた。本研究の「習得」に関する動詞の場合では、心理動詞の思考動詞を挙げて、この2つの動詞グループには「思考認識的な動き及び変化」があるという共通性を示した。

7.3 本研究の意義

本研究では類義語動詞のグループの語彙的意味の分析方法を探った。すなわち、具体的な動詞グループにおいて構成論的アプローチで分析して、多様な側面から動詞の特徴を把握するのは本研究の意義となる。

序論で提示した語彙意味論の研究分野のアプローチである語彙アスペクト、複合動詞、LCS、項構造、クオリア構造などの問題は本研究の本論で検討された。具体的に言えば、語彙的アスペクトで動詞の各様態の表す意味を分析する。そして、LCS で動詞の概念的意味を分解し、項構造で動詞と関係づける文の要素を考察し、クオリア構造で LCS と項構造などの構造を使い、動詞の「原因—結果」などの性質を明らかにした。また、本研究で結果複合動詞は同じ「目的に達成する」の意味を持つ単純語との関係を考察した。本研究で使ったアプローチはすべての類義語動詞グループに適用で

きるとは言えないが、本研究の分析方法が類義語動詞グループの語彙的意味分析に応用できる。

7.4 今後の課題

本研究において「習得」に関する動詞に関して動詞グループとしての意味的な特徴を分析し、語彙的意味を明らかにした。しかし、本研究では扱っていない問題もあるので、今後の課題として改善すべき点を挙げる。

まず、クオリア構造は前述したように、先行研究で統一されていなかった。そこで、本研究は2つの動詞のクオリア構造の提案を利用した。今後、動詞のクオリア構造について、「習得」に関する動詞に対して、より明確なクオリア構造をまとめて、改めて提案する。

また、本研究では日中対照言語の観点から、中国語の結果複合動詞“学会”“学到”との対照を行った。しかし、中国語で「習得」に関する動詞に対応するのは、この2つの複合動詞だけではなく、例えば“习得”“掌握”なども見られる。中国語で対応する動詞の範囲を拡大して分析することも今後の改善点である。

さらに、本研究で日本語と中国語との対照を行ったが、英語でも“learn”“study”のような対応する動詞がある。英語の場合の分析も対照研究に入れて、本研究の内容を充実させていきたい。

本研究において、不足点はほかにもあると思われるが、以上の内容を加え、今後の研究課題としたい。

参考文献（日）

- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学：言語と文化のタイポロジーへの試論』，東京：大修館書店。
- 于一楽 (2015) 「中国語結果複合動詞の意味構造と項の具現化」，由本陽子・小野尚之（編），『語彙意味論の新たな可能性を探って』，102-129，東京：開拓社。
- 奥田靖雄 (1977) 「アスペクトの研究をめぐって：金田一的段階」，『宮城教育大学・国語国文』8, 51-63.
- 小野尚之 (2005) 『生成語彙意味論』，東京：くろしお出版。
- 小野尚之 (2013) 『英語学の基礎』，第5章：語彙意味論, 119-145, 東京：くろしお出版。
- 小野尚之・由本陽子 (2015) 「語彙意味論の新たな可能性を探って」，由本陽子・小野尚之（編），『語彙意味論の新たな可能性を探って』，1-20, 東京：開拓社。
- 小野正樹 (2011) 「日本語思考動詞の主観性」，澤田治美（編），『ひつじ意味論講座第5巻：主観性と主体性』，193-209, 東京：ひつじ書房。
- 影山太郎 (1993) 『文法と語形成』，東京：ひつじ書房。
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論：言語と認知の接点』，東京：くろしお出版。
- 影山太郎 (2005) 「辞書的知識と語用論的知識：語彙概念構造とクオリア構造の融合にむけて」，影山太郎（編），『レキシコンフォーラム No.1』，65-101, 東京：ひつじ書房。
- 影山太郎 (2010) 「動詞の意味と統語構造」，澤田治美（編），『語・文と文法カテゴリーの意味』，153-171, 東京：ひつじ書房。
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」，『言語研究』15, 48-63.
- 金水敏・工藤真由美・沼田善子 (2000) 『時・否定と取り立て』，東京：岩波書店。
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間の表現』，東京：ひつじ書房。
- 工藤真由美 (2014) 『現代日本語ムード・テンス・アスペクト論』，東京：ひつじ書房。
- 国立国語研究所 (1985) 『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』，東京：秀英出版。

- 史曼 (2013) 『事象構造による日本語複合動詞の自他交替の分析』, 東北大学博士論文.
- 申亜敏 (2009) 『中国語結果複合動詞の意味と構造: 日本語の複合動詞・英語の結果構文との対照及び類型的視点から』, 東京外国語大学博士論文.
- 申亜敏・望月圭子 (2009) 「中国語の結果複合動詞—日本語の結果複合動詞・英語の結果構文との比較から—」, 小野尚之 (編), 『結果構文のタイポロジー』, 407-450, 東京: ひつじ書房.
- 沈力 (2013) 「結果複合動詞に関する日中対照研究: CAUSE 顕在型と CAUSE 潜在型を中心に」, 影山太郎 (編) 『複合動詞研究の最先端: 謎の解明に向けて』, 375-411, 東京: ひつじ書房.
- 高橋圭介 (2017) 「思考動詞のアスペクトに関する覚書」, 『北海道教育大学函館人文学会: 人文論究』 86: 63-69.
- 高橋太郎 (2003) 『動詞九章』, 東京: ひつじ書房.
- 中右実 (1994) 『認知意味論の原理』, 東京: 大修館書店.
- 姫野昌子 (1999) 『複合動詞の構造と意味用法』, 東京: ひつじ書房.
- 三原健一 (2004) 『アスペクト解釈と統語現象』, 東京: 松柏社.
- 望月圭子・申亜敏 (2011) 「日本語と中国語の複合動詞の語形成」『汉日语言对比研究论丛第二辑』 2, 46-72.
- 森山卓郎 (1988) 『日本語動詞述語文の研究』, 東京: 明治書院.
- 森山卓郎 (1992) 「文末思考動詞「思う」をめぐって一文の意味としての主観性・客観性」, 『日本語学』 11 (9): 105-116.
- 由本陽子 (2005) 『複合動詞・派生動詞の意味と統語—モジュール形態論から見た日英語の動詞形成—』, 東京: ひつじ書房.
- 由本陽子 (2013) 「語彙的複合動詞の生産性と 2 つの動詞の意味関係」, 影山太郎 (編), 『複合動詞研究の最先端: 謎の解明に向けて』, 東京: ひつじ書房.
- 吉永尚 (2008) 『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』 大阪: 和泉書院.

参考文献 (英)

- Charles N. Li and Sandra A. Thompson (1981) *Mandarin Chinese: A Functional Reference Grammar*. Berkeley: University of California Press.
- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Croft, William (2012) *Verbs: Aspect and Causal Structure*. Oxford: Oxford University Press.
- Cruse, D. Alan (1986) *Lexical semantic*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dowty, R. David (1979) *Word Meaning and Montague Grammar*. Dordrecht: D. Reidel.
- Endo, Y. and Zushi, M. (1993) Reply to Rizzi: binding in the minimalist program. In: Heizo Nakajima and Yukio Otsu (ed.) *Argument Structure: its Syntax and Acquisition*. 36-46. Tokyo: Kaitakusha.
- Fellbaum Christiane (1998) A semantic network of English verbs. In: Christiane Fellaum (ed.) *Wordnet: An electronic lexical database*, 69-104. Cambridge, MA: The MIT Press.
- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Hooper, J. B. (1975) On Assertive Predicates. In: John P. Kimball (ed.) *Syntax and Semantics 4*. New York: Academic Press.
- Ikegami, Yoshihiko (1988) Transitivity: Intransitivization vs. Causativization: Some Typological Considerations Concerning Verbs of Action. In: C. Duncan Rose and T. Vennemann (eds) *On Language: Rhetorica, Phonologica, Syntactica*, 389-401. London: Routledge.
- Jackendoff, Ray (1990) *Semantic Structures*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*. Chicago: University of Chicago Press.
- Levin, Beth and Malka Rappaport Hovav (1995) *Unaccusativity: At the Syntax- Lexical Semantics Interface*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Li, yafei (1990) On V-V compounds in Chinese. *Natural Language and Linguistic Theory* 8: 177-207.
- McCawley, James D. (1968) Lexical Insertion in a Transformational Grammar without Deep Structure. *Chicago Linguistic Society* 4, 71-80.

Pinker, Steven (1989) *Learnability and Cognition*. Cambridge, MA: MIT Press.

Pustejovsky, James (1998) *The Generative Lexicon*. Cambridge, MA: MIT Press.

Rappaport, Malka and Beth Levin (1988) What to do with θ - roles. In: W. Wilkins (ed) *Thematic Relations (Syntax and Semantics 21)* 7-36. Cambridge, MA: Academic Press.

Vendler, Zeno (1967) *Linguistics in Philosophy*. Ithaca: Cornell University Press.

資料

辞典：

『新明解類語辞典』(2015), 中村明(編) 東京: 三省堂.

『大辞林』(2006), 松村明(編) 東京: 三省堂.

『類語大辞典』(2002), 柴田武・山田進(編) 東京: 講談社.

コーパス：

国立国語研究所, 現代日本語書き言葉均衡コーパス「中納言」(BCCWJ),

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/.

BCC 语料库, <http://bcc.blcu.edu.cn/>

(荀恩东, 饶高琦, 肖晓悦, 臧娇娇 (2016) <大数据背景下的 BCC 语料库的研制>、《语料库语言学》)

謝 辞

本論文を作成するにあたり、指導教官の吉田光演教授から、丁寧かつ親切なご指導を賜りまして、心より感謝申し上げます。日本に来て、広島大学に入学した以来、長い間に吉田ゼミの研究室でお世話になりました。吉田先生に素晴らしい研究の環境を作ってください、自分の研究は円滑に進んでいけるようにさせて頂きました。ゼミではいつも多言語の研究の雰囲気、しかも皆、吉田先生のご指導による多様な言語学の研究をされている。吉田先生のお陰で、研究の視野は広げることができました。また、吉田先生から学会発表・学会参加の機会を頂き、自分の研究についてほかの研究者との交流もできました。本当に吉田先生に感謝の気持ちで一杯です。

そして、博士後期課程に在学している間、副指導教官である井上永幸教授、及び荒見泰史教授に研究のご指導を頂き、深く感謝しております。本論文の予備審査会と審査会にあたり、井上先生と荒見先生からの貴重なご意見がなければ、今の博士論文にはなりません。また、井上先生と荒見先生は励ましてくださり、今後もより一層頑張ります。

また、2015年ー2017年の間に、日本文部省国費留学生として、経済的な支援を頂き、誠にありがたい意を表す。

最後に、これまで自分の選んだ道へ進むことに対して、いつも見守ってくださった両親にも感謝の意を表す。